

金石文献による中国華嚴宗の研究 (一)

織田 顕祐

はじめに

中国の華嚴宗の教学は、唐代の賢首大師法藏によって大成された。それは、様々な形で展開した中国の仏教的思惟を総括し、以後の中国・朝鮮・日本の仏教の展開に大きな影響を与えた。その華嚴宗の成立と展開については、従来仏教内の文献によって教理史的に研究するのが主な方法であった。しかしながら、仏教は本来、人間の全体的な活動であるから、その全体像を解明するためには歴史的・社会的・時代的などの様々な角度からの研究が不可欠である。本研究は、そうした発想に基づいて、中国華嚴宗の思想的な展開を、仏教外の歴史資料とも言うべき金石文などによって解明しようとするものである。

今年度はそうした発想に基づいて、法藏の思想が完成するに至るまでの華嚴經学の歩みの中でこれまで取り上げられなかったものを中心に、解読作業の対象とすべき文献を選抜した。法藏は、歴史的には杜順・智儼という法脈を受け、同時代的には武周期という特徴ある時代を生きた。その生涯は、前半の長安の西太原寺時代と、後半の洛陽を中心とした翻訳三蔵の訳場参加時代とに二分して考えることができる。そうした状況の中で、法藏はどのようにして自己の思想を構築していったのか。この点についての手がかりを得るために、次に掲げる文献を選抜した。これらは法藏の思想構

築を、法脈の上から、また武周期という特異な時代状況の中から、重層的に明らかにしようというねらいをもって特に選抜したものである。いずれもこれまでの教学研究の中では取り上げられることの少なかった社会的・政治的な意味を持った文献である。

- ① 大唐華嚴寺杜順和尚行記（杜殷撰、原碑拓本）
- ② 方広大莊嚴經序（武后撰、普寧版宋碇沙大藏經）
- ③ 大周新訳大方広仏華嚴經序（武后撰、大正藏經）
- ④ 新訳大乘入楞伽經序（武后撰、普寧版宋碇沙大藏經）
- ⑤ 大宝積經並序（睿宗撰、高麗藏經）
- ⑥ 大宝積經述（徐鑄撰、普寧版宋碇沙大藏經）
- ⑦ 大周新翻三藏聖教序（武后撰、高麗藏經）
- ⑧ 大唐中興三藏聖教序（中宗撰、高麗藏經）
- ⑨ 大唐大薦福寺故大德康藏法師之碑（閻朝隱撰、大正藏經）
- ⑩ 大周西明寺故大德円測法師仏舎利塔銘並序（宋復撰、金石萃編一四六）
- ⑪ 大慈恩寺大法師基公塔銘並序（李弘慶撰、金石萃編一二三）
- ⑫ 唐故白馬寺主翻訳恵沼神塔碑並序（李邕撰、己統一一九五・四一九〇）

これらのうち、①は、華嚴宗の初祖とされる杜順の碑文である。この碑文は、杜順没後およそ二〇〇年を経て造られたものである。この時代は会昌の廃仏後の復仏が盛んな頃であり、この碑と宗密の碑とは同じ刻者によって製作されていることが明らかになった。これが何を意味するか更に検討を深めていきたい。②から⑧までは、武周期の經典翻訳の隆盛と法藏との関係を探るための資料である。⑨は、法藏没後直ちに造られたものであり、法藏の伝記に関する一次資

料である。これらによって、法蔵と則天武后の想像以上に深い関係が明らかになった。法蔵は、則天武后が太原寺を立てたときそこで出家し、後半は勅命によって提雲般若・実叉難陀・菩提流志・義浄らの訳場を變転した。これらの經典翻訳事業は、時の皇帝の權威発揚と深く結びついており、法蔵がそうした政治的な事情と深く結びついていたことが読み取れるのである。法蔵は決して出世間のみに住した教学者ではなかったのである。こうした点は今後更に深く解明しなければならない問題である。

なお、これらの文献の調査研究を通して、武周期の仏教の特徴的なあり方、またそこに活動した特定の仏教者達との関係を解明することが、法蔵の華嚴教学の背景を明らかにするための有力な手がかりであることが明らかとなった。この点も今後の研究課題としたい。

⑩⑪⑫は、華嚴教学と関係の深い法相宗の主な教学者の碑文である。これらのうち、円測と慧沼は法蔵と同じように訳場で活躍した人であり、法蔵と直接の面識が必ずやあったに違いない。これに対して基は、玄奘の訳場以外には参加しなかったようである。そして、法相宗の教学系統から見てこの三者は微妙な関係にある。円測は基によって異端扱いされて法相の伝統からはずされ、一方慧沼は基の直系として考えられてきた。しかしながら、両者は意外と近いところで活躍していたのである。法蔵が『五教章』や『起信論義記』『探玄記』を書いて性相融会を説いたのは、これらの人々と出会う前、つまり彼の生涯の前半期であり、その後の彼の思想は一体どのように展開していったのだろうか。こうした点に考えが及ぶとき、従来、これらの前半期の書疏を法蔵の代表的著作として扱って来たが、そうした伝統的な法蔵観を再吟味しなければならない必然性を感じるのである。

なお、⑫の慧沼碑は、検討段階で現在我々が基本テキストとしている『続藏經』版に長大な欠落が存在することが明らかになった。幸い『続藏經』の底本は、「藏經書院版」として京都大学図書館に保存され、それと校勘可能な写本が『法隆寺一切經』に存在することが判明したので、それを対照研究して基礎資料として活用できるようにしたいと考えてい

る。従って、⑫は稿を改めたいと思う。

以下は、本年の解説研究の成果である。各文献によって底本に違いがあり、使用文字等に異なりがあったので、掲載にあたっては、釈文・校勘は正字体に、訓読・語釈は常用体に統一するよう心がけた。

一 大唐華嚴寺杜順和尚行記

〔釋文〕（據原碑拓本）

大唐花嚴寺杜順和尚行記／鄉貢進士杜殷撰。朝議郎試左武衛長史上柱國董景仁書。／釋垂範忍辱爲戒。空寂爲體。求而非眞。智而可識。不遠不疎。志之奚有。了了／雪山。我佛當其識道。畏畏白馬。金字闌干。／巨唐。

粵以有京兆人者。堯之苗裔。生雱。國南門外村里。寶組繼□□飭／躬馨香內外。逮三千餘祀。俄扇雱西方之盛。降茲

吾師。師始齟齬遇／人表。未登十歲。緩集同年。生陟一基。而以敷足巖然。旋吐大乘之法。□□□／瞻善男子善女人。

無間大小。奔而趨而虔心諦聽。一演而伸衆。闢道而□□／舞之忘親愛而自聳。復次立機運巧。指事成績。洞然。些有祥

瑞。連縈龍□。□／力屹屹。其異不一。寔可繁詞。弱冠。師之兄有軍旅之患欲赴。跪而啓父／兮母兮。厥而賡去。允

斯所命。被甲鎧汪汪。執戈慷慨。逼至魚麗。勝而多捷。／卓尔哉出羣。隱而靡究。慈惠霑濡一師之卒。渠百結。師補綴

焉。渠有／咎酷答刑。師受答焉。負薪爨火。汲水燃之。渠盥濯。師之躬焉。渠役／烽火遊外。師之當焉。昔魏

禪師師主也。異曰倍固之日。臨流未濟／杖之功。登嶺有去虎之妙哉。員來婦人。有一子求之□斜皇擲于急流／中而復見

反胡。乃是宿根深債。歷縣側因。睹敗獵化變□龍。盛與屠沽豪／士交會。因勵承勵而息心歸依。師之門人動意尋五臺靈

境。欲覺疑／菩薩。給五銖道糧。乃失。師事。今有秦人王元順。承家穆穆。文武潤身。／在世有濟拔之惠。効主懷歲寒之

心。殷。師之裔孫也。已履儒迹。心達彼／岸。每耽儒典之暇。劇趣眞心。師之聖。寔非翰墨之能飭。大中六年□／

月二十四日記。 鐫玉册官邵建初刻字 院主僧談□。

〔訓読〕

大唐花嚴寺杜順和尚の行記。

郷貢進士杜殷撰。朝議郎・試左武衛長史・上柱国・董景仁書。

釈、垂範するに、忍辱を戒と為し、空寂を体と為す。求むるも真に非ず、智りて識るべし。遠からず（疎からず、志するも奚ぞ有らん。了々たる）雪山に、我が仏は其の論道に当たり、褰褰たる白馬に、金字は巨唐に聞かなり。粵に京兆の人なる者有り、堯の苗裔なり。雩国の南門外の村里に生まる。簪（組）繼□□飾、躬より馨香内外す。三千余祀に逮んで、俄かに雩の西方の盛を扇ぎて、茲の吾が師を降す。師（始めて齟齬にして）人表に邁り、未だ十歳に登らざるに、緩やかに同年を集めて、生は一基を陟るも、以て足に敷きて疑然として、旋りて大乘（の法を）吐く。□□□善男子善女人を瞻れば、大小を問つなく、奔り趨りて心を虔んで諦聴す。一たび演ずれば伸衆す。道に闡ち、（而）□□、之れを舞えば親を忘れ愛して自ずから聳つ。復た機を（立て）巧を運らせ、事を指し績を成す。洞然として些か祥瑞有り。（龍）□を連繫す。□力砭砭たり。其の異一ならず、寔に繁詞すべし。

弱冠にして、師の兄軍旅の患有り、赴かんと欲す。跪きて父に母に啓し、厥きて廢されて去り、允に斯の命ぜらるる所、甲鎧を被るに汪汪たり、戈を執りて慷慨す。逼りて魚麗に至り、勝んにして捷つこと多し。卓爾たるかな群を出でしこと、隠れて究むる靡し。慈恵もて一師の卒に霑濡す。渠の百結、師焉れを補綴す。渠に咎有り。咎刑に酷し、師咎を受く。薪を負いて火を爨し、水を汲みて之れを燃す。渠の盥もて濯がんとす、師之れ躬らす。渠の烽火に役あるも外に遊べば、師の焉れに當たるなり。

昔の魏禪師は師の主なり。異しみて曰く、（吾れに）倍するの日、流れに臨みて未だ濟杖ならざるの功、嶺に登りて虎を去らしむるの妙有るかなと。員に来れる婦人に一子有り。之れを□に求め、（斜）皇して（急流中に）擲つも復た見る（胡甸の反）。乃ち是れ宿根の深債なり。鼎を歴て側ち因りて、敗獵を睹るに化夔□□龍、盛んに（屠沽豪）士と交會す。励むに

因りて励みを承け、息心帰依す。

師の門人の動意、五台の靈境を尋ね、菩薩の五銖の道糧を給うの(疑を)覚せんと欲す。乃ち師事を失えり。今、秦人の王元順あり。家を承ること穆穆、文武身を潤す。世に在りて済抜の恵有り、主に効いて歳寒の心を懐く。

殷は師の裔孫なり。已に儒迹を履むも、心は彼岸(に達す)。毎に儒典に耽るの暇、劇だ真心に趣く。師の聖、寔に翰墨の能く飾するに非ず。大中六年□月二十四日記す。鐫玉冊官の邵建初刻字す。院主僧談□す。

【語釈】

【華嚴寺】 貞観十九年創建。万年県南三十里の北原にあり。(中国文化史蹟)

【杜順】 中国華嚴宗の初祖。伝記資料として『統高僧伝』巻二五、『華嚴経伝記』巻三・四などがある。鎌田茂雄『中国華嚴思想史の研究』参照。

【杜殷】 伝未詳

【朝議郎】 文散官。正六品上。

【左武衛長史】 従六品上。

【上柱国】 正二品。

【董景仁】 伝未詳。

【魚麗】 魚麗陣のこと。古代の戦陣の名。

【卓爾】 衆より抜きんでていること。『論語』子罕に「既竭吾才。如有所立卓爾。」とある。

【霑濡】 恩沢によくすること。司馬相如・難蜀父老文に「羣生霑濡。洋溢乎方外。」とある。

【百結】 やぶれた衣。杜甫・北征詩に「経年至茅屋。妻子衣百結。」とある。

【魏禪師】 法順の師である魏珍のこと。『統高僧伝』巻二五(大正五〇・六五三b)に記載あり。

【臨流未済杖之功】 法順が河を渡ろうとしたとき、水の流れがとまったことを言う。『統高僧伝』の法順伝参照。(大正五〇・六五三c)

【登嶺有去虎之妙】 出典未詳。

【員來】 ここに来る。『尚書』秦誓に「日月遄邁。若弗員來。」孔疏に「員即云也。」とある。

【動意】 伝未詳。

【菩薩給五銖道糧】 『統高僧伝』の、法順が慶州で齋食を行おうとしたとき、五百人分の食料しかなかったにも関わらず、倍の人数にも行き渡った故事をさすか。(大正五〇・六五三b)

【王元順】 伝未詳

【歲寒之心】 堅貞不屈の節操の喩え。『論語』子罕に「子曰。歲寒然後知松柏之後凋也。」とある。

(福井 敏)

二 方廣大莊嚴經序

〔釋文〕（據普寧版宋碇沙大藏經）

方廣大莊嚴經序。御製

朕聞眞空無象。非象教無以譯其眞。實際無言。非言緒無以拏其實。是以龍宮法鏡。圓照而於三千。鷲嶺玄門。方廣周於百億。師無師之智。必藉修多。學無學之宗。終資祇夜。自金人感夢。寶偈方傳。貝葉靈文。北天之訓逾遠。貫華微旨。西秦之譯更新。大乘小乘。逗根機而演教。半字滿字。逐權實而相曉。叡唐之御寓。載叶昌期。代傳三聖。季將七十。舜河與定水俱清。堯燭與慈燈竝照。緇衣西上。寧惟法顯之流。白馬東來。豈直摩騰之輩。大弘釋教。諒屬茲辰。朕爰自幼齡。歸心彼岸。務廣三明之路。思崇八正之門。往者夙邁。閔凶。遽違嚴蔭。近以孝誠無感。復背慈顏。露草之恨日深。風樹之悲鎖切。凡是二親之所蓄用。兩京之所舊居。莫不物結招提之宇。咸充無盡之藏。仍集京城大德等凡有十人。共中天竺三藏法師地婆訶羅。於西太原寺同譯經論。法師等竝業隣初地。道駕彌天。爲佛法之棟梁。乃慧海之舟楫。前後翻譯。凡有十部。以垂拱元年歲次大梁。月旅夷則。汗青方就。裝縹畢功。甘露之旨既深。大雲之喻方遠。庶永垂沙劫。廣濟塵區。傳火之義自明。瀉瓶之辯逾潤。朕以虛昧。欽承顧託。常願紹隆三寶。安大寶之鴻基。發揮八聖。固先聖之不業。所以四句微言。極提河之深致。一音妙義。盡庵園之奧旨。擊大法鼓。響振於無間。吹大法螺。聲通於有頂。爲閭室之明炬。所實昏衢之慧月。菩提了義。其在茲乎。部帙條流。列之於後。

〔訓読〕

方广大莊嚴經序。御製。

朕聞く真空は無象にして、象教に非らざれば以て其の真を訳るなし。實際は無言にして、言緒に非らざれば以て其の実を筌するなし。是を以て竜宮の法鏡は、円照三千に吊り、鷲嶺の玄門は、方広百億に周し。師と無師の智は、必ず修多に藉り、学と無学の宗は、終に祇夜に資る。金人の夢に感じ、宝篋方に伝わりてより、貝葉の靈文は、北天の訓に逾いよ遠く、貫華の微旨は、西秦の訳に更に新し。大乘小乗、根機に逗りて教を演べ、半字滿字、権実に逐いて相い曉かなり。叡唐の御寓、載は昌期に叶う。代よ伝わること三聖、季は將に七十にならんとす。舜河は定水と俱に清く、堯燭は慈燈と並に照らす。緇衣西上するは、寧ぞ惟だ法顯の流なりて、白馬東來するは、豈に直ちに摩騰の輩のみならん。大いに釈教を弘め、諒に茲の辰に属く。

朕爰に幼齡より、心を彼岸に歸し、務めて三明の路を広め、思いて八正の門を崇ぶ。往きに夙に閑凶を邁い、遽かに嚴蔭に違う。近きは孝誠の感ずるなく、復た慈顔に背く。露草の恨日に深く、風樹の悲鎮に切なり。凡そ是れ二親の蓄用する所、兩京の旧居する所は、惣て招提の字を結び、威な無尽の藏に充てざるはなし。仍りて京城の大徳等を集めること凡て十人有り。中天竺国三藏法師地婆訶羅と共に、西太原寺に於いて共に經論を訳せしむ。法師等は並びに業は初地に隣し、道は弥天に駕す。仏法の棟梁為りて、乃ち慧海の舟楫なり。前後翻訳すること、凡そ十部有り。

垂拱元年（六八五）歳は大梁に次る。月旅夷則を以て、汗青方に就り、装縹功を畢う。

甘露の旨既に深く、大雲の喻方に遠し。庶いねがわくは永く沙劫に垂れ、広く塵区を済う。伝火の義自ら明らかにして、瀉瓶の弁逾よ潤わんことを。朕虚昧を以て、欽んで顧託を承く。常に三宝を紹隆し、大宝の鴻基を安ず。八聖を發揮し、先聖の丕業を固くせんことを。所以に四句の微言は、提河の深致を極め、一音の妙義は、庵園の奥旨を尽くす。大法鼓を撃てば、響は無間に振い、大法螺を吹けば、声は有頂に通ず。閻室の明炬為り、実に昏衢の慧月なり。菩提の了義、

其れ茲に在るか。部帙の條流、之れを後に列す。

【語釈】

【方广大莊嚴經】 十二卷。一名神通遊戲とも。竺法護訳の普曜經の重訳。『開元釈教録』卷九（大正五五・五六三c）に記載有。

【真空】 真如が一切迷情所見の相を離れていること。華嚴では真如が理性超然として諸相を離れることを空と名づけ、真空とは四法界中の理法界とする。

【實際】 真如の実理を極めてその窮極に至ること。

【法鏡】 大法がよく物を照らすことを鏡に喩えた語。ここでは竜宮に藏されていた法華經のこと。

【玄門】 奥深い法門のこと。華嚴宗では十玄門を立てる。これは四種法界中の事事無礙法界の相を示したもので、この義に通じれば華嚴大經の玄海に入ることができるため、玄門という。

【無師之智】 無師智。無師独悟の仏智をいう。『法華經』譬喻品に「求一切智、仏智、自然智、無師智。」（大正九・一三b）とある。

【修多】 修多羅のこと。言教が法義を貫いて散逸しないこと。

【祇夜】 經文の義に應じて更に偈頌したもの。重頌。『大乘義章』一に「祇夜此翻名為重誦偈也。以偈重誦修多羅中所說法義。故名祇夜。」（大正四四・四七〇a）とある。

【貫華】 經典の偈頌のこと。『法華經文句』一上に「仏赴緣作散花貫花兩説。」（大正三四・一c）とある。

【根機】 人の性を譬えて根といい、根の發動するところを機という。

【半字滿字】 梵語の悉曇章の生字の根本を半字、余章の文字義理共に具足するものを滿字とする。ここでは半字を小乗、滿字を大乘にたとえる。

【權實】 一時期に適する法（權）と究竟不變の法（實）。

【代伝三聖彪將七十】 この場合の三聖は太祖李淵・太宗李世民・高宗李治のこと。太祖の即位（六一八）から高宗の崩御（六八三）の六十五年のことを指して七十という。

【舜河与定水俱清】 舜の時代に禹が治水したことをいうものか？

【堯燭与慈燈並照】 出典未詳。

【三明】 「宿命、天眼、漏盡。名爲三明。」

【八正】 八正道（正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定）のことか。

【閔凶】 親の喪。『春秋左氏伝』宣公十二年に「寡君少遭閔凶、不能文。」とある。

【蔽陰】 未詳。ただし「蔽陰」ならば、はげしい陰気。梁簡文帝・雪朝詩に「同雲凝暮序、蔽陰屯広隰。」とある。

【露草之恨日深】 露草は悲しみのたとえ。

【風樹之悲鎮切】 風樹は亡き父母をおもうこと。

【地婆訶羅】 日照とも。儀鳳の初来遊し、垂拱年間までに十八部の経論を訳出した。

【西太原同訳経論】 『大周刊定衆経目錄』 卷一・方広大莊嚴経の項に、「垂拱元年三藏地婆訶羅於西京西太原寺帰寧院訳。」（大正五五・三七九c）とある。

【月旅】 月次のこと。陸顯・石闕銘（『文選』 卷五十六）に「於是歲次天紀、月旅太簇、皇帝御天下之七載也。」とある。

【夷則】 陰曆七月の異名。本来は十二律の一で第九番目の律を指す。『史記』 律書に「七月也、律中夷則。」とある。

【汗青方就】 汗青は汗簡に同じ。書冊の意。筆写を終えたことをいう。

【装纒】 装景のことか。表装すること。

【沙劫】 恒河沙の劫。永い時間の譬え。

【瀉瓶】 水を瓶に写すように、教えを次に伝えること。

【紹隆】 法を續いて益盛ならしむこと。『維摩経』 仏国品に「紹隆三宝。」（大正一四・五三七a）注に「肇曰、繼仏種則三宝隆。」（大正三八・三二八a）とある。

【八聖】 八正に同じ。

【提河】 阿利羅跋提河の略。舍衛城岸の河名。

（福井 敏）

三 大周新譯大方廣佛華嚴經序

〔釋文〕

大周新譯大方廣佛華嚴經序

天册金輪聖神皇帝製（據大正藏經）

蓋聞造化權輿之首。天道未分。龜龍繫象之初。人文始著。雖萬八千歲。同臨有截之區。七十二君。詎識無邊之義。由是人迷四忍。輪迴於六趣之中。家纏五蓋。沒溺於三塗之下。

及夫鷲巖西峙。象駕東驅。慧日法王。超四大而高視。中天調御。越十地以居尊。包括鐵圍。延促沙劫。其爲體也。則不

生不滅。其爲相也。則無去無來。念處正勤。三十七品。爲其行。慈悲喜捨。四無量法。運其心。方便之力難思。圓對之機多緒混大空而爲量。豈筭數之能窮。入纖芥之微區。匿名言之可述。無得而稱者其唯大覺歟。

朕曩劫植因。叨承

佛記。金仙降旨。大雲之偈先彰。玉宸披祥。寶雨之文後及。加以積善餘慶。俯集微躬。遂得地平天成。河清海晏。殊禎絕瑞。既日至而月書。貝牒靈文。亦時臻而歲洽。逾海越漠。獻酬之禮備焉。架險航深。重譯之辭罄矣。大方廣佛華嚴經者。斯乃

諸佛之密藏。如來之性海。視之者莫識其指歸。挹之者罕測其涯際。有學無學。志絕窺覷。二乘三乘。寧希聽受。最勝種智。莊嚴之迹既隆。普賢文殊。願行之因斯滿。一句之內。包法界之無邊。一毫之中。置刹土而非隘。摩竭陀國。肇興妙會之緣。普光法堂。爰敷寂滅之理。

緬惟奧義。譯在晉朝。時逾六代。年將四百。然圓一部之典。纔獲三萬餘言。唯啓半珠。未窺全寶。朕聞其梵本。先在于闐國中。遣使奉迎。近方至此。既覩百千之妙頌。乃披十萬之正文。粵以證聖元年。歲次乙未。月旅沽洗。朔惟戊申。以其十四日辛酉。於大遍空寺。親受筆削。敬譯斯經。遂得甘露流津。預夢庚申之夕。膏雨灑潤。後覃壬戌之辰。式開實相之門。還符一味之澤。以聖曆二年。歲次己亥。十月壬午朔。八日己丑。繕寫畢功。添性海之波瀾。廓法界之疆域。大乘頓教。普被於無窮。方廣眞筌。遐該於有識。豈謂後五百歲。忽奉金口之言。娑婆境中。俄啓珠函之祕。所冀。闡揚沙界。宣暢塵區。竝兩曜而長懸。彌十方而永布。

一窺寶謁。慶溢心靈。三復幽宗。喜盈身意。雖則無說無示。理符不二之門。然因言顯言。方闡大千之義。輒申鄙作。爰題序云

* 底本を『大正新脩大藏經』卷十所収「大周新譯大方廣佛華嚴經序」とし、同本及び『中華大藏經』卷十二の対校記を用いて校勘を施し、さらに唐・澄観『華嚴經疏鈔玄談』卷九（『正統藏經』第八册所収）に含まれる本文を対校に加えた。なお、磧砂藏、金藏、北藏、清藏にはこの序が存在せず、『中華大藏經』は嘉興（徑山）藏本を底本としている。

1 「大周新譯」、嘉興藏本（明本）、南藏本この字無し。
2 明註に「天册金輪聖神皇帝製、北藏は唐武則天製に作る」という。

2 「天册」、宮本「天策」に作る。
3 「大空」、玄談本「太空」に作る。
4 「算數」、大正藏本のみ「算數」に作る。他本によって改む。
5 「無得」、玄談本「無德」に作る。
6 「植因」、嘉興藏本「殖因」に作る。

7 「金仙」、思溪藏本（宋本）、南藏本「金山」に作り、普寧藏本（元本）、嘉興藏本「金僊」に作る。
8 「披祥」、嘉興藏本「披詳」に作る。
9 「貝牒」、嘉興藏本（明本）「貝葉」に作る。
10 「逾海」、玄談本「踰海」に作る。
11 「辭」、三本、玄談本「詞」に作る。
12 「時逾」、玄談本「時踰」に作る。
13 「一部之典」、明本、宮本、上に「圓」字あり。これによって補う。

14 「窺全寶」、玄談本「窮全寶」に作る。
15 「斯經」、嘉興藏本「斯文」に作る。
16 「實相」、玄談本「相」字無し。
17 「眞筌」、嘉興藏本「眞詮」に作る。
18 「然」、明本、下に「而」字あり。

I

〔訓読〕

蓋し聞くならく、造化権輿の首、天道未だ分たれず、亀龍繫象の初、人文始めて著る、と。万八千歳同に有截の区に臨むと雖も、七十二君も詎ぞ無辺の義を識らんや。是に由って人は四忍に迷って六趣の中に輪迴し、家は五蓋に纏われて三塗の下に没溺す。

【語釈】

【造化権輿】 造化は自然の創造者、或いは自然そのもの。『莊子』大宗師に「今一犯人之形、而曰人耳人耳、夫造化者必以為不祥之人。今一以天地為大鑪、以造化為大冶、惡乎往而不可哉」とある。権輿は始まり。『爾雅』釈詁第一上に「初・哉・首・基・肇・祖・元・胎・俶・落・權・輿・始也」とある。また『漢書』卷八十七上揚雄「於是玄冬季月、天地隆烈、万物権輿於内、徂落於外。」顔師古注に「権輿、始也。徂落、死也。」とある。

【天道未分】 天地の始まりの混沌とした状態。魏・張揖『広雅』(『芸文類聚』卷一所引)「太初氣之始也。清濁未分。」華嚴經玄談「はこれを、易緯を引いて五運の時と理解する。」

【亀龍繫象】 亀龍は河図洛書を負って現れる靈獸を指し、すなわち河図洛書そのもの。『易』繫辭伝の孔穎達疏に引く『春秋緯』に「河以通乾出天苞。洛以流坤吐地符。河龍図発、洛亀書感。河図有九篇、洛書有六篇。」とあり、孔安国の注には「河図則八卦是也、洛書則九疇是也」とする。また『後漢書』卷八十二方術列伝にも「至乃河洛之文、亀龍之図、箕子之術、師曠之書、緯候之部、鈐決之符、皆所以探抽冥蹟、参驗人区、時有可聞者焉。」と見える。繫象は現象を示すこと。『漢書』卷二十五上郊祀志に「天子曰…「問者河溢、歲數不登、故巡祭后土、祈為百姓育穀。今年豐穰未報、鼎臯為出哉。」有司皆言…「聞昔泰帝與神鼎一、一者一統、天地万物所繫象也。黃帝作宝鼎三、象天地人。禹収九牧之金、鑄九鼎、象九州。皆嘗醵享上帝鬼神。」とある。

る。

【人文始著】 文化、文明をいう。『易』賁・彖伝に「觀乎天文以察時變、觀乎人文以化成天下。」とあり、疏に「言聖人觀察人文、則詩書礼樂之謂、当法此教而化成天下也。」という。

【万八千歳】 神話時代の帝王が一万八千年間世界に君臨したこと。三国呉・徐整『三五曆紀』(『芸文類聚』卷一所引)に「天地混沌如雞子。盤古生其中。万八千歳。天地開闢。陽清為天。陰濁為地。盤古在其中。一日九變。神於天。聖於地。天日高一丈。地日厚一丈。盤古日長一丈。如此万八千歳。天數極高。地數極深。盤古極長。後乃有三皇。」とある。また、『帝系譜』(『芸文類聚』卷十一所引)にも「地皇治一万八千歳。以火德王。」と見える。『華嚴經玄談』は三皇が(天皇・地皇・人皇)が四千五百年から一万八千年もの間、統治していたという引証として『帝王甲子記』などをあげる。

【有截之区】 均一の区域。『詩』商頌・長筭「武王載旆、有虔秉鉞、如火烈烈、則莫我敢曷、苞有三蘂、莫遂莫達、九有有截。」七十二君】泰山に封禪したと伝えられる七十二の君主。『史記』卷一一七司馬相如伝に「或謂且天為質閭、珍符固不可辭。若然辭之、是泰山靡記而梁父靡幾也。亦各並時而榮、咸濟世而屈、說者尚何称於後、而云七十二君乎。」とあり、『管子』封禪篇にも「古者封泰山禪梁父者七十二家、而夷吾所記者十有二焉。」と見える。

【無辺之義】 かぎりないこと。『俱舍論』卷十九、中論、『大智度論』卷七十（大正二五・五四七a）。『八十華嚴』（大正一〇・二〇c）「法界平等無差別 具足無量無辺義」

【人迷四忍】 人々が四忍にまよう。『思益梵天所問經』卷一・四法品第二（大正二五・三五c）「梵天。菩薩有四法。善出毀禁之罪。何等四。一者得無生法忍。以諸法無來故。二者得無滅忍。以諸法無去故。三者得因緣忍。知諸法因緣生故。四者得無住忍。無異心相續故。是為四。」

【六趣】 六道に同じ。衆生が業によって輪廻する六種の世界（地

獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）。『法華經』方便品（大正九・八b）他。『八十華嚴』（大正一〇・九四a）「三世六趣各不同 晝夜月時有縛解」

【家纏五蓋】 家々が五種の煩惱にとらわれる。五蓋は心を覆う五種の煩惱。貪欲、瞋恚、昏沈、掉挙、疑の五つ。『中阿含經』卷一〇（大正一・四八八a）他。

【三塗】 地獄と餓鬼と畜生の世界。三惡道をいう。『無量壽經』（大正一二・二七〇b）。『六十華嚴』（大正九・七七四c）「安住功德道 究竟滅三塗」

II

【訓読】

夫の鷲巖西に峙し、象駕東に驅するに及んで、慧日法王四大を超えて高視し、中天調御十地を越えて以て尊に居す。鉄围を包括して、沙劫を延促す。其の体為るや、則ち不生不滅なり。其の相為るや、則ち無去無來なり。念処正勤の三七品を其の行と為す。慈・悲・喜・捨の四無量の法をして其の心を運らす。方便の力は難思にして、円対の機は多緒なり。大空に混じて量と為し、豈に算数の能く窮めんや。纖芥の微区に入りて、名言の述ぶべきに匪らず。徳にして称する者の無きは、其れ唯だ大覺のみか。

【語釈】

【鷲巖西峙】 靈鷲山が西に屹立していること。靈鷲山は釈尊說法の地で『法華經』、『無量壽經』などもここで説かれたとされる。

摩竭陀国、王舎城東北にあった。

【象駕】 典拠未詳。『華嚴經玄談』は二通りの解釈を示し、ひと

つは一千年後の像法の時代に仏教が中国にもたらされたことを指し、ひとつは象が経を載せてくることを鸞巖の対として用いたとしている。

【慧日法王】 仏陀のこと。

【四大】 地・水・火・風の一切の物質を構成する四つの元素。『阿含經』卷七（大正一・四六四c）。『六十華嚴』（大正九・四二七b）「仏子、一切衆生四大、悉非我非我所、云何衆生。」『華嚴經玄談』は『老子』道經・二十五章を引き、四大を人・地・天・道のことであると理解する。

【中天調御】 中天は中天竺。調御は仏が衆生の身・口・意を統御し、すべての悪い行為を制すること。調御丈夫ともいい、仏の十号のひとつ。『法華經』卷一（大正九・三三c）。『六十華嚴』（大正九・四二五b）「彼住寂滅法 是則方便力 隨順調御士 最勝仏菩提」。『八十華嚴』（大正一〇・六四b）「若以威德色種族 而見人中調御師。」

【十地】 菩薩が修行すべき五十二の段階のうち、特に第四十一位から第五十位までを十地という。『華嚴經』十地品（大正九・五四二c）「我如是説。何等為十。一曰歡喜。二曰離垢。三曰明。四曰焰。五曰難勝。六曰現前。七曰遠行。八曰不動。九曰善慧。十曰法雲。是十地者。」

【包括鉄囲】（三千世界をとりかこむ）鉄囲山を包み込む。『法華經』見宝塔品（大正九・三三b）。『六十華嚴』（大正九・五七三b）「是菩薩或於一微塵中、置三千大千世界鉄囲山川、而不迫迮。」

【延促沙劫】 永遠にも等しい長い時間を引き延ばす。沙劫は恒河沙の劫でガンジス川の砂の数ほど多い劫（最も長い時間単位）。『六十華嚴』（大正九・七六五b）「我於彼供養七十恒河沙等諸仏如来。善男子、如是憶念恒河沙劫。」

【不生不滅】 生じることも滅することもないこと。解脱の境地。『中論』觀因緣品第一。『六十華嚴』（大正九・三九七b）「功德淨眼天。於一切法不生不滅方便法門。而得自在。」『八十華嚴』（大正一〇・五c）「清淨功德眼天王。得知一切法不生不滅不來不去無功用行解脱門。」

【無去無來】 『八十華嚴』（大正一〇・一九b）「广大寂靜三摩地不生不滅無來去」

【念処正勤】 念処は心静かな觀想。『維摩經』（大正一四・五三八b）。正勤は正しい努力。『俱舍論』卷四。『維摩經』（大正一四・五三八b）。『六十華嚴』（大正九・七八一a）「明總持諸諦諸弁止觀解脱緣起。念処正勤神足根力覺道。」

【三十七品】 三十七の修行方法。三十七道品の略。四念処・四正勤・四神足・五根・五力・七覺支・八正道の總計。『維摩經』（大正一四・五三八b）。『八十華嚴』（大正一〇・一九六c）「如是四摂四持。三十七品。三解脱門。略説乃至一切菩提分法。」

【四無量】 四無量心のこと。慈・悲・喜・捨の四つ。『維摩經』（大正一四・五三八b）。『八十華嚴』（大正一〇・八九a）「教住四禪。經於百千劫。教住四無量心。」

【方便之力難思】 方便力はすぐれた教化方法。てだての智慧の

力。『法華經』卷一（大正九・六a）、『維摩經』（大正一四・五四三c）。難思は思惟を超えている意。『八十華嚴』（大正一〇・七b）「示彼難思方便門、此慧光王之所悟」

【円対之機多緒】未詳。すべてのものに普く対応することか。多緒は多様であること。『文選』卷三十九任昉 奉答勅示七夕詩啓「臣昉啓、奉勅并賜示七夕五韻。窃惟帝・多緒、俯同不一。」

【大空而為量】大空は十方世界が空であること。『大品般若經』問乘品（大正八・二五〇b）。或いは大空三昧のことか。『八十華嚴』（大正一〇・一九四c）「仏子。菩薩住此現前地。得入空三昧。自性空三昧。第一義空三昧。第一空三昧。大空三昧。合空三昧。起空三昧。如実不分別空三昧。」

【算数】算数は算数に同じ。数えること。『八十華嚴』（大正一〇・九四a）「以彼而校菩提心 算数譬論無能及 一念能過塵數刹如是経於無量劫」

【名言之可述】名目と言句。『八十華嚴』（大正一〇・一七一c）「願我能為一切衆生。演說三世諸仏法海。於一一法生起。一一法義理。一一法名言。一一法安立。一一法解説。一一法顯示。」

III

【訓読】

朕、曩劫に因を植して、叨くも仏記を承く。金仙旨を降して大雲の偈先ず彰われ、玉宸祥を披き宝雨の文後に及べり。加うるに、積善余慶俯して微躬に集い、遂に地平天成河清海晏を得たり。殊禎絶瑞は既に日ごとに至って月ごとに書し、

一一法門戸。一一法悟入。一一法觀察。一一法分位。悉得無辺無尽法藏。」

【無得而称者】称えることもできないものは……である。『論語』泰伯に「子曰。泰伯、其可謂至徳也已矣。三以天下譲、民無得而称焉。」とある。『華嚴経玄談』は「得」を「徳」に作るが、これは『論語正義』に「釈文出、民無得云本亦作徳。案、『後漢書』丁鴻伝論引、孔子曰泰伯、三以天下譲民無徳而称焉。李注云、『論語』載孔子之言也、又引鄭元注云、三譲之美皆蔽隠不著故人無徳而称焉、拠此釈文所云作徳者、乃鄭君所據之本也。然字雖作徳而義仍為得。蓋徳得古字通。」とあるように、古くは「得」を「徳」に作るテキストが行われていたことによるものか。『華嚴経玄談』は「無能尽説仏功徳、即其事也」と「徳」字に意味を持たせて読んでいるが、もとの序もこの通りであったかは定かでない。

【大覚】偉大なさとり。『八十華嚴』（大正一〇・四六b）「有世界。名無尽日光明。仏号最勝大覚慧。此上過仏刹。微塵数世界。」

貝牒靈文も亦た時々には疎りて歳ごとに洽ねし。海を逾え漠を越えて猷驟の礼備わる。險しきに架し深きに航して重訳して辞罄くせり。

【語釈】

【曇劫植因】曇劫は限らないむかし。『八十華嚴』（大正一〇・二

二b）「仏於曇劫為衆生 修習無辺大悲海。」植因は適例未詳。

善因を積むことか。具体的にはあとの『大雲經』及び『宝雨經』などに記されるように因縁を重ねて女皇帝となるに至ったことをいうか。

【叨承】拝承する。李嶠 扈從還洛呈侍從群官に「顧隨談笑密叨承郎廟選」とある。

【金仙】仏陀のこと。

【大雲之偈】『大方等無相經』（大正一二・北涼曇無讖訳）を指す。この經の淨光天女授記説は『旧唐書』卷六則天皇后本紀・載初元（六九〇）年に「有沙門十人偽撰大雲經、表上之、盛言神皇受命之事。制頒於天下、令諸州各置大雲寺、総度僧千人。」とあるように、武周革命に正当性を付与するものとして利用された。

【玉宸披祥】玉宸は玉で飾られた天子の屏風。

【宝雨之文】唐達摩流支訳『仏説宝雨經』（大正一六）を指す。内容は梁曼陀羅仙訳『玉雲經』（大正一六）と同じであるが、序文の終わりに東方の日月淨光天子に対して滅後第四の五百年に

瞻部洲東北方摩訶支那国において女身を現じ、王となって正法治化することを読む。前の『大雲經』と同じく女主である武則天にとって都合の良い内容を持つ。

【積善余慶】善行を積むとその報いとして幸福が子孫に与えられること。『易』坤「積善之家、必有余慶。積不善之家、必有余殃。臣弑其君、子弑其父、非一朝一夕之故。其所由来者、漸矣。由弁之不早弁也。」

【地平天成】『尚書』虞書・大禹謨「帝曰、兪、地平天成、六府三事允治。万世永頼、時乃功。」

【河清海晏】黄河の水が清まり、四海がおだやかであること。国内が安定し、天下泰平である喩え。唐・顧況八月五日歌「率土普天無不楽 河清海晏窮寥廓。」

【猷驟之礼備焉】珍宝を献上する礼が備わっている。驟は驟に同じ。『詩』魯頌・駉之什・泮水に「憬彼淮夷。来猷其驟。元龜象齒。大賂南金。」とある。『梁書』卷五十四 諸夷 扶南国「天監二年、跋摩復遣使送珊瑚佛像、并猷方物。詔曰、扶南王橋陳如閼邪跋摩、介居海表、世慕南服、厥誠遠著、重訳猷驟。宜蒙酬納、班以榮号。可安南將軍、扶南王。」「礼記」樂記「及夫、

敦楽而無憂。礼備而不偏者、其唯大聖乎。」

【重訳之辭啓矣】 通訳の言葉を尽くす。『詩』小雅・谷風之什・

蓼我「餅之啓矣。維嚙之恥。」

IV

【訓読】

大方広仏華嚴経とは、斯れ乃ち諸仏の密蔵にして如来の性海なり。之を視る者は其の指帰を識ること莫く、之を抱む者は其の涯際を測ること罕なり。有学無学は志窺視を絶え、二乗三乗は寧ぞ聴受することを希わんや。最勝種智は莊嚴の跡既に隆んにして、普賢文殊願行の因斯に満つ。一句の内、法界の無辺を包み、一毫の中、刹土を置くも隘きに非ず。摩竭陀国、肇めて妙会の縁を興し、普光法堂、爰に寂滅の理を敷く。

【語釈】

【諸仏之密蔵】 『八十華嚴』（大正一〇・四二八b）「則已能持一切仏法蔵。則已能持一切諸仏菩薩秘密蔵。」

【如来之性海】 性海は本性（または実性）の海の意。真理を海にたとえたもの。『五教章』（大正四五・四七七a）。『八十華嚴』（大正一〇・三六二a）「能捨一切諸妄見海。能觀一切諸法性海。」

【二乗】 声聞乗と縁覚乗。師の教えによってさとる人と理法を体得して自らさとるひと。『宝性論』（大正三一・八二五a）、『起信論』（大正三二・五七五c）。

【三乗】 声聞乗と縁覚乗と菩薩乗という三つの実践の仕方。『法

華経』方便品（大正九・六a）。②声聞と縁覚と菩薩のこと。これで仏道修行者の全体を総括する。『宝性論』（大正三一・八二六b）。

【聴受】 教えを聞いて信ずること。『法華経』方便品（大正九・七a）。

【最勝】 ①最もすぐれていること。『八十華嚴』（大正一〇・三二c）「從於福海生 安住於智地 觀察一切法 修行最勝道。」

【種智】 一切種智の略。一切をその具体的な特殊相において知る智慧。または、仏の一切智。最高の完全無欠なさと。『法華経』卷一（大正九・七b）。

【莊嚴之跡】①建立すること。見事に配置、配列されていること。『無量壽經』(大正一一・二六七c)。②裝飾の意。嚴かに飾られた模様、すがた。『六十華嚴』卷三(大正九・四一〇c)。

【普賢文殊】普賢菩薩と文殊師利菩薩。釈迦仏の脇侍として仏の理・定・行の徳を司るとする。普賢菩薩は『華嚴經』普賢行願品に十大願を発す。『六十華嚴』(大正九・六七六a)「重閣講堂。与五百菩薩摩訶薩俱。普賢菩薩。文殊師利菩薩。而為上首。」

『八十華嚴』(大正一〇・四二八a)「汝当往大智 文殊師利所 彼当令汝得 普賢深妙行」

【法界之無辺】『八十華嚴』(大正一〇・三八八b)「广大智光明 故。我知法界無辺。見一切仏所知見故。我知法界無限。」

【置刹土而非隘】『八十華嚴』(大正一〇・三二一a)「法界諸刹土

周行無所礙」

【摩竭陀国】マガダ国。中インドの古国の名。インド十六大国の一。

【普光法堂】『華嚴經』第二、第七、第八会の説法をした宮殿。マガダ国の菩提道場のそばにあつたといわれる。『六十華嚴』(大正九・六三二b)「爾時世尊。在摩竭提国寂滅道場普光法堂。坐蓮華藏宝師子座。」

【寂滅之理】『華嚴經』寂滅道場会に仏が菩提樹の下で悟りを開いたことか。寂滅は涅槃の意訳。『維摩經』(大正一四・五四一a)、「六十華嚴」卷五(大正九・四二三b)、「無量壽經」(大正一一・二六九c)。

V

〔訓読〕

緬かに惟うに奥義、訳は晋朝に在り。時六代を逾えて、年将に四百にならんとす。然るに一部の典を円かにせんとするも、纔かに三万余言を獲るのみ。唯だ半珠を啓きて、未だ全宝を窺わざるなり。朕其の梵本の先に于闐國中に在ることを聞きて、使を遣して奉迎せしめ、近ごろ方めて此に至る。既に百千の妙頌を睹、乃ち十万の正文を披く。粵に証聖元年、歳次乙未、月旅沽洗、朔惟れ戊申、其の十四日辛酉を以て、大遍空寺に於いて親ら筆削を受け、敬しく斯の経を訳す。遂に甘露流津して、預め庚申の夕に夢み、膏雨灑潤して後ち壬戌の辰に覃ぶことを得て、式って実相の門を開き、還た一味の沢に符す。聖暦二年、歳己亥に次し、十月壬午の朔、八日己丑を以て、繕写功を畢う。性海の波瀾を添え、

法界の疆域を廓らかにす。大乘の頓教普く無窮に被り、方広の真筌返かに有識を諒う。豈に謂わんや、後五百歳に忽ちに金口の言を奉じ娑婆境中に俄かに珠函の秘を啓くと。冀う所は、沙界に闡揚し、塵区に宣暢し、両曜並せて長しえに懸かり、十方に弥くして永く布せんことを。

【語釈】

【訳在晋朝】 東晋仏陀跋陀羅訳『大方広仏華嚴經』（三十四品、六十巻）を指す。七つの場所と八つの会座（七処八会）で説法される。

【時逾六代年将四百】 六代は晋・宋・齊・梁・陳・隋。『唐經』の翻訳が始まった証聖元（六九五）年の時点では、東晋末元熙二（四二〇）年の旧訳成立からまだ二七五年しか経ていない。

【唯啓半珠】 文が欠けていて、理解が完全にならないこと。

【于闐国】 コータン Khotan のこと。新疆タリム盆地南部、崑崙山脈北麓にあったオアシス都市。天山南路南道の要地を占め、中国とインド、イランとの間の貿易の中継地として栄えた。法顯や玄奘が訪れた頃には、大乘仏教の中心地となっていたが、十一世紀初頭にイスラム化し、その仏教文物はまったく壊滅した。

【証聖元年】 証聖元（六九五）年三月辛酉（十四日）大遍空寺に訳経を始めたとき、その前後一日（庚申十三日・壬戌十五日）にそれぞれ瑞兆があった。

【実相之門】 実相の法門。実相はすべてのものの真実のありのま

まのすがた。『法華經』方便品（大正九・五c）「唯仏与仏乃能究尽諸法実相。」

【一味之沢】 あらゆる事物が本来平等であることを、海水のすべてが同一の塩味であるのに喩える。無差別のこと。『宝性論』（大正三一・八三五c）

【聖暦二年】 聖暦二（六九九）年十月八日に訳経作業が終わった。

【大乘頓教】 『華嚴經』の教えを指す。

【無窮】 終わりのないこと。『長阿含經』卷一（大正一・七b）

【方広真筌】 方広は大乘經典をいう。真筌の筌は顯、真実の理法をあらわす文句をいう。

【有識】 識を有する者。有情に同じ。一切の生類の総称。『六十華嚴』（大正九・五六〇a）「從是則生思 身口業行果 從行故有識 即生於名色」

【後五百歳】 仏の滅後、五百年以上の後、像法の時代であることをいう。『中論』觀因緣品第一（大正三〇・一b）に「仏滅度後、後五百歳像法中。」とある。『華嚴經玄談』によれば、如来

滅後に五五百年があり、当時は第四百五年、つまり仏滅してより千五百年以上後の時代であるという。

【娑婆境中】 この世。『六十華嚴』（大正九・四一九a）「此娑婆世界中。諸四天下教化一切。種種身。種種名。処所形色長短壽命。諸得。諸入。諸根。生処。業報。如是種種不同。衆生所見亦異。」

【珠函之秘】 『華嚴經玄談』によれば、『大智度論』第三十七（大正二五・四七九a）に「舍利凡夫聖人所貴。函篋世間受樂人所貴。舍利出世間世間受樂人所貴。般若如意宝珠。函篋是舍利。」

VI

【訓読】

一たび宝偈を窺わば慶び心霊に溢れ、三たび幽宗を復すれば喜び身意に盈つ。無説無示に則ると雖も、理は不二の門に符す。然るに言に因って言を顯らかにして、方めて大千の義を闡らかにす。輒ち鄙作を申べて、爰に序に題すと云う。

【語釈】

【三復幽宗】 奥深い教え。『弘明集』卷二十九北魏・高允「鹿苑賦」「追鹿野之在昔。興三転之高義。振幽宗於已永。曠千載而有寄。」三復は『論語』先進に「南容三復白圭。孔子以其兄之子妻之。」とある。

【則無説無示】 『八十華嚴』（大正一〇・二六八c）「無言無示。」

舍利中雖無般若。般若所薰故得供養。復次諸聖法中般若第一。無可譬喻。以世間人貴是宝珠故。以珠為喻。人見如意宝珠所願皆得。若見珠所住処。亦得少願。」とあるのに基づき、如来が函で『華嚴經』が如意珠であるという。

【兩曜】 日月をいう。具体的には旧訳、新訳の『華嚴經』を並び掲げることを用うか。『弘明集』（大正五二・二四〇b）梁太子綱「大法頌并序」「是以天德一於上。地数二於下。復朗參辰。不易日月。兩曜如合璧。五精如連珠。」

不可宣説。」

【符不二之門】 不二の理を示す法門。相對の差別を超えた絶対平等の境地。『維摩經』（大正一四・五五〇b）、『八十華嚴』（大正一〇・二二五a）「衆生難聞。菩薩悉知入不二門。」

【大千之義】 大千は三千大千世界の略称。『俱舍論』卷十一。「六

十華嚴』(大正九・四二八a)「猶如大梵王 普應現大千 其身 無別異 諸仏法如是」

(石川彰彦)

四 新譯大乘入楞伽經序

〔釋文〕(據普寧版宋碇沙大藏經)

新譯大乘入楞伽經序。御製

蓋聞。摩羅山頂。既最崇而最嚴。楞伽城中。實難往而難入。先佛弘宣之地。曩聖修行之所。爰有城主。號羅婆那。乘宮殿以謁尊顏。奏樂音而祈妙法。因鬘峯以表興。指藏海以明宗。

所言入楞伽經者。斯乃諸佛心量之玄樞。群經理窟之妙鍵。廣喻幽旨。洞明深義。¹不生不滅。非有非無。絕去來之二途。離斷常之雙執。以第一義諦。得最上妙珍。體諸法之皆虛。知前境之如幻。混假名之分別。等生死與涅槃。

大慧之問初陳。²法王之旨斯發。一百八義。應實相而離世間。三十九門。破邪見而宣正法。³曉名相之竝假。祛妄想之迷衿。依正智以會如如。⁴悟緣起而歸妙理。境風既息。識浪方澄。三自性皆空。二無我俱泯。入如來之藏。遊解脫之門。

原此經文。來自西國。至若。元嘉建號。跋陀之譯未弘。延昌紀年。流支之義多舛。朕虔思付囑。情切紹隆。以久視元年歲次庚子。林鐘紀律炎帝司辰。于時避暑箕峯。觀風潁水。三陽宮內。重出斯經。討三本之要詮。成七卷之了教。

三藏沙門。于闐國僧實叉難陀大德。大福先寺僧復禮等。竝名追安遠。德契騰蘭。襲龍樹之芳猷。探馬鳴之秘府。戒香與覺花齊馥。意珠共性月同圓。故能了達冲微。發揮奧蹟。以長安四年正月十五日。繕寫云畢。

自惟菲薄言謝珪璋。顧四辯而多慚。瞻一乘而罔測。難違縉俗之請。強申翰墨之文。詞拙理乖。彌增愧惡。伏以此經微妙。

最爲希有。所冀破重昏之暗。傳燈之句不窮。演流注之功。湧泉之義無盡。題目品次列於後云。

〔校勘〕

- 1 「義」、全唐文「意」に作る。
- 2 「陳」、全唐文「承」に作る。
- 3 「正法」、高麗藏、大正藏「政法」に作る。宮内省本、思溪藏、
注大乘入楞伽經等に依る。
- 4 「如如」、高麗藏、大正藏「眞如」に作る。今、思溪藏、全唐
文に依る。
- 5 「慚」、思溪藏、全唐文「慙」に作る。

I

〔訓読〕

新訳大乘入楞伽經序。御製

蓋し聞くならく、摩羅の山頂は、既に最も崇くして最も厳しく、楞伽の城中は、実に往き難くして入り難しと。先仏の弘宣の地、曩には聖の修行の所なり。爰に城主あり。羅婆那と号す。宮殿に乗じて以て尊顔に謁せんとし、楽音を奏して妙法を祈う。鬘峯に因りて以て興を表し、藏海を指して以て宗を明かす。

〔語釈〕

【摩羅山頂】 摩羅耶山。次項参照。

【楞伽城中】 楞伽はランカーの音写。漢訳して「難往」という。

楞伽山はセイロン島内にあるという山の名。ここにおいて入楞伽經などの經典が説かれたと伝える。『統高僧伝』卷四訳経には「那提三藏、唐曰福生。具依梵言。則云布如烏代邪。以言煩多

故。此但訛略而云那提也。本中印度人。少出家。中略曾往執師子国。又東南上楞伽山。南海諸国随縁達化。後略……」(大正五〇・四五八c)とあり、『西域記』十一師子国にある「国東南隅有驢(勒登反)伽山。巖谷幽峻。神鬼遊舎。在昔如来於此説驢迦經。旧曰楞伽經。訛也。」(大正五一・九三四b)とある記

述と合致する。本経「羅婆那王勸請品」に収められた偈頌に「世尊於七日 住摩竭海中」とあり、その記述によれば楞伽は摩竭海にあることになる。

【城主羅婆那】 楞伽城に居する羅婆那王。本経では第一に「羅婆那王勸請品」を設け、楞伽の羅婆那王の招請と世尊の奇瑞示現とを述べている。諸法がすべて自心分別の境界であること、諸諸の執著を離れて識と性を観ずることを世尊が王に理解させようとする。

【弘宣】 ひろく宣揚する。大いに述べる。またひろめ述べる。ひろめ明らかにする。広宣。『晋書』卷十九礼上「或礼經三百。威儀三千。皆所以弘宣天意。雕刻人理。」とある。

II

【訓読】

言うところの入楞伽經は、斯れ乃ち諸仏心量の玄枢、群経理窟の妙鍵なり。広く幽旨を喻え、洞く深義を明かす。不生不滅、非有非無。去來の二途を絶ち、断常の双執を離る。第一義諦を以て、最上の妙珍を得、諸法の皆虚なるを体し、前境の如幻なるを知り、仮名の分別を混じ、生死と涅槃とを等しくす。

【語釈】

【心量】 心に妄想を起こして種種に外境を度量することを心量という。これは凡夫の心量である。如来真証の心量は一切を平

【修行】 徳行を修養する。『莊子』 大宗師に「彼何人者邪。修行无有。而外其形骸。」とあり、その成玄英疏に「彼二人情事難識。修己徳行。無有礼儀。而忘外形骸。」とある。

【楽音】 音楽を指す。

【妙法】 義理の深奥な仏法を指す。

【巖峯】 用例未見。蔵海に對する語であると考えられる。

【表典】 用例未見。

【蔵海】 如来蔵を海に喩える。第八識の大海所生の七識の波浪に對し、如来蔵を海と云う。

【明宗】 適例未見。宗旨を明らかにする。

等に縁とするとところから縁を離れ無心に位することをいう。

【玄枢】 ①天枢。北斗第一星を指し、また、北斗星を指す。②道

を把握するときの奥義の枢紐を言う。

【理窟】 義理の淵藪。才学に富むことを言う。

【妙鍵】 神妙な関鍵。仏理開悟の機。

【幽旨】 深奥玄妙な旨趣。『晋書』王湛等伝論に「叶宣尼之遠契。翫道韋編。遵伯陽之幽旨。含虚牝谷。」とある。

【不生不滅】 如来の境界が常住であることを意味する。『中論』に「不生亦不滅」(大正三〇・一b)とある。

【非有非無】 非有非空と同義。「非有非空」は唯識思想で説くところの中道の意。一切諸法には遍計所執性・依他起性・円成実性の三性がある。この三性とは、遍計は空にして有にあらざれば非有である。依他・円成は有にして空にあらざれば非空である。心外の法(遍計)は非有にして心内の法(依他・円成)は非空である。この両者を合わせて非有非空の中道という。

【去来】 『維摩経』問疾品に「若来已更不来、若去已更不去」(大

正一四・五四四b)とある。

【断常】 有情の身心は一期を限って断絶すると見ることを断見といい、これに反して心身ともに常住不滅と見ることを常見という。この二を辺見と名づけて五悪見の第二とする。『涅槃経』二十七に「衆生起見凡有二種。一者常見。二者断見。如是二見不名中道。無常無断乃名中道。」(大正一二・五二三c)とある。この二見のとらわれより離れることを中道という。

【第一義諦】 諦は真実の道理。この道理は諸法中、第一であるため第一義という。『大乘義章』一に「第一義者。亦名真諦。第一是其顯勝之目。所以名義。真者是其絶妄之称。世与对第一審実不謬。故通名諦。」(大正四四・四八二c)とある。

【前境】 現前に対象としているもの。

【仮名】 慧遠の『大乘義章』一に「諸法無名。仮与施名。故曰仮名。如貧人仮称富貴。」(大正四四・四七七c)とある。

III

〔訓読〕

大慧の問、初めて陳べ、法王の旨、斯くに発す。一百八義、実相に应じて世間を離れ、三十九門、邪見を破りて正法を宣ぶ。名相の並びに仮なるを曉し、妄想の迷衿を祛う。正智に依りて以て如如を会し、縁起を悟りて妙理に帰す。境風は既に息み、識浪は方に澄む。三自性は皆な空にして、二無我は俱に泯ぶ。如来の藏に入り、解脱の門に遊ぶ。

【語釈】

【大慧】 大慧菩薩。『大乘入楞伽經』においては、「集一切法品」を設け、大慧菩薩と世尊との機縁が記されている。

【法王】 仏は法において自在であるためにいう。『法華經』譬喻品に「我為法王。於法自在。」（大正九・一五b）とある。

【一百八義】 大慧菩薩が世尊に投げかけた百八の問い。本經の中心的な趣旨をなしている生滅、有無、斷常、三自性、二無我等の義理について偈頌をもって問うている。

【実相】 実とは虚妄にあらざる義。相とは無相。楞伽には如来藏を説く。一切の事物の真相、本来的な状態。『法華經』方便品に「唯仏与仏。乃能究尽諸法実相。」（大正九・五c）とある。

【世間】 世は遷流の義。破壊の義。覆真の義。間は中の義。世の中に墮する事物を世間という。

【三十九門】 不詳。

【邪見】 五惡見の一。因果の道理を撥無するもの。前頁の語釈参照。

【正法】 真正の道法をいう。理にたがわないことを正という。『無量壽經』上に「弘宣正法」（大正一二・二六五c）とある。

【名相】 五法の一。一切の事物に名と相とがあり、耳に聞くことのできるものを名といい、眼に見ることのできるものを相という。共に虚仮なものであつて法の実相に適うものではなく、凡夫はこの虚仮の名相を分別して種種の妄想を起こす。『楞伽經』四に「愚痴凡夫、隨名相流。」（大正一六・五二a）とある。

【妄想】 実に当たらないことを妄という。妄に分別して種種の相をとることを妄想という。『楞伽經』四に「愚痴凡夫、妄想作事。」（大正一六・五〇七b）とある。

【迷衿】 用例未見。袪（衣服をかかげる）との対応と考えられる。

【正智】 五法の一。聖智に同じ。正しく法の如何を了する智をいう。『大乘義章』三に「言正智者。了法縁起無有自性。離妄分別契如真照。名為正智。」（大正四四・五二三a）とある。

【如如】 楞伽經に説くところの五法の一。真如に同じ。実相、法界と同義。『大乘義章』三に「言如如者。是前正智所契之理。諸法体同故名為如。就一如中。体備法界恒沙仏法。随法辨如。如義非一。彼此皆如。故曰如如。如非虚妄。故復經中亦名真如。」（大正四四・五二三a）とある。

【妙理】 神妙な道理のこと。

【境風】 用例未見。境は心の遊履攀縁するところをいう。意識の様子を風にたとえたものか。

【識浪】 心体の眞如を海にたとえ、諸識の縁動を波浪にたとえる。『楞伽經』一に「水流処。藏識転識浪生。」（大正一二・四八四a）とある。

【三自性】 五法・三自性・二無我は、それぞれ『楞伽經』に説かれる中心をなす事柄である。前頁の語釈【非有非無】でいう遍計所執性・依他起性・円成実性の三性のこと。

【二無我】 人無我と法無我のふたつをいう。『楞伽經』一に「大慧菩薩摩訶薩善觀二種無我相。云何二種無我相。謂人無我及法無我。」(大正一六・四八七c)とある。

【如來之藏】 『楞伽經』四に「如來之藏是善不善因。能遍興造一切衆生。」(大正一六・五一〇b)とある。

【解脫之門】 空、無相、無願の三種の禪定をいう。この三つは涅槃の門戸であるために名づく。『大乘義章』二に「涅槃果德絶縛名脫。空無相等与脫為門。名解脫門。」(大正四四・四八九a)とある。

IV

【訓読】

原ぬるに此の経文は、西国より来る。元嘉号を建て、跋陀の訳未だ弘からず、延昌年を紀して、流支の義舛くこと多きが若きに至りて、朕虔んで付嘱を思い、情い紹隆に切なり。久視元年歳次庚子、林鐘紀律炎帝司辰をもつて、時に暑を箕峯に避け、風を潁水に観ず。三陽宮内に、重ねて斯の経を出だし、三本の要詮を討ね、七卷の了教を成す。

【語釈】

【元嘉】 南朝宋・文帝の年号。四二四―四五三。

【跋陀】 求那跋陀羅(太元一九―泰始四 三九四―四〇八)をいう。宋・宝臣述するところの『注大乘入楞伽經』中の「元嘉建

号。跋陀之訳未弘」の割注に「劉宋初訳四卷本」とある。『楞伽阿跋多羅宝經』(宋元嘉二〇 四四三年訳出)の訳者。

【延昌】 北魏・宣武帝の年号。五一二―五一五。

【流支】 菩提流支(?―五二七)をいう。宋・宝臣述するところの『注大乘入楞伽經』の「延昌紀年。流支之義多舛」の割注に

「後魏次訳十卷本」とある。『入楞伽經』(元魏延昌二 五一三年訳出)の訳者。

【虔思】 敬虔に思う。『文選』賦第二卷・京都上・張平子西京賦に「宜其可定以為天邑。豈伊不虔思于天衢。」とあり、その注に「伊惟也。虔敬也。言此時豈惟不敬思居天氣四交之处邪。」とある。

【付嘱】 いいつける。依頼する。

【紹隆】 継承、発揚。『文選』鍾会・檄蜀文に「今主聖德欽明。

紹隆前緒。」とあり、その劉良注に「紹繼緒業也。言有聖明之德而繼先人之業。」とある。

【久視元年歲次庚子】 久視元（七〇〇）年、六月に訳経を開始する。

【林鐘紀律炎帝司辰】 林鐘は十二律中第八律。曆をいう場合は六月にあたる。炎帝は中国古代伝説上の王、火徳をもつて王となる。また、夏をつかさどる神。司辰は時を指す。この部分、六月をいう。

【箕峯】 箕山のことか。箕山は堯の時、許由と巢父のふたりが世俗的な名譽をきらい隠れ住んだ山として有名。河南省登封県の東南。許由の隠れ住んだ箕山は諸説あるが、ここでは次項の潁水、三陽宮との対応より河南省説を採る。

【潁水】 河川名。源は河南省登封県嵩山の西南に発し、安徽省で淮水に注ぐ。こちらも許由の故事で有名（洗耳）。

【三陽宮】 武后の聖歷三年（七〇〇）、河南省嵩山に造られた宮

V

〔訓読〕

三藏沙門于闐国の僧実叉難陀大徳、大福先寺の僧復礼ら、並びに名は安・遠を追い、徳は騰・蘭に契す。龍樹の芳猷を襲い、馬鳴の秘府を採る。戒香と覺花と与に齊しく馥たり。意珠と性月と共に同じく円たり。故に能く冲微に了達し、奥蹟を發揮す。長安四年正月十五日を以て繕写云に畢る。

殿。『旧唐書』本紀卷六・則天皇后聖歷三年久視元年に「臘月辛巳。封皇太子男重潤為邵王。狄仁傑為内史。戊寅。幸汝州之温湯。甲戌。至自温湯。造三陽宮于嵩山。」とある。

【三本】 北凉・曇無讖訳『楞伽經』四卷（欠）、劉宋・求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝經』四卷、元魏・菩提流支訳『入楞伽經』十卷の同本異訳の三本と解釈した。求那跋陀羅、及び菩提流支訳の二本については問題ないが、初訳とされる曇無讖の『楞伽經』については『大唐内典録』卷三等に僅かに記録を見るのみで現存しない。尚、宋・宝臣述するところの『注大乘入楞伽經』ではこの三本を求那跋陀羅、及び菩提流支訳の二本と梵本一本の計三本と理解し、曇無讖訳を挙げていない。

【要詮】 用例未見。かなめと真詮（物事の真理）と理解した。

【了教】 完全な教え、了義経のこと。『涅槃経』卷六に「依了義経、不依不了義経。」（大正一二・四〇一b）とある。

【語釈】

【于闐國】 コータン。本稿21ページの語釈参照。

【実叉難陀大徳】 『宋高僧伝』巻二訳経篇第一之二唐洛京大遍空寺実叉難陀伝に「訳実叉難陀、一云施乞叉難陀。華言学喜。葱嶺北于闐人也。智度恢広、風格不群。善大小乘旁通異学。天后明揚仏日崇重大乗。中略、至久視庚子駕幸潁川三陽宮詔又訳大乗入楞伽經。天后復製序焉。又京師清禅寺及東都仏授記寺。訳文殊授記等經。前後総出一十九部。沙門復礼等綴文。」とある。景雲元年十月十二日卒す。春秋五十九歳。

【大福先寺】 東太原寺、福先寺ともいう。洛陽に在る。

【復礼】 生没年不詳。俗性は皇甫氏。京兆（陝西省）の人。若くして出家し、大興善寺に住し、地婆訶羅や実叉難陀たちの經典訳出を助けた。永隆二年（六八二）太子文学（経籍をつかさどる官名）の権無二が仏教に対し十カ条の疑問を提出したのに対し復礼は『十門弁惑論』を著わした。『開元釈経録』巻九に、「十門弁惑論二巻・答太子文学権無二釈典稽疑或三卷」（大正五五・五六四b）とある。また同所の復礼の伝には「沙門釈復礼。京兆人。俗性皇甫氏。少出家住興善寺。性虚静寡嗜慾。遊心内典兼博玄儒。尤工賦詠善於著述。俗流名士皆慕仰之。三藏地婆訶羅実叉難陀等。訳大莊嚴華嚴等經。皆勅召礼令同翻訳。綴文裁義実属斯人。天皇永隆二年辛巳。因太子文学権無二述釈典稽疑十條用以問礼請令釈滞。遂為答之撰成二卷。名曰十門弁惑論。賓主酬答剖析稽疑。文出於智府義在於心外。如斯答對非此而誰。

可謂龍猛更生馬鳴再出。権文学觀此論已。衆疑頓遣頂戴遵行。此雖一時之酬答。寔為万代之龜鏡也。法師兼有文集行於代焉。」とある。

【安遠】 道安（三一―三八五）と慧遠（三三四―四一六）との併称。

【騰蘭】 迦葉摩騰（生没年不詳）と竺法蘭（生没年不詳）との併称。

【芳猷】 よいばかりこと。美德。謝朓「酬德賦」に「結德音而為佩。帶芳猷而為服。」とある。

【秘府】 秘閣に同じ。

【覺花】 覺華。真覺を花に喩える。覺は智慧。智慧の開くことを花の開くことに喩える。『長阿含經』に「受法而能行。覺華而為供。」（大正一・二一a）とある。

【意珠】 如意珠。宝珠より種種の所求を出だすことが意の如くなるをもつて如意という。意とは物事を思量すること。

【性月】 用例未見。今、前項意珠の様子を月にとえたものと解釈する。

【了達】 事理を了悟し通達する。『法華經』提婆品に「深入禪定。了達諸法。」（大正九・三五b）とある。

【冲微】 用例未見。奥深い道理をいうか。

【奥蹟】 奥深い道理。蹟はもと、口の中で嚙む意を表したが、策に音通して奥深い道理の意に用いる。『易』繫辭に「聖人有以見

天下之蹟。」とあり、また『旧唐書』卷一百八十九儒学上徐文遠伝には「觀其所説。悉是紙上語耳。僕皆先已誦得之。至於奥蹟

之境。翻似未見。」とある。

VI

〔訓読〕

自ら菲薄を惟い、言に珪璋を謝す。四弁を顧みて慚ずること多く、一乗を瞻て測る罔し。緇俗の請に違い難く、強いて翰墨の文を申ぶ。詞は拙く理は乖り、弥いよ愧慙を増す。伏して以うに此の経は微妙にして、最も希有たり。冀う所は重昏の暗を破り、伝燈の句窮らず、流注の功を演べ、湧泉の義尽くるなきを。題目品次は後に列す、と云う。

〔語釈〕

【菲薄】 うすい。すくない。ひいては徳や才能の劣っていることをいう。へりくだる。『文選』表上 第三十七卷・諸葛孔明出師表に「不宜妄自菲薄。引喻失義。以塞忠諫之路也。」とあり、その注に「方言曰。菲薄也。郭璞曰微薄也。」とある。

【珪璋】 もと礼式の時飾りに用いた玉。人品の高いことのたとえ。『後漢書』卷六十七党錮列伝・劉儒に「劉儒字叔林。東郡陽平人也。郭林宗常謂儒口訥心弁。有珪璋之質。」とある。

【四弁】 菩薩の四種の説法能力。法無礙弁（教法に精通すること）・義無礙弁（諸般の事に精通すること）・辞無礙弁（表現方法の巧みなこと）・楽説無礙弁（楽々と口演できること）の四

種。四無礙弁の略。また、四無礙解、四無礙智ともいう。『俱舍

論』二十七に「無礙解総説有四。一法無礙解。二義無礙解。三詞無礙解。四弁無礙解。」（大正二九・一四二a）とある。

【一乗】 成仏する唯一の教。乗は車乗に仏の教法を喩える。教法は人を載せて涅槃の岸に運ぶので乗と名づける。『法華経』方便品に「十方仏土中。唯一乗法。無二亦無三。除仏方便説。」（大正九・八a）とある。

【緇俗之請】 緇俗は出家人と俗世人。僧俗の請問。

【翰墨之文】 翰墨は墨と筆。転じて文学。

（長谷川 慎）

五 大寶積經序

〔原文〕

大寶積經并序¹大唐太上皇製。²

朕聞。天之爲大也高。上下之容可紀。地之爲大也廣。縱橫之數可推。則知。無去・無來・不生・不滅。拯沈淪於沙劫。救焚灼於塵區。³毒龍懼其威光。醉象憚其神力。其大則包於宇宙。其小則隱於毫芒。⁴七十二君。先在陶鈞之內。萬八千載。卽爲俄頃之間。⁵漢日載其通暉。周星彰其降誕。鷲頭峯下。演金口之微言。⁶鷄足山中。舒玉毫之瑞色。⁷干戈不用。梵志摧鋒。甲冑無施。波旬潰旅。闢圓明之淨域。⁸啓方便之禪門。慧晷耀於昏衢。⁹慈雲清於朽宅。無得而稱者。其惟正覺乎。然則教自西方。法流東夏。馬鳴・龍樹肇闡瓊編。羅什・道安承宣寶偈。關中道俗。雖傳貝葉之文。江左黎元。未極蓮花之旨。¹⁰又以元魏迷於釋典。宇文扇於魔風。開皇之初。暫爲修建。大業之末。遽卽分崩。我大唐之有天下也。

睿聖重光。¹¹文思御曆。吞沙靜孽。練石稱神。¹²巢燧執鞭。羲農擁篲。懸法王之鏡。轉梵帝之輪。被正朔於蟠桃。混車書於細柳。三藏沙門菩提流志者。南天竺國淨行婆羅門種。姓迦葉氏也。年十有二。外道出家。事波羅奢羅。學聲明僧佉等論。¹³并曆數呪術及陰陽等。年踰耳順。遽乃心歸。知外法之乖違。悟釋教之深妙。隱居名岳。積習頭陀。初就耶舍瞿沙三藏學經論。其後遍遊五天竺國。¹⁴

高宗天皇大帝。¹⁵聞其遠譽。挹其道風。永淳二年。遣使迎接。

天后聖帝。¹⁶應乾司契。當宇披圖。¹⁷令住東都。居福先寺。¹⁸譯佛境界寶雨花嚴等經一十一部。¹⁹

中宗孝和皇帝。²⁰ 循機履運。配永登樞。神龍二年。令住京下。於崇福寺。²¹ 翻譯此經。俄屬靈祐虧徵。²² 綿區集禍。喬岳之仙長往。²³ 茂陵之駕不還。²⁴ 朕以庸虛。謬膺不構。²⁵ 敬遵前旨。勗就斯編。法師尋繹故文。²⁶ 發揮新句。炎涼不懈。曉夕忘疲。舊翻新翻。凡有四十九會。惣其部帙一百二十卷成。²⁷ 以先天二年六月八日。畢功進內。法師戒珠在握。慧炬明心。爲法門之棟梁。啓僧徒之耳目。伏願上資。七廟。²⁹ 八百之祚長延。下及萬方。億兆之乂恆逸。³⁰ 遠迹寧謐。朝野歡娛。致瀼俗於淳源。歸迷生於壽域。暫乘紫機之暇。³¹ 聊題細帙之前。所有會名。具於其目云爾。

この序に關しては、次の諸本を見ることができた。

- ・『高麗大藏經』第六冊。
- ・『宋版磧砂大藏經』第五冊。
- ・『中華大藏經』第八冊所収の金藏広勝寺本。
- ・『日本校訂大藏經』第五套。
- ・『大正大藏經』第一一卷。
- ・『全唐文』卷一九。

また、慧琳『一切経音義』卷一一以下に『大寶積經』の音義がある。ここでは高麗藏所収のものを底本として用いるが、他本との文字の異同を注記しておく。

〔校異〕

- 1 「大寶積經并序」磧砂本・全唐文無「并」字。大正藏校記、宮内庁本無「并」字。
宗皇帝製。大正藏校記、宋本・元本・宮内庁本作「太上皇制」、明本作「唐睿宗皇帝製」。
- 2 「大唐太上皇製」磧砂本作「太上皇制」。慧琳『音義』作「睿」。
- 3 「焚灼」慧琳『音義』作「焚灼」。

- 4 「毫芒」慧琳『音義』作「豪芒」。
- 5 「俄頃」大正藏校記、宮内庁本作「俄須」。
- 6 「金口」大正藏校記、宮内庁本作「全口」。
- 7 「玉毫」慧琳『音義』作「玉豪」。
- 8 「關」大正藏校記、宮内庁本作「闌」。
- 9 「慧晷」慧琳『音義』作「惠晷」。「昏衢」校訂大藏經作「晷衢」。
- 10 「蓮花」磧砂本・校訂大藏經・全唐文作「蓮華」。
- 11 「睿聖重光」磧砂本・校訂大藏經では平出せず、一格空けるのみ。
- 12 「鍊石」磧砂本・全唐文作「鍊石」。
- 13 「僧佉等論」全唐文作「僧法等倫」。
- 14 「其後」金藏本作「其初」。
- 15 「高宗天皇大帝」校訂大藏經では平出せず、一格空けるのみ。大正藏校記、宮内庁本無「大」字。
- 16 「天后聖帝」磧砂本では平出せず、一格空けるのみ。
- 17 「當字」磧砂本・全唐文・慧琳『音義』作「當字」。大正藏校記、宮内庁本「字」作「字」。「字」に作るべし。
- 18 「福先寺」磧砂本・全唐文作「大福先寺」。大正藏校記、宮内庁本作「大福先寺」。
- 19 「花嚴等經」磧砂本・校訂大藏經・全唐文作「華嚴等經」。
- 20 「中宗孝和皇帝」磧砂本では平出せず、追込み。校訂大藏經は一格空き。
- 21 「崇福寺」磧砂本・全唐文作「大崇福寺」。大正藏校記、宮内庁本作「大崇福寺」。
- 22 「靈祐」全唐文作「靈佑」。校訂大藏經作「虧祐」。「虧徵」大正藏作「虧徵」。
- 23 「喬岳之仙長往」磧砂本では平出せず、追込み。大正藏校記、宮内庁本「往」作「在」。
- 24 「茂陵之駕不還」磧砂本・大正藏では「駕」上に空格無し。
- 25 「丕構」磧砂本・大正藏・全唐文・慧琳『音義』作「丕構」。
- 26 「尋譯」大正藏校記、宋本・宮内庁本作「尋譯」。
- 27 「部帙一百二十卷」大正藏校記、宮内庁本作「部秩百二十卷」。
- 28 「六月」磧砂本・全唐文作「四月」。
- 29 「伏願上資 七廟」磧砂本・大正藏では「七廟」上に空格無し。
- 30 「叱」全唐文作「氓」。「恆逸」慧琳『音義』作「恆佚」。
- 31 「暇」磧砂本・校訂大藏經・大正藏・全唐文作「暇」。「暇」に改めるべし。

I 緒言・仏教の宣揚

〔訓読〕

大宝積経並びに序

大唐太上皇製

朕聞くならく、天の大たるや高、上下の容紀^{しる}す可し、地の大たるや広、縦横の数推^おす可し、と。則ち知る、無去・無来・不生・不滅は、沈淪^{しんりん}せるを沙劫^{さけつ}より拯^さい、焚灼^{ふんしやく}せらるるを塵区^{ちんく}より救い、毒龍も其の威光を懼れ、醉象も其の神力を憚る。其の大なるは則ち宇宙を包み、其の小なるは則ち毫芒^{ごうまう}に隠る。七十二君も、先に陶鈞^{たうきん}の内^{うち}に在り、万八千載も、即ち俄頃の間と為す。漢日は其の通暉^{つうき}を載^のし、周星は其の降誕^{かうたん}を彰^{あき}らかにす。鷲頭峯の下に、金口の微言^{みごん}を演^のべ、鷄足山の中に、玉毫の瑞色^{ずいしき}を舒^のぶ。干戈用いざるも、梵志は鋒^{ほう}を摧^{くだ}かれ、甲冑^{けうけう}施す無きも、波旬^{はじゆん}は旅^{りょ}を潰^{つぶ}らる。円明の淨域^{じやういき}を闢^{ひらく}き、方便の禪門^{ぜんもん}を啓^{ひらく}き、慧晷^{けい}は昏衢^{こんく}に耀^あき、慈雲は朽宅^{くたく}を清^{きよ}む。得て称す無き者は、其れ惟だ正覺のみなる乎。

〔語釈〕

【大宝積経】百二十卷、四十九会。それぞれ独立した四九の経典を一つに集成した経典で、全体を通じての一貫した思想的整合性は見られない。このうち、菩提流志が新たに翻訳したのは二六会・三九巻で、他の二三会・八一巻分はすでにある旧訳をそのまま用いる。大正大蔵経第一巻・宝積部に収録される。『開元釈教録』巻九・總括群経録上之九には、「大宝積経一百二十卷。単重合訳、神龍二年創首、先天二年功畢。右此部経、新

訳旧訳四十九経合成一部。於中析取二十六会三十九巻、為菩提流志新訳。余二十三会八十一巻、並是旧訳勘同編入。已備余録故不重存、其新訳会名、具如別録初第十一巻宝積部中、依次編列」(大正五五・五六九b)とある。

【大唐太上皇】睿宗・李旦。高宗の第八子、中宗の母弟、母は則天武后。玄宗の父。嗣聖元年(六八四)中宗を廃した則天武后により一旦、皇帝として立てられるが、武周王朝の成立に伴い、

皇嗣に格下げされる。唐朝復興ののち中宗を嗣いで唐隆元年(七一〇)復位し、延和元年(七二二)玄宗に譲位し太上皇となる。

この時のことを『旧唐書』卷七・睿宗本紀は、「八月庚子、帝(睿宗)伝位于皇太子(玄宗)、自称太上皇帝、五日一度受朝於太極殿、自称曰朕、三品已上除授及大刑獄、並自決之、其处分事称詔・令。皇帝(玄宗)毎日受朝於武陽殿、自称予、三品已下除授及徒罪、並令決之、其处分事称制・勅」と記し、以後睿宗と玄宗との二重統治体制が布かれたが、翌先天二年(七一二)七月乙丑には、太平公主(睿宗の妹、玄宗の叔母)の謀反事件を契機として、「太上皇詔曰、朕将高居無為、自今後軍国刑政一事以上、並取皇帝(玄宗)处分」(『旧唐書』睿宗本紀)と政權の玄宗への一元化がなされる。すなわち、『大宝積經』の翻訳が完成した先天二年四月(もしくは六月)の時点では、未だ太上皇・睿宗と皇帝・玄宗の二重統治下にあったことになる。睿宗の崩御は開元四年(七一二)。

【天之为大也高、上下之容可紀、地之为大也広、縦横之教可推】典拠未詳。

【無去・無来・不生・不滅】仏法の常住なるを言う。『金剛般若波羅蜜經』「如来者、無所從來、亦無所去、故名如来」(鳩摩羅什訳、大正八・七五二b)、『維摩詰所説經』卷上・弟子品「法無去来、常不住故、……法無生滅、法無所歸」(大正一四・五四〇a)、『大乘起信論義記』上「非生・非滅、四相之所不遷、無去・無来、三際莫之能易」(大正四四・二四〇c)。

【拯沈淪】沈も淪も「しずむ」、また埋没するの意。『大方広華嚴經』(六十華嚴)卷五・如来光明覺品「一切衆生類、我今悉当度、漂浪生死流、沈淪愛欲海」(大正九・四二五c)、『出三藏記集』卷一一・僧肇・百論序「于時外道紛然、異端競起、邪弁遁真、殆乱正道、乃仰慨聖教之陵遲、俯悼群迷之縦惑、将遠拯沈淪、故作斯論」(大正五五・七七b)。

【沙劫】沙は恒河沙のこと。また劫は推し量することも出来ぬほどの長い時間。『妙法蓮華經』卷五・從地踊出品「如是諸大衆、若人行等數、過於恒沙劫、猶不能尽知、是諸大威徳」(大正九・四〇c)、唐・賈島・送譚遠上人「清淨從沙劫、中終未日敬、金光明本行、同侍出峨帽」(『賈浪仙長江集』卷六)。

【救焚灼】『出三藏記集』卷七・王僧孺・慧印三昧及濟方等學二經序讚「救焚拯溺、去蓋鎖纏、灼灼苾芻、英英河楚」(大正五五・五一a)、『高僧伝』卷八・梁京師靈味寺釈宝亮「天監八年初勅亮撰涅槃義疏十余万言、上為之序曰……、救焚灼於火宅、拯沈溺於浪海」(大正五〇・三八二a)。

【塵区】塵界・塵世と同じく、俗世の意。則天武后・新訳大方広仏華嚴經序「闡揚沙界、宣暢塵区。並兩曜而長懸、弥十方而永布」(大正一〇・一a)、唐・司空図・十会齋文「無縁則三道宝階、如登劍樹、有願則十方淨域、便越塵区」(『司空表聖文集』卷一〇)。

【毒龍】仏法と対立するもの、もしくは煩惱を象徴する。『増一阿含經』卷一四・高幢品一「爾時、連若河側有迦葉、在彼止住

……、去迦葉不遠有石室、於石室中有毒龍、在彼止住、爾時世尊至迦葉所、到已語迦葉言、吾欲寄在石室中一宿……、時彼惡龍心懷恐怖、東西馳走欲得出石室、然不能得出石室、是時彼惡龍來向如來、入世尊鉢中住」(大正二・六一九b) c)、『妙法蓮華經』卷七・觀世音菩薩普門品「或遇惡羅刹、毒龍諸鬼等、念彼觀音力、時悉不敢害」(大正九・五八a)、王維・過香積寺「薄暮空潭曲、安禪制毒龍」(『王右丞集』卷七)。

【醉象】 右に同じく、煩惱の譬え。『大般涅槃經』卷二五・光明遍照高貴德王菩薩品「譬如醉象狂騷暴惡、多欲殺害、有調象師以大鉄鉤、鈎斷其頂、即時調順、惡心都尽、一切衆生、亦復如是」(大正一一・五一二a)、唐・崔致遠・奏請僧弘鼎充管内僧正狀「伏乞聖慈俯詳所請、許充当道管内僧正、仍賜紫衣、所冀身掛金欄、逞養鷹之雋氣、手持玉柄、制醉象之狂徒」(『桂苑筆耕集』卷四)。

【毒龍・醉象】 法琳『弁正論』卷一・三教治道篇「百句譬喻經云、五根之禍、劇於毒龍、過於醉象」(大正五二・四九五上)、楊炯・孟蘭盆賦「毒龍怒兮赫然、狂象奔兮沈醉」(『初學記』卷四・歲時下・七月十五日)。

【宇宙・毫芒】 『淮南子』原道訓「神託於秋毫之末、而大於宇宙之總」、班固・答賓戲「独擅意乎宇宙之外、銳思於豪芒之内」(顏師古注。宇宙之外、言宏広也、豪芒之内、喻纖微也)、『漢書』卷一〇〇上・叙伝上)。

【七十二君】 本稿14ページの語釈参照。

【陶鈞】 轆轤のこと。『漢書』鄒陽伝「(鄒陽)從獄中上書曰……是以聖王制世御俗、独化於陶鈞之上、……(張晏注。陶家名模下円転者為鈞、以其能制器為小大、比之於天也。顏師古注。此說非也。陶家名転者為鈞、蓋取周回調鈞耳、言聖王制馭天下、亦猶陶人転鈞、非陶家転象天也)」とあるように、転じて世界の比喩とする。

【万八千歳】 本稿14ページの語釈参照。

【俄頃】 ごく僅かの間。『說文解字』「俄、頃也、从人我声」、『孔子家語』六本「孔子在斉、於外館、景公造焉。……孔子曰、蓋以文武故也。若殃其身、則文武之嗣、無乃殄乎、故当殃其嗣、以彰其過。俄頃、左右報曰所災者、釐王廟也」。

【漢日載其通暉】 後漢・明帝の時に仏教が中国に伝えられたことを言う。『魏書』卷一一四・釈老志「後、孝明帝夜夢金人、項有日光、飛行殿庭、乃訪羣臣、傳毅始以仏対。帝遣郎中蔡愔・博士弟子秦景等、使於天竺、写浮屠遺範。愔仍与沙門撰摩騰・竺法蘭東還洛陽。中国有沙門及跪拜之法、自此始也」、また、慧琳『音義』には「漢法本内伝云、漢明帝夜夢、金人飛行殿庭、項背日光、占夢者曰、西方有大聖人也。因尋其教、始聞仏法也」とある。『漢法本内伝』については、吉岡義豊「道仏二教の対弁書としての『漢法本内伝』の成立について」(『道教と仏教』第一、日本學術振興會、一九五九年) 参照。

【通暉】 『文選』卷一三・謝惠連・雪賦「若廼申娛既之無已、夜幽静而多懷。風触楹而転響、月承幌而通暉」。

【周星彰其降誕】 釈尊誕生の時に、中国において夜空に流星が現れたことを言う。『歴代三寶記』卷一・帝年上・周秦「至第十九主莊王他十年、即魯春秋莊公七年（前六八七）夏四月辛卯、夜恒星不見、夜中星隕如雨。案此即是如來誕生王宮時也」（大正四九・二三a）。

【鷲頭峯】 靈鷲山に同じ。釈尊說法の地。慧琳『音義』「謂鷲鳥也、鷲頭、山名也。在王舍城側、亦名鷲峯山、亦名靈鷲山、梵云耆闍崛山、並一山也」、摩訶止觀『卷一上「大覺世尊、積劫行滿、涉六年以伏見、舉一指而降魔、始鹿苑、中鷲頭、後鶴林」（大正四六・一a）。

【金口】 釈尊の說法を指す。『弘明集』卷一〇・大梁皇帝勅答臣下神滅論・建康平司馬襲答「靈山金口禪水玉舌、終不能捨此以求通」（大正五二・六八c）、梁・簡文帝・与広信侯書「伏承淨名法席、親承金口、辭珍鹿苑、理愜鷲山」（『芸文類聚』卷七七・内典下・寺碑）。

【微言】 精妙深遠なる言葉。『弘明集』卷五・遠法師明報応論・答桓南郡「然仏教深玄微言難弁、苟未統夫旨帰亦焉能暢其幽致」（大正五二・三三b）、梁・王筠国師草堂寺智者約法師碑「開宝函之奥典、闡金字之微言、顯証一乘、宣揚三慧」（『芸文類聚』卷七六・内典上・内典）。参考、『漢書』卷三〇・芸文志・序「昔仲尼没而微言絶、七十子喪而大義乖」。

【鷄足山】 迦葉尊者入定の地、摩揭陀国にあり、また狼跡山という。『大唐西域記』卷九「莫訶河東入大林、野行百余里、至屈屈

吒播陀山。唐言鷄足、……其後尊者大迦葉波、居中寂滅」（大正五一・九一九b）、『法苑珠林』卷一六・弥勒部・業因部「又新婆沙論云、曾聞尊者大迦葉波、入王舍城、最後乞食、食已未久、登鷄足山、山有三峰、如仰鷄足。尊者入中、結跏趺坐、作誠言曰、願我此身、并納鉢杖、久住不壞」（大正五三・四〇五a）。

【玉毫瑞色】 玉毫は仏の眉間にある白毫。如來三十二相の一つ。慧琳『音義』「玉豪。……假借字也、正体從毛、作毫。言玉毫者、如來眉間白毫毛也。皓白光潤、猶如白玉、仏從毫相、放大光明、照十方界、故云玉毫瑞色也」、宋・鮑照・仏影頰「金光絶見、玉毫遺靚」（『鮑氏集』卷一〇）。

【瑞色】 『梁書』卷一・武帝紀上「齊帝禪位于梁王。詔曰……、八表呈祥、五靈效祉、豈止鱗羽禎奇、雲星瑞色而已哉、敦煌麥文・維摩詰經講經文「乾坤如把繡屏幘、世界似將紅錦展、日月広呈於瑞色、江河大變於佳祥」（『敦煌變文集新書』卷二一二四九頁）。

【干戈不用】 『荀子』成相「禹勞心力、堯有德、干戈不用三苗服」、『弘明集』卷一四・釈宝林・破魔露布文「經云、涅槃無生而無不生、至智無照而無不照、其唯如來乎、戰勝不以干戈之功、略地不以兵強天下」（大正五二・九四c）。

【梵志】 婆羅門のこと。玄奘『一切經音義』卷一八「婆羅門。此言訛略也、応云婆羅賀磨拏。此義云、承習梵天法者。其人種類自云、從梵天口生、四姓中勝、故独取梵名。唯五天竺有、諸国即無。經中梵志、亦此名也。正言静胤、言是梵天之苗胤也」、大

智度論』卷五六・釈滅諍乱品「梵志者、是一切出家外道、若有承用其法者、亦名梵志、梵志愛著其法、聞実相空法、不信故、欲破壞」(大正二五・四六一b)。

【摧鋒】『弘明集』卷九・蕭琛・難神滅論序「難曰、夫刀之有利砥礪之功、故能水截蛟螭、陸斷兕虎、若窮利尽用必摧其鋒鏑、化成鈍刃、如此則利滅而刀存、即是神亡而形在」(大正五二・五五b)、『宋書』卷一・武帝紀「高祖常被堅執鋒、為士卒先、每戰輒摧鋒陷陣」。

【波句】Pāṇiyas または Pāṇinan の音訳。惡魔・天魔と漢訳する。『注維摩詰經』卷四「什曰、波句秦言殺者、常欲斷人慧命、故名殺者、……肇曰、波句秦言或名殺者、或名極惡、斷人善根、因名殺者、違仏乱僧、罪莫之大、故名極惡也」(大正三八・三六五b)、玄奘『一切經音義』卷八「言波句者訛也、正言波卑夜、是其名也、此云惡者、常有惡意、成就惡法、成就惡慧、故名波句」、慧琳『音義』「波句、梵語正云波俾椽、唐云惡魔」。

【潰旅】旅とは軍旅のこと。

【円明】仏の智慧が円満かつ明らかなこと。法琳『弁正論』卷六「湛然常樂、文系之所未詮。疑爾円明、言象之所莫測」(大正五二・五二八b)。

【淨域】諸仏の淨土。梁・簡文帝・神山寺碑序「自非莊嚴妙土、吉祥福地、何以標茲淨域、置此伽藍」(『芸文類聚』卷七六・内典上・内典)、『梁書』卷五一・処士伝・庾詵「晚年以後、尤遵釈教……、言終而卒、時年七十八、孝室咸聞空中唱、上行先生

已生弥陀淨域矣」。

【啓方便之禪門】『妙法蓮華經』卷四・法師品「一切菩薩阿耨多羅三藐三菩提、皆属此經、此經開方便門、示真実相」(大正九・三一c)、『大唐西域求法高僧伝』卷下「道琳法師者……、搜律藏而戒珠瑩、啓禪門而定水清」(大正五一・六c)。

【慧晷耀於昏衢、慈雲清於朽宅】『法華經』三界火宅の譬喩に基づくか。『妙法蓮華經』卷二・譬喩品「仏欲重宣此義、而説偈言、……是朽故宅、属于一人、其人近出、未久之間、於後舍宅、忽然火起、……諸子聞説、如此諸車、即時奔競、馳走而出、到於空地、離諸苦難、長者見子、得出火宅、住於四衢」(大正九・一三c~一四b)。

【慧晷】晷は慧琳『音義』に「説文云、日景也」と言うように「日の光」のことであり、慧晷は慧日に同じである。『妙法蓮華經』卷七・觀世音菩薩普門品「無垢清淨光、慧日破諸闇、能伏災風火、普明照世間」(大正九・五八a)。

【耀於昏衢】『妙法蓮華經』卷二・譬喩品「是時長者、見諸子等安隱得出、皆於四衢道中露地而坐、無復障礙、其心泰然歡喜踊躍」(大正九・一二c)、敦煌變文・維摩詰經講經文「凡夫遇境処昏衢、不弁迷途焉坑井」(『敦煌變文集新書』卷二・二四一页)。

【慈雲】仏の慈悲を雲に譬えたもの。『大方広仏華嚴經』(六十華嚴)卷四三・離世間品「興起大慈雲、普覆於一切、明曜大悲電、雷震法洪音」(大正九・六七〇c)、『一百五十讚仏頌』「慈

雲灑法雲、能清染欲塵」(義淨訳、大正三二・七六〇a)、隋・

江總・建初寺瓊法師碑「三空莫升、二諦何詮、仏日初昭、慈雲不偏」(『芸文類聚』卷七六・内典上・内典)。

【朽宅】『妙法蓮華經』卷二・譬喻品「仏告舍利弗、善哉善哉、如汝所言、如來亦復如是、……而生三界朽故火宅、為度衆生生

老病死憂悲苦惱愚癡闇蔽三毒之火、教化令得阿耨多羅三藐三菩提」(大正九・一三a)、『大般涅槃經』(曇無讖訳)卷二三・光明遍照高貴德王菩薩品「云何当令惡覺發起、譬如朽宅垂崩之屋」

II 仏教東伝から唐王朝による全土統一まで

【訓読】

然らば則ち、教の西方自りし、法の東夏に流るるは、馬鳴・龍樹肇めて瓊編を闡き、羅什・道安承けて宝偈を宣ぶ。関中の道俗は、貝葉の文を伝うと雖も、江左の黎元は、未だ蓮花の旨を極めず。又た以て元魏は釈典に迷い、宇文は魔風に扇る。開皇の初め、暫く修建を為すも、大業の末に、遽即かに分崩す。我が大唐の天下を有つや、睿聖重ねて光ぎ、文思もて曆を御す。吞沙は薤を静められ、練石は神に称い、巢燧も鞭を執り、義農も簪を擁す。法王の鏡を懸け、梵帝の輪を転し、正朔を蟠桃に被り、車書を細柳に混ず。

【語釈】

【法流東夏】東夏は中国のこと。『続高僧伝』卷九・隋相州演空寺釈靈裕伝「自東夏法流、化儀異等、至於立教施行取信千載者、裕其一矣」(大正五〇・四九八a)。

(大正一二・四九九a)。

【無得而称者】称えようもないほどに偉大であること。『論語』泰伯「子曰、泰伯、其可謂至德也已矣、三以天下讓、民無得而称焉」。

【正覺】真正なる悟り。音訳では「三藐三菩提」とする。『弘明集』卷七・朱昭之・難顧道士夷夏論「智無不周者、則謂之為正覺、通無不順者、則謂之為聖人」(大正五二・四三上b)。

【馬鳴】Aśvaghoṣa。中印度摩揭陀国の人。また馬鳴比丘・馬鳴菩薩とも呼ばれる。仏滅度の六百年後に現れた大乘論師。『大乘起信論』を著した。その伝には『馬鳴菩薩伝』(大正五〇・一八

三a)がある。

【龍樹】 Nagarjuna。南天竺の人。馬鳴の弟子迦毘羅尊者の弟子。『中論』『十二門論』『大智度論』等を著し、大乘思想の基礎を築いた。その伝記は『龍樹菩薩伝』(大正五〇・一八五b)。

【瓊編】 瓊は美玉、仏典に対する美称。唐・王勃、四分律宗記序「遂使瓊編浩汗、利涉迷於要津、瑤軸紛綸、登高暗於飛陛」(『王子安集』卷九)。

【羅什】 鳩摩羅什(Kumarajiva)。龟兹国の人。後秦・弘始三年(四〇一)長安にいたり、以後数多くの經典を翻訳し、同十五年(四一三)長安に没す。『高僧伝』卷二、『出三藏記集』卷十四等に伝あり。

【道安】 前秦の僧。俗姓衛氏。十二歳で出家しのち仏図澄の弟子となる。従来の格義仏教を批判し、その死後長安に入った鳩摩羅什とともに中国仏教の面目を一新した。前秦・建元二十一年(三八五)没す。

【承宣】 『漢書』卷八一・匡衡伝「衡復上疏曰、臣聞治亂安危之機、在乎審所用心。蓋受命之王、務在創業垂統、傳之無窮、繼體之君、心存於承宣先王之德、而褒大其功」。

【宝偈】 仏典に対する美称。『法苑珠林』卷八九・受戒篇・三聚部・受捨「晨朝宣宝偈、夕夜虔誠恭」(大正五三・九四四b)、則天武后・新訳大方広仏華嚴經序「一窺宝偈、慶溢心靈」(大正一〇・一a)。

【関中道俗、雖伝貝葉之文、江左黎元、未極蓮花之旨】 北朝にお

いては様々な教典が伝来・翻訳されたが、南朝ではそれが十分ではなかったことを言う。史実はさておき、唐王朝が北魏・北周・隋の流れを汲むことから、北朝を南朝の上に置こうとする意図がある。

【関中】 函谷関の中の陝西盆地。北朝のこと。

【貝葉之文】 貝葉は貝多羅葉の略。貝多羅(Patala)は樹木の名。その葉を紙の代わりに用いて教典を書写する。転じて教典のこと。『大唐・大慈恩寺三蔵法師伝』卷七「天皇大帝居春宮、奉睹聖文。又製述聖記、其詞曰……、石室帰貝葉之文、沢及昆虫」(大正五〇・二五七a・b)。

【江左】 長江の左岸。江南すなわち南朝のこと。

【黎元】 諸々の民。『漢書』卷八五・谷永伝「使天下黎元咸安家樂業、不苦踰時之役」。

【蓮花之旨】 蓮花は仏法を象徴する。

【元魏】 北魏・拓跋氏は孝文帝の漢化政策により、帝室の姓を漢族風に元と改めた。

【迷於釈典】 孝明帝と靈太后による溺仏の風を言う。

【宇文】 北周・帝室・宇文氏のこと。

【屬於魔風】 北周の武帝・宇文邕による魔仏を言う。

【開皇之初、暫為修建】 隋文帝による仏教再興をいう。修建は建築物を修理・建立すること。『統高僧伝』卷二〇・江州東林寺釈道暉伝「隋開皇十二年……、山寺法擁、勸引非一、遂不拒命、弘道度人。修建僧坊、四時無絶」(大正五〇・五九九b)、法琳『破

邪論』卷下「是以仏日再曜、起自永平之初、経像重興、発于開皇之始」(大正五二・四八五a)。

【大業之末、遽即分崩】 隋末の戦乱を言う。

【分崩】『論語』季氏「邦分崩離析、而不能守也」、『後漢書』列伝六五・呂布伝「今天下分崩、雄桀並起、君擁十万之衆、当四戰之地」。

【睿聖重光、文思御曆】 隋末の混乱を収めて天下を統一した高祖・太宗を称える。

【睿聖】『国語』楚語上「謂之睿聖武公、子夷不容聖、於椅相何害(韋昭注。睿、明也、書曰、睿作聖)」、『後漢書』列伝二六・鄭興伝「昔文王承積德之緒、加之以睿聖、三分天下、尚事殷」。

【重光】 創業の君主二人の威光をいう。『尚書』顧命「昔君文王・武王宣重光、奠麗陳教則肆(孔安国伝。言昔先君文武布其重光累聖之德、定天命、施陳教則勤勞)」。

【文思】 天地を治める智慧のこと。『尚書』堯典「昔在帝堯、聰明文思、光宅天下(孔穎達疏。此堯身、智無不知聰也、神無不見明也、以此聰明之神智、足可以経緯天地、即文也、又神智之運、深敏於機謀、即思也)」、又「曰、放勳欽明、文思安安(馬融注。経緯天地謂之文、道德純備謂之思)」。

【御曆】 曆を公布すること、転じて天子が天下に君臨すること。『隋書』卷四九・牛弘伝「(弘)上表請開献書之路曰……、武王問黄帝・顓頊之道、太公曰、在丹書、是知握符御曆、有国有家者、曷嘗不以詩書而為教、因礼楽而成功也」。

【吞沙静孽……義農擁篲】 中国太古の帝王・聖人の事跡を引いて、天下を統一した唐王朝を称える。

【吞沙静孽】 黄帝が乱を起こした蚩尤を破り中国を平定したことを言う。吞沙とは蚩尤の兄弟が沙石を食したことを指す。『史記』卷一・五帝本紀「蚩尤作乱、不用帝命、於是黄帝乃徵師諸侯、与蚩尤戰於涿鹿之野、遂禽殺蚩尤、而諸侯咸尊軒轅為天子、代神農氏、是為黄帝(張守節・正義。龍魚河図云、黄帝撰政、有蚩尤兄弟八十一人、並獸身人語、銅頭鉄額、食沙石子)」。孽は孽に同じ。孽は惡逆の意。

【練石称神】 太古、天が欠けた際に女媧が五色の石を用いて天を修復した故事。『淮南子』覽冥訓「往古之時、四極廢、九州裂、天不兼覆、地不周載……、於是女媧鍊五色石以補蒼天、断鼈足以立四極」。

【巢燧】 有巢氏と燧人氏。有巢氏は人に住居を作って禽獸の害を避けることを、燧人氏は火をおこして食物を調理することを教えた。慧琳『音義』には、「抱朴子曰、上古帝王有巢氏也、是時禽狩茲多、人民巢居、以避群害、故号有巢氏。繫辭伝曰、上古穴居而野處、後代聖人易之以宮室。……、抱朴子曰、上古質朴、茹毛飲血、生噉蟲魚及諸果実、多有腹疾之患、是故聖人鑽燧求火、變生作熟、因名為燧人氏也」とあるが、現行本『抱朴子』には、この条は見えない。

【執鞭】 馬車の御者となること。『論語』述而「子曰、富而可求也、雖執鞭之士、吾亦為之(注。鄭玄曰、富貴不可求而得之、

当修徳以得之、若於道可求者、雖執鞭之賤職、我亦為之」。「巢燧執鞭」とは、有巢・燧人さえもが御者となるほど唐王朝が偉大であることを言う。

【義農】伏羲氏（または庖羲）と神農氏。伏羲は文字を發明し、神農氏は人に農業を教えた。孔安国『尚書』序「古者、伏羲氏之王天下也、始画八卦、造書契、以代結繩之政、由是文籍生焉」、『逸周書』「神農之時、天雨粟、神農耕而種之、作陶冶斤斧」（『初学記』卷九・帝王部・總叙帝王）。

【擁篲】篲は篲・箒に同じ。箒を以て高貴な人の歩く所を先払いすること。『史記』卷七四・孟子伝「是以騶子重於齊。適梁、恵王郊迎、執賓主之礼。適趙、平原君側行撤席。如燕、昭王擁篲先驅（索隱。按、篲、帚也、謂為之掃地、以衣袂擁帚而卻行、恐塵埃之及長者、所以為敬也）」。「義能擁篲」は、伏羲・神農さえもが先払いをするほどの唐王朝の威光をさす。

【懸法王之鏡……混車書於細柳】仏教を奉ずる唐王朝の版図が、東の果てから西の果てまで全天下を覆うことを誇る。

【法王之鏡】法王は仏、仏法を衆生の姿を映す鏡に譬えたもの。『妙法蓮華經』卷二・譬喻品「我為法王、於法自在」（大正九・一五b）、『大方広仏華嚴經』（六十華嚴）卷五・菩薩明難品「諸仏聖福田、令衆生悅樂、譬如明淨鏡、隨對現衆像」（大正九四二八b）。

【梵帝之輪】梵帝は仏の別名か。輪は法輪。『大乘悲分陀利經』卷八・菩薩集品「爾時世尊復作是言……乃至如前説、略説仏号、

其名曰妙光藏仏、音智藏仏……、流布王仏、梵帝声仏、皆如前説」（大正三・二八七b）、『大乘密嚴經』卷中・入密嚴微妙身生品「及諸刹土王、深解觀行者、咸欲聞如來、所説甚深法、皆願聽尊者、微妙梵帝声、如來所悅可、深遠善巧声、演説殊勝義、悉令得明了」（大正一六・七五八b）、唐・李迥秀・慈恩寺九日応制「沙界人王塔、金繩梵帝遊」（『唐詩紀事』卷九）。

【被正朔】正朔は曆。中国王朝の曆を奉ずること。『文選』卷三五・張協・七命「若乃華裔之夷、流荒之貊、語不伝於輶軒、地不被乎正朔、莫不駿奔稽顙、委質重詎」。

【蟠桃】中国の東方にあるとされた地名。蟠木ともいう。『大戴礼記』五帝徳「孔子曰、顓頊、黄帝之孫、昌意之子也、曰高陽……乘龍而至四海、北至於幽陵、南至于交趾、西濟于流沙、東至于蟠木。動静之物、大小之神、日月所照、莫不祇勵。」また、慧琳『音義』には「山海經云、東海中、有桃都山、山上有大桃樹、名曰桃都、其根盤結、五百余里、枝相去三千里、樹上有金色天鵝、日初出時、光照此樹、天鵝即鳴、天下衆鵝、皆隨而鳴」。

【混車書】車の轍と文字を統一した秦始皇帝の故事に因む。慧琳『音義』「案豐流為混、同流不分也。案車者、車轍跡也、書謂文字符印也。言混車書者、天下轍迹共同、文字無別同一、王化四海為家也」。

【細柳】中国の西方にあるとされた地名。『論衡』説日「儒者論、日且出扶桑、暮入細柳。扶桑、東方之地、細柳、西方之地也」。

桑・柳天地之際、日月常所出入之处」。なお、慧琳『音義』には「山海經云、西海中近、日月所没之处、小洲名也、有常陽山、

日月所入也。即此洲也、一名細柳、亦名陽柳島」とあるが、現行本『山海經』にはこの文章は見えない。

III 菩提流志の履歴

〔訓読〕

三蔵沙門菩提流志なる者は、南天竺国の浄行婆羅門種にして、姓は迦葉氏なり。年十有二にして、外道出家し、波羅奢羅に事え、声明・僧伽等の論、並びに曆数・呪術及び陰陽等を学ぶ。年耳順を踰えて、遽かに乃ち心帰し、外法の乖違せるを知り、釈教の深妙なるを悟り、名岳に隱居し、頭陀を積習す。初め耶舍瞿沙三蔵に就きて經論を学び、其の後遍く五天竺国に遊ぶ。

〔語釈〕

【菩提流志】『開元釈教錄』卷九(大正五五・五七〇a)、『宋高僧伝』卷三(大正五〇・七二〇b)に伝あり。後者はこの「大宝積經序」および「大宝積經述」(後掲)を要約したものである。

【浄行】浄行は brāhmana (婆羅門) の漢訳。

【迦葉氏】慧琳『音義』「梵語略也、正梵音云、迦薑佉反撰波、即天竺国之大姓也」。

【婆羅門種】『長阿含第六小緣經』「我婆羅門種為最第一、余卑劣」。

【波羅奢羅】伝記未詳。

【声明】声に関する學術の意で五明の一。文字音韻及び文法語法の学。五明とはこの外に工巧明(技術・工芸・曆数)、医方明(医学・薬学・呪い)、因明(論理学)、内明(宗教哲学)である。

【心帰】心から帰依すること。「至心帰命」「信心帰向」などの略。『弘明集』卷一三・郗嘉賓・奉法要「三自帰者、帰仏帰十二部経帰比丘僧、過去見在当来三世十方仏、三世十方経法、三世十方僧、每礼拜懺悔、皆当至心帰命、并慈念一切衆生、願令悉得度脱」(大正五二・八六a)。

【僧伽】Saṅghaの音訳。外道の学派の一。数術もしくは制数論と漢訳される。

【積習】修行を積むこと。『大智度論』卷七三・阿毘跋致品「積習般若故深入智慧、是菩薩知法味微妙故」（大正二五・五七二c）。

【頭陀】dhūtaの音訳。衣食住に関する貪りを払うための修行。糞掃衣・但三衣・常乞食・不作余食・一坐食・一揣食・空閑処・

塚間坐・樹下坐・露地坐・隨坐・常坐不臥を十二頭陀行と言う。【耶舍瞿沙三藏】伝記未詳。『開元釈教録』卷九・菩提流志伝に「時有大乗上座部三藏、厥号耶舍瞿沙」（大正五五・五七〇a）とあるのみ。

IV 菩提流志の入唐と大宝積經の訳出

【訓読】

高宗天皇大帝、其の遠譽を聞き、其の道風を抱み、永淳二年（六八三）、使を遣わして迎接せしむ。天后聖帝、乾に応じ契を司り、宁に当りて図を披く。東都に住して、福先寺に居らしめ、仏境界・宝雨・花嚴等經一十一部を訳せしむ。中宗孝和皇帝、機に循い運を履み、永に配し極に登る。神龍二年（七〇六）、京下に住して、崇福寺に於て、此の經を翻訳せしむ。俄かに属ま靈祐徴を虧き、綿区より禍を集め、喬岳の仙長往し、茂陵の駕還らず。朕は庸虚を以て、謬ちて不構を膺け、敬んで前旨に遵い、勵めて斯の編に就く。法師は故文を尋繹し、新句を發揮し、炎涼に懈らず、曉夕に疲を忘る。旧翻新翻、凡そ四十九会有り、惣べて其の部帙一百二十卷成りて、先天二年（七一二）六月八日を以て、功を畢え内に進む。

【語釈】

【天皇大帝……、遣使迎接、……】『開元釈教録』卷九・菩提流志伝によれば、「天皇遠聞雅譽、遣使往邀、未及使還、白雲遽駕、暨天后御極、方赴帝京、以長寿二年（六九三）癸巳、創建

都邑」とあり、菩提流志が長安に到達したのは、高宗崩御の後である。

【天皇大帝】高宗・李治の諡号。『唐会要』卷一・帝号上「弘道

元年十二月四日、崩於東都貞觀殿、……諡曰天皇帝、廟号高宗。

【聞其遠譽】『大唐大慈恩寺三藏法師傳』卷二「法師在迦濕彌羅時。聲譽已遠諸國皆知」(大正五〇・二三二a)。

【挹其道風】道風は仏道が衆生を導くこと、風が草をなぎかせることに譬えたもの。挹は汲み取る、引く。『広弘明集』卷二三・僧行篇・謝靈運・廬山慧遠法師誄「於昔安公、道風允被、大法將尽、類網是寄」(大正五二・二六七a)。

【迎接】客を迎えて接待する。『後漢書』列伝六一・皇甫嵩伝「今卓在洛陽、天子来西、以將軍之衆精兵三万、迎接至尊、奉令討逆、殄命海内、徵兵群帥、袁氏逼其東、將軍迫其西、此成禽也」。

【天后聖帝】則天武后の諡号。『唐会要』卷三・皇后「崩於洛陽仙居殿、諡曰大聖則天皇后、……唐隆元年(七一〇)七月七日、依旧為天后。景雲元年(七一〇)十月十八日、改為大聖天后。延和元年(七一二)六月十七日、又改為天后聖帝。八月五日、改為聖后。開元四年(七一六)十二月、改為則天后、……」。『唐会要』の記事に従うとするなら、この先天二年(七一二)の時点では、則天武后の諡号は「聖后」とあるべきだが、「天后聖帝」とする理由は不明。

【応乾】天意に應ずること。乾は天を象徴する。『易』乾・彖伝「大哉乾元、万物資始、乃統天、……首出庶物、万国咸寧」、『三

人上書曰、……伏惟陛下応乾符運、至德発聞、升昭于天、是三靈降瑞、人神以和、休徵雜沓、万国響応、雖欲勿用、將焉避之」。

【司契】聖人が天下に臨むこと。『老子』第七九章「是以聖人執左契、而不責於人、有德司契、無德司徹(河上公注。古者、聖人執左契、合符信也、無文書法律、刻契合符、以為信也)」、『文選』卷六・左思・魏都賦「上垂拱而司契、下緣督而自勸」。

【当宁披図】『初学記』卷九・總叙帝王・事対「当宁・置図。礼記曰、天子当展而立、諸侯北面而見天子、曰覲、天子当宁而立、諸公東面、諸侯西面、曰朝。春秋孔演図曰、王者当置図録坐旁、以自正也」。

【当宁】宁とは、門と屏の中間のこと、天子はここに立って諸侯の謁見を行う。『礼記』曲礼「天子当宁而立、諸公東面、諸侯西面、曰朝(孔穎達疏。宁者、爾雅云、門屏之間、謂之宁)」。ここでは、則天武后が皇帝として即位し武周王朝を開いたことを指す。

【披図】地図を広げること。武后が版図を己のものとしたことを言う。『後漢書』列伝七・馮異伝「永初六年、安帝下詔曰……、予末小子、夙夜永思、追惟勳烈、披図案籍」、庾信「三月三日華林園馬射賦」「臣聞、堯以仲春之月、刻玉而遊河、舜以甲子之朝、披図而巡洛」(『庾子山集』卷一)。

【東都】洛陽のこと。

【福先寺】『唐会要』卷四八・寺「福先寺。遊藝坊。武太后母楊

氏宅。上元二年、立為太原寺。垂拱三年二月、改為魏國寺。天授二年、改為福先寺。『唐兩京城坊考』卷五「次北延福坊。福先寺。有水磧、四輪齊輻。名画記、福先寺吳道玄画地獄變、有病龍最妙。旧書德王裕伝、昭宗至雒下、一日幸福先寺」。

【仏境界】『文殊師利所説不思議仏境界經』二卷（大正一二、No. 340）。『大周刊定衆經目錄』卷一「文殊師利所説不思議仏境界經、一部、二卷。或一卷、二十七紙。右、大周長寿二年、三藏法師菩提流志、於大周東寺訳」（大正五五・三八〇a）、『開元釈教録』卷九「文殊師利所説不思議仏境界經二卷。見大周録、或一卷、初出与宝積第三十五善德天子会同本、長寿二年（六九三）於大周東寺訳」（大正五五・五六九b）。

【宝雨】『宝雨經』一〇卷（大正一六、No. 660）。『大周刊定衆經目錄』卷四「宝雨經、一部、十卷。一百八十六紙。右大周長寿二年、三藏梵摩、於仏授記寺訳」（大正五五・三九六b）、『開元釈教録』卷九「宝雨經十卷。見大周録第三、出与梁曼陀羅所出宝雲經同本、長寿二年於仏授記寺訳、沙門処一等筆受」（大正五五・五六九b）。

【花嚴】『大方広仏華嚴經』八十卷（実叉難陀訳、大正一〇、No. 279）。『開元釈教録』卷九・菩提流志伝には、彼が「八十華嚴」の訳出に關係したとする記述は見えない。

【十一部】菩提流志の武周時代における訳出は、『大周刊定衆經目錄』では①「護命法門神呪經」一卷（於仏授記寺）、②「大乘金剛髻珠菩薩修行分經」一卷（於大周東寺）、③「有徳女所問

大乘經」一卷（同前）、④「文殊師利所説不思議仏境界經」二卷（同前）、⑤「実相般若經」一卷（同前）、⑥「不空罽索呪心經」一卷（於仏授記寺）、⑦「大乘迦耶山頂經」一卷（於大周東寺）、⑧「宝雨經」一〇卷（於仏授記寺）、この外、『開元釈教録』では⑨「六字神呪經」一卷（同前）、⑩「般若波羅蜜多那經」一卷（於大周東寺）、⑪「妙慧童女所問經」一卷（同前）、⑫「妙徳婆羅門女問仏転何法輪經」一卷（同前）、⑬「智猛長者問經」一卷（於仏授記寺）、⑭「仏入毘耶離除一切鬼病經」一卷（同前）、⑮「那邪經」一卷（同前）、⑯「大陀羅尼經」一卷（同前）、⑰「文殊師利呪法藏經」一卷（同前）、⑱「一字呪王經」一卷（同前）、⑲「無迦略曳菩薩造広大摩尼秘密善住經」一卷（同前）、⑳「釈般若六字三句論」一卷（同前、以上いずれも長寿二年訳出）となっており、十一部ではなく、二〇部である。

【孝和皇帝】中宗の諡号。『唐会要』卷一・帝号上「景龍四年（七一〇）六月二十二日崩於神龍殿。……諡曰孝和皇帝、廟号中宗」。

【循環】時機に従うこと。『旧唐書』卷二一・礼儀志一「則天臨朝、垂拱元年七月、……鳳閣舍人元万頃・范履冰等議曰、伏惟……太宗文武聖皇帝紹統披元、循環闡極……」。

【履運】時運に乗じること。『晋書』卷七一・孫惠伝「後東海王（司馬）越拳兵下邳……、以書干越曰……、以明公達存亡之符、察成敗之變、審所履之運、思天人之功、陶淵明・歲暮和張常侍「撫己有深懷、履運增慨然」（『陶靖節集』卷二）。

【配永】 長く天命に添うようこと。『詩』大雅・文王「無念爾祖、

聿脩厥德、永言配命、自求多福（毛伝。聿、述。永、長。言、我也。我長配天命而行、爾庶国、亦当自求多福）」、『尚書中候』

「帝軒提像、配永修機、麒麟在囿、鸞鳳來儀」（『芸文類聚』卷九八・祥瑞上・麟）、王勃・九成宮頌「肇三宮而配永、憑大室而高視」（『王子安集』卷一三）。

【登极】 皇帝として即位すること。長孫無忌・進唐律疏議表「体国経野、御弁登极（原注。登极者、北極為天极、居其所而衆星拱之、人君之象、故人君即位曰登极、亦曰登极）」（『唐律疏義』）。

【京下】 長安城内のこと。洛陽を東都と言うのに対して、長安は西京と呼ばれた。

【崇福寺】 『唐会要』卷四八・寺「崇福寺。林祥坊。本侍中楊恭仁宅。咸亨二年九月二日、以武后外氏宅立太原寺。垂拱三年十二月、改為魏国寺。載初元年五月六日、改為崇福寺」、詳しくは小野勝年『中国隋唐長安・寺院史料集成』（法蔵館、一九八九年）一一二・崇福寺を参照。

【俄属靈祐虧徴、綿区集禍、喬岳之仙長往、茂陵之駕不還】 中宗が、韋后とその娘安樂公主に弑殺されたことを言う。『旧唐書』卷七・中宗本紀「時安樂公主志欲皇后臨朝称制、而求立為皇太女、自是与后合謀進酖鳩。六月壬午、帝遇毒、崩于神龍殿」。

【靈祐】 『後漢書』列伝一〇・王霸伝「霸謝曰、此明公至德神靈之祐、雖武王白魚之心、無以加之」。曹植・魏徳論「義貫金石、

神明以興、神祇致祥、乾靈效祐」（『芸文類聚』卷一〇・符命）。

【芸文類聚】 卷五一・封爵部・遜讓封「又上書讓費亭侯曰、臣伏讀前後策命、既録臣庸才微功……、皆祖宗之靈祐。陛下之聖徳。豈臣愚陋。何能克堪」。

【虧徴】 虧は欠ける、損なう。徴はしるし、兆し。適例未見。

【綿区】 綿々と広がる疆域。『梁書』卷五〇・侯景伝「我大梁膺符作帝、出震登皇。浹寓歸仁、綿区飲化」、『隋書』卷五八・許善心伝「製神雀頌、其詞曰……、粵我皇帝之君臨、闢大方、抗太極、負鳳邸、拋龍図。……、綿区浹宇、遐至逯安」。

【喬岳之仙長往、茂陵之駕不還】 前漢・武帝が泰山で封禪を行い、仙術を学び、のち昇仙したとする故事に因んで、中宗が崩御したことを婉曲に表現する。武帝昇仙については、六朝頃成立したとされる『漢武帝内伝』（『太平広記』卷三・漢武帝）に見える。

【喬岳】 泰山（また岱山、岱宗とも）に同じ。『詩』周頌・時邁「懷柔百神、及河喬嶽（毛伝。喬、高也。高嶽、岱宗也）」、『唐大詔令集』卷一一・遺詔上・太宗遺詔「功兼造化、喬山之樹已陰、業致昇平、蒼梧之駕方遠」

【長往】 遠方に旅立つこと、転じて死去の婉曲な表現とする。王筠・昭明太子哀策文「威儀上賓、德音長往」（『芸文類聚』卷一六・儲宮）。謝朓・齊敬皇后哀策文「馮相告峻、宸居長往（李善注。謂明帝崩也）」（『文選』卷五八）。

【茂陵】 前漢武帝の陵墓。

【駕不還】 長往と同様、死去の婉曲表現。また晏駕とも。『旧唐書』卷一九〇中・文苑伝中・賀知章伝「(知章) 寿終、年八十六、肅宗以侍読之旧、乾元元年十一月詔曰……、駕青牛而不還、狎白衣而長往」。

【庸虚】 凡庸で中身のないこと。謙遜の辞。『陳書』卷一・高祖本紀「高祖泣謂休悦曰、僕本庸虚、蒙国成造」。参考、『資治通鑑』卷一七四・陳紀八・太建一二年「吾以庸虚、受茲顧命(胡三省注。庸、言身無所能、虚、言胸中無所有、謙辞也)」。

【謬膺】 膺は受ける。『隋書』卷四八・楊素伝「手詔勞素曰、我有隋之御天下也、于今二十有四年、……朕本以藩王、謬膺儲兩、復以庸虚、纂承鴻業」。

【丕構】 丕構に同じ。偉業の意。『旧唐書』卷一二・德宗本紀上「興元元年春正月癸酉朔、上在奉天行宮受朝賀、詔曰、立政興化、必在推誠、忘己濟人、不吝改過。朕嗣服丕構、君臨万邦、失守宗祧、越在草莽。参考、『資治通鑑』卷二二九 唐紀四五・興元元年・胡三省注「丕、大也、構、立屋也。『書』大誥曰「若考作室、既底法、厥子乃弗肯堂、矧肯構」、丕構之語、本諸此」。

【敬遵】 『宋書』卷二・武帝本紀中「甲子、策曰……、授帝位于爾躬、大祚告窮、天祿永終。於戲、王其允執其中、敬遵典訓」。

【前旨】 『魏書』卷四七・盧昶伝「詔昶曰、……今既痊復、宜遵前旨、秉戈揮銳、殄寇為壞」。

【昴就】 昴は勉に同じ。

【斯編】 『文心雕龍』卷四・史伝「贊曰、史肇軒黃、体備周孔、世歷斯編、善惡偕総」。

【尋繹故文】 『大宝積經』四九会のうち二三会が旧訳を用いたものであることをいう。『論語』為政「子曰、温故而知新、可以為師矣(何晏集解。温、尋也、尋繹故者、又知新者、可以為人師矣)」。

【發揮新句】 四九会のうち二六会を菩提流志が新たに訳出したことを言う。『易』説卦「昔者聖人之作易也……、發揮於剛柔而生爻、和順於道德而理於義、窮理尽性以至」、則天武后・新訳大

乗入楞伽經序「三藏沙門于闐国僧実叉難陀大徳・大福先寺僧復礼等……、故能了達冲微、發揮奥蹟」(大正一六・五八七a)。

【不解】 解はまた解に通じ、おこたる、なまけるの意。『詩』大雅・仮楽「不解于位、民之攸斃」、『国語』周語中「以敬承命則不違、以恪守業則不懈」。

【忘疲】 『魏書』卷八・世宗本紀「帝幼有大度、喜怒不形於色。雅愛經史、尤長釈氏之義、每至講論、連夜忘疲」。

【進内】 内は宮内・宮中。皇帝に進呈すること。

V 結語・功德の祈念

〔訓読〕

法師、戒珠は握に在り、慧炬は心を明らかにし、法門の棟梁と為りて、僧徒の耳目を啓く。伏して願うらくは、上は七廟に資し、八百の祚の長延ならんことを、下は万方に及びて、億兆の^{なみ}毗の恒逸ならんことを。遠迹寧謐し、朝野歛娛し、澆俗を淳源に致し、迷生を寿域に帰せんことを。暫く紫機の暇に乘じて、聊か細帙の前に題す。所有の会名は、其の目に具すと云爾^{しかい}。

〔語釈〕

【戒珠】 戒律を宝珠に譬えたもの。『梵網經』卷下「戒如明日月、亦如瓔珞珠」(大正二四・一〇〇四a)、梁・簡文帝・湘宮寺智積法師墓志銘「嗟爾名德、超然有暉、五塵夙離、三脩九依、戒珠靡缺、忍鎧無違」(『芸文類聚』卷七七・内典下・寺碑)、法琳『破邪論』卷下「宣忍服戒珠之旨、啓優波木叉之規」(大正五二・四八八c)。

【在握】 常に持すること。陳・周弘讓・答王褒書曰「丹絰在握、貧病莫諸」(『芸文類聚』卷三〇・人部一四・別下)。

【慧炬】 智慧が無明の闇を照らすことを燈炬に喩える。『大般涅槃經』卷二・光明遍照高貴德王菩薩品「汝於仏性、猶未明了、我有慧炬、能為照明」(大正二二・四九〇a)。

【明心】 『大方広仏華嚴經』(六十華嚴)卷一一・功德華聚菩薩十行品「於仏光明心無所著、於諸仏利心無所著」(大正九・四六九

b)。

【棟梁】 『統高僧伝』卷三・唐京師紀国寺沙門釈慧浄伝「誠仏法之棟梁、実僧徒之領袖者也」(大正五〇・四四三c)、『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷八「乃有三藏玄奘法師者……、実三宝之棟梁、四衆之綱紀者也」(大正五〇・二六二c)。

【耳目】 『統高僧伝』卷三・唐京師紀国寺沙門釈慧浄伝「為像法之梁棟、變群生之耳目」(大正五〇・四四二c)。

【上資七廟、八百之祚長延】 『大宝積經』の功德が、唐室李氏の祖先と子孫との福運に資することを祈願する。

【七廟】 天子の祖廟。『礼記』王制「天子七廟、三昭三穆、与太祖之廟而七」。

【八百之祚】 祚は祚胤、福運が子孫にまで及ぶこと。『詩』大雅・既醉「君子万年、永錫祚胤」(鄭玄箋。長子女福祚、至于子

孫)。また八百は多数をあらわす。『唐会要』巻六三・史館上・

史館雜錄上「貞觀九年十月、諫議大夫朱子奢上表曰、……大唐雖七百之祚、天命無改、至於曾玄之後、或非上智。このほか、「蓋螽斯之福、則百祚之興也」(『後漢紀』巻一八・順帝陽嘉元年条)、「方隆七百之祚、為万世之美」(『晉書』巻一一八・載記)、「成湯光六百之祚」(『魏書』巻七八・張普惠伝)などの例がある。

【下及万方、億兆之乇恒逸】『大宝積經』の功德が、天下の万民に及ぶことを祈念する。

【万方】多数の国々。『書』湯誥「王帰自克夏、至于亳、誕告万方」。

【億兆之乇】乇は民に同じ。魏・王粲・難鍾荀太平論「豈億兆之民、歷数十年、而無一人犯罪、一物失所哉」(『芸文類聚』巻一・帝王部・總載帝王)、『晉書』巻二〇・礼志中「泰始二年八月、……孚等重奏曰、……陛下以社稷宗廟之重、万方億兆之故、既從權制、釈除衰麻、群臣百姓吉服」。

【遠迹】迹は近に同じ。『書』旅獒「嗚呼、明王慎徳、四夷咸賓、無有遠迹、畢献方物」、『旧唐書』巻九三・王峻伝「景龍末……、乃下勅曰……、卿処事強濟、遠迹寧静、築城務農、利益已広」。

【寧謐】穏やかで安らかなこと。よく治まること。『宋書』巻六一・廬陵孝献王義真伝「伏惟高祖武皇帝誕茲神武、撫運龍興……、藩王哲茂、四維寧謐」。『南齊書』巻一・高帝本紀上「宋帝禅位、下詔曰、相国齐王、天誕叡聖、河嶽炳靈……、表裏清

夷、遐迹寧謐」。

【朝野飲娛】庾信・哀江南賦「于時朝野飲娛、池台鐘鼓」(『周書』巻四一・庾信伝)、『隋書』巻二・高祖本紀下「史臣曰、高祖龍徳在田、奇表見異……、人物殷阜、朝野飲娛、二十年間、天下無事、区宇之内晏如也」。

【澆俗】澆は薄い。『弘明集』巻一〇・大梁皇帝勅答臣下神滅論・太子中庶陸杲答「良由迷発俗学、便澆俗以況道」(大正五二・六一b)・唐・太宗・執契静三辺「澆俗庶反淳、替文聊就質」(『文苑英華』巻一六七・詩一七・帝徳)。

【淳源】王巾・頭陀寺碑文「淳源上派、澆風下黷(呂延濟注。淳和之源、自上流派、而澆薄之風、垢濁於下)」(『文選』巻五九)、『陳書』巻三三・儒林伝・陳不害「不害上書曰……、自淳源既遠、澆波已扇、物之感人無窮、人之逐欲無節」。

【迷生】迷える衆生。『南海寄帰内法伝』巻二・衣食所須「即須俯視生涯、是迷生之牢獄、仰睇寂岸、為悟寂之虚閑」(大正五四・二二b)・李儼「法苑珠林」序「導迷生於慾海、情塵共心垢同消、引窮子於慈室、衣宝与髻珠双至」(大正五三・二六九a)。

【寿域】『大唐西域記』巻一二・記讃「是以声教之所需被、馳驚福林、風軌之所鼓舞、載驅寿域」(大正五一・九四六a)・唐・梁昇卿・奉和明皇答張説南出雀風谷詩「幽林承惠沢、閑谷見清光、日御仙途遠、山靈寿域長」(『唐詩紀事』巻一四)。参考、『漢書』巻二二・礼楽志「願与大臣延及儒生、述旧礼、明王制、驅一世之民、濟之仁寿之域(顔師古注。言以仁道治之、皆得其性、

則寿考也、域、界也」。

【紫機】 朝廷の政務。紫は紫宮・紫禁など皇帝の宮殿を意味する。唐・陳子昂・為陳御史上奉和秋景觀競渡詩表「黃屋務閑、紫機時暇」(『陳伯玉文集』卷三)。

【細帙】 細は浅黄色。梁・湘東王繹(元帝)・梁簡文帝法寶聯璧序「履道為興、策賢成駟、降意韋編、留神細帙」(『弘明集』)

卷二〇・法義篇四之三、大正五二・二四三a)。梁・昭明太子・『文選』序「詞人才子、則名溢於縹囊、飛文染翰、則卷盈乎細帙(呂向注。細、浅黄色也、帙、書衣、盈、溢言多也)」。

【所有会名、具於其目云爾】 『大寶積經』の会名は卷首の目錄に具備している。云爾は文末結びの語。

(米田健志)

六 大寶積經述

〔原文〕

大寶積經述

朝議郎行河南府告成縣主簿徐鏐撰。

夫日月出矣。而輝耀十方。時雨降矣。溥漉萬物。況我身常樂。湛虛空之相。妙覺圓明。融心行之本。唯噉・唯味・不生・不滅者哉。是以闢無學之地。聿修迦蘭。² 啓息言之津。宣作羅奈。智勝菩薩。起方便之緣。淨居天人。發成就之力。稱謂所絕者。其第一義乎。自恆星夜掩。仙虹晝燦。青鉢傳其辟容。寶棺現其金臂。法山摧倒。拂魔箭於危屏。直水橫流。係慈航於彼岸。³ 烏虜。⁴ 妙藏不可以常祕。戒輪不可以終鑿。雖雙林下。書示於泥洹。逮一千年。通被於聲教。龍持貝葉。亟傳摩竭之城。象負蓮華。遂滿真丹之境。三十七品。慈悲於火宅。一十二經。引喻於沙界矣。⁵ 大寶積經者。後漢迦葉摩騰竺法蘭。⁶ 及今朝玄奘法師・菩提流志等。咸自西天竺所致也。如來昔在鷲峯。利建平等。金口注海。酌之而不竭。寶言如

綸。振之而有緒。炯茲瑞憲。⁷久翳鴻都。原壑鴻非。市朝多變。歷代徇齊之主。競與參譯。跋陀授記之言。罕能不就。泊我唐之有天下也。功橫鐵圍。化縣忉利。苑禦千界。提封萬利。⁸張四攝之扉。廣納諸有。騁六道之驥。⁹冥濟羣惑。太上皇以澤深智海。¹⁰掌輝禪珠。神皇帝以助格梵空。¹¹宵懸法印。肅敷玄誥。昭灑鴻波。歷選繼徒。明敷列宋。博考同異。聿與刊緝。勇振顏綱。¹²嚴持絕紐。爰有沙門大德思忠・東天竺國婆羅門大首領臣伊舍羅等。譯梵文者。求善住緣。悟無生忍。博聞強識。精而譯之。復有天竺沙門波若屈多・沙門達摩。證梵義者。開忍辱場。破煩惱衆。弼諧神侶。明而辯之。¹³復有沙門大德履方・宗一・普敬・慧覺等。筆授者。令問孔膠。¹⁶威儀不忒。手握仙扎。¹⁷受而字之。復有沙門大德深亮・勝莊・塵外・無着・慧迪等。證義者。國之大師。佛之右臂。探諸了義。演而證之。復有大德沙門承禮・雲觀・神暎・道本等。次文者。庇影多林。息肩香窟。勤修精進。纂而次之。復有潤文官者。銀青光祿大夫邠王傳上柱國固安縣開國伯盧榮・銀青光祿大夫太子詹事崇文館學士兼修國史上柱國東海縣開國公徐堅・朝議大夫守中書舍人崇文館學士上柱國舒王縣開國男蘇晉・朝議郎給事中內供奉崔璩等。位列鳳墀。²⁰聲流雞園。分別二諦。潤而色之。復有銀青光祿大夫守侍中兼太子左庶子兼修國史上柱國鉅鹿縣開國公魏知古・兵部尚書上柱國郭元振・銀青光祿大夫檢校中書令上柱國范陽縣開國男張說・銀青光祿大夫行中書侍郎同中書門下三品監修國史上柱國興平縣開國侯陸象先等。朝踐瑣闥。²¹夕遊珠域。護持四法。摠而閱之。爾乃杖錫之士。端珪之俊。麻列定筵。林攢樂土。蔭祥雲而演譯。倏換炎涼。吸甘露而勤求。載法衡畧。²²大乘章句。義不唐捐。小品精微。拯無遺溺。能事畢矣。佛何言哉。今所新翻經。凡有四十九會七十七品。合一十二帙。以類相從。撰寫咸畢。以先天二年六月三十日進。太上皇。²³八月二十一日進。皇帝。²⁴禁闥曉闢。眞教上聞。仙宁克怡。²⁵宸襟允穆。竦鈞陳於白日。²⁶親御靈臺。落雲雨於彤霄。荐加殊尉。²⁷賢愚稽首。以爲利見仁王。眞俗歸心。以爲潛登覺道。次有清信佛弟子前少府監丞李式顏等。皇朝金紫光祿大夫兵部尚書贈侍中隴西公迥秀子也。復有清信佛弟子前右拾遺徐鑄等。皇朝銀青光祿大夫太子賓客昭文館學士高平公子也。咸屬彼穹隆禍。私門墜構。陟遙帖而崩心。瞻冥途而獻福。於是肱篋探竒。檀波羅蜜。廣疊簡牋。首崇書寫。不變槐火。遽盈苔秩。²⁸然後裝之鏤軸。輟以瓊籤。²⁹羅綵簾而寬舒。播珠函而錦綉。方使猛風吹

嶽。長存如路之文。³⁰ 劫火燒大。³¹ 不壞多羅之典。

大正蔵の校記には「麗本不載此述、依明本採録、與宋本・元本・宮内廳本對校」とある。テキストとしては、

・『宋版磧砂大蔵經』第五冊。

・『卍續蔵經』（『新纂大日本統蔵經』第一〇卷）。

・『大正大蔵經』第一一卷。

・『中華大蔵經』第八卷所収の清蔵本。

・『全唐文』卷二九五。

の諸本を見ることができた。

〔校異〕

1 「朝議郎行河南府告成縣主簿徐鏐撰」大正蔵・卍統蔵・清蔵、「朝議郎」上有「唐」字。大正蔵校記、宋本・元本・宮内庁本「唐」字無し。

2 「迦蘭」全唐文作「伽藍」。

3 「係」卍統蔵・全唐文作「繫」。

4 「虚」大正蔵校記、宮内庁本作「零」。

5 「矣」大正蔵校記、宮内庁本作「夫」。「沙界」全唐文作「妙界」。

6 「後漢」大正蔵校記、宋本「漢」作「蓮」。

7 「烟」大正蔵・卍統蔵作「烟」。大正蔵校記、宋本・元本・

宮内庁本作「烟」。

8 「提」大正蔵校記、宋本・宮内庁本作「隄」。

9 「六道」諸本いずれも異同無いが、出典・語義からすれば六通に改めるべきか。後掲語釈参照。

10 「太上皇」大正蔵・卍統蔵・清蔵・全唐文では「太上皇」上に空格無し。

11 「神皇帝」大正蔵・卍統蔵・清蔵・全唐文では「神皇帝」上に空格無し。「梵空」全唐文作「梵宮」。

12 「綱」大正蔵校記、宋本作「網」。

13 「辯」大正蔵・卍統蔵・全唐文作「辨」。大正蔵校記、宮内

序本作「辯」。

14 「履方」大正蔵校記、宋本作「履正」。

15 「筆授」大正蔵校記、宮内序本「授」作「受」。

16 「令問」大正蔵・卍統蔵作「令聞」。大正蔵校記、宮内序本作「令問」。「孔膠」全唐文作「孔昭」。

17 「仙札」大正蔵・卍統蔵・清蔵・全唐文作「仙札」。

18 「深亮」大正蔵校記、宋本作「深高」。

19 「舒王縣」大正蔵・清蔵・全唐文作「野王縣」。大正蔵校記、宋本作「舒王縣」。「野王縣」に改むべし（語釈参照）。

20 「鳳墀」大正蔵作「鳳舞」。全唐文作「鳳池」。大正蔵校記、宋本・元本作「鳳墀」。

21 「瑣闥」大正蔵・清蔵・全唐文作「瑣闥」。大正蔵校記、宋本・元本作「瑣闥」。

22 「載法」大正蔵・卍統蔵・清蔵・全唐文作「載淹」。大正蔵

校記、宋本・元本作「載法」。

23 「太上皇」大正蔵・卍統蔵・清蔵では「太上皇」上に空格無し。

24 「皇帝」大正蔵・卍統蔵・清蔵では「皇帝」上に空格無し。

25 「仙宇」卍統蔵作「仙宇」。大正蔵校記、元本作「仙宇」。

26 「陳」大正蔵・卍統蔵作「陣」。

27 「荇加」全唐文作「蘆加」。

28 「苔秩」卍統蔵作「苔秩」。

29 「輟」大正蔵・卍統蔵・清蔵・全唐文作「綴」。大正蔵校記、宮内序本作「輟」。

30 「如路」大正蔵・清蔵・全唐文作「妬路」。卍統蔵作「拓路」。

31 「燒大」大正蔵・卍統蔵・清蔵・全唐文作「燒天」。

I 緒言・仏教の宣揚

〔訓読〕

大宝積經述

朝議郎・行河南府告成県主簿・徐鍔撰。

夫れ日月出でて、十方に輝耀し、時雨降りて、万物を澡灑す。況や我が身の常樂にして、虚空の相を湛え、妙覺の円明にして、心行の本に融し、唯噉・唯味・不生・不滅なるにおいてをや。是を以て無学の地を開き、聿に迦蘭を修め、息

言の津を啓き、^{ただ}直に羅奈を作す。智勝菩薩は、方便の縁を起こし、淨居天人は、成就の力を発す。稱謂の絶つ所は、其の第一義なる乎。

【語釈】

【大宝積經】「大宝積經序」訳注で既述。

【朝議郎・行河南府告成県主簿】朝議郎は正六品上の文散官。文散官は文官の官品を示すだけの官。告成県主簿が職事官で、實際の職務を有する官である。告成県は畿県（県の等級の一つ）であり、その主簿は正九品上である。職事官の官品が散官より低いため「行」字が加えられる。

【徐鏐】徐鏐は『旧唐書』『新唐書』に伝なし。『元和姓纂』卷二に「徐 仁会、高郵令。生彦伯。給事中、工部侍郎、右常侍、太子賓客。生鏐・鏐。鏐、洛陽令、司封郎中」とあり、また『唐会要』卷八五・逃戸・開元九年正月条に「告成県尉徐鏐」と見えるのみ。

【日月出矣……、時雨降矣……】仏法の恩沢を日月・時雨に譬える。参考、『莊子』内篇・逍遙遊「堯讓天下於許由、曰、日月出矣、而燭火不息、其於光也、不亦難乎、時雨降矣、而猶浸灌、其於沢也、不亦勞乎」。

【輝耀十方】輝耀は光り輝くこと。『大方広仏華嚴經（六十華嚴）』卷九・初発心菩薩功德品「一身悉充滿、一切諸仏刹、演出淨光明、輝耀無倫匹、遍照十方界、除滅一切闇、普降妙法雨、如海大龍王」（大正九・四五四c）。十方は、四方（東西南北）・四緯

（乾坤巽艮）・上下。転じて全世界を指す。

【澡漉万物】澡はそそぐ、洗ひ清める。漉は滴らせる。

【常樂】涅槃の四徳（常徳・樂徳・我徳・淨徳）のうちの常徳と樂徳。『大般涅槃經』卷二三・光明遍照高貴徳王菩薩品「二乗所得、非大涅槃、何以故、無常樂我淨故、常樂我淨、乃得名為大涅槃也」（曇無讖訳、大正一二・五〇二b）、『出三藏記集』卷八・涼州釈道朗・大涅槃經序「叙常樂我淨、為宗義之林、開究玄致、為涅槃之原」（大正五五・五九b）、北魏・温子昇・定国寺碑序「蓋兩儀交運、万物並生、始自苦空、終於常樂」（『芸文類聚』卷七七・内典下・寺碑）。

【湛虚空之相】『大方広仏華嚴經（六十華嚴）』卷七・賢首菩薩品「因縁所生非生性、如来法身非是身、湛然常住如虚空、因此化導成法光」（大正九・四三八a）、『大般涅槃經』卷一六・梵行品「三宝仏性及以虚空作無常相、如来終不為諸衆生作煩惱因縁」（大正一二・四五九b）。

【妙覺】仏の不可思議絶妙な無上の悟りのこと。『菩薩瓔珞本業經』卷上・賢聖學觀品「第四十二地、名寂滅心妙覺地、常住一相、第一無極、湛若虚空、一切種智、照達無生有諦始終」（大正二四・一〇一五c）、梁・簡文帝・上大法頌表「至理隆而徳音

闍、成功臻而頌声作、天上天下、妙覺之理独円、三千大千、無縁之慈普被」(『芸文類聚』卷七七・内典下・寺碑)。

【円明】 円満にして明浄なること、もしくは円満光明なること。

『大方広仏華嚴經』卷四四・入法界品「道師智亦然、普照三世法、譬如十五日、円満明淨月」(大正九・六八一b)、同卷三二・如來相海品「如來有大人相、名深宝原底衆宝莊嚴、放闍浮檀金色円満光明、普照十方世界法界顯現一切莊嚴道場」(大正九・六〇四c)。

【融心行之本】 心行は心のはたらき。『妙法蓮華經』卷七・妙莊嚴王本事品「爾時妙莊嚴王讚歎仏、如是等無量百千万億功德已、於如來前、一心合掌、復白仏言、世尊、未曾有也、如來之法、具足成就不可思議微妙功德教戒所行、安隱快樂、我從今日不復自隨心行、不生邪見憍慢瞋恚諸惡之心」(大正九・六〇c)、『文選』卷五九・王巾・頭陀寺碑文「況視聽之外、若存若亡、心行之表、不生不滅者哉(李善注。……竺道生曰、心行、心所行之行也)」。

【唯噉・唯味】 未詳。

【不生・不滅】 「大宝積經序」訳注に既出。本稿36ページの語釈参照。

【無学之地】 無学道に同じ。真諦の理を証し尽くして、さらに学修を要せざる円満の智慧を言う。『阿毘達磨俱舍論』卷二四・分別賢聖品「如是尽智、至已生時、便成無学阿羅漢果、已得無学応果法故、為得別果、所応修学、此無有故、得無学名」(大正二

九・一二六c)。

【事修】 『詩』大雅・文王「無念爾祖、事脩厥徳、永言配命、自求多福」。

【迦蘭】 迦蘭陀竹林の略。もと迦蘭陀長者所有の竹林であり、のち釈尊に奉じられて最初の僧園となった。竹林精舎。

【息言之津】 息言は無言と同じ。津は「渡し場」。『文選』卷五九・王巾・頭陀寺碑文「是以掩室摩竭、用啓息言之津(劉良注。掩室謂斂心入静也、華嚴經云、仏在摩竭提国、処寂滅道場。此言斂心於摩竭之國、用開不言之道也)」。

【羅奈】 羅奈は波羅奈・婆羅奈の略か。今のベナレス。釈尊が成道ののち初めて法を説いた鹿野苑が此処にある。『妙法蓮華經』卷二・譬喻品「仏昔於波羅奈初轉法輪」(大正九・一二a)、『阿育王伝』卷四「阿難答言、如是我聞、一時仏住波羅奈鹿野苑中古仙住处、為五比丘三轉法輪」(大正五〇・一一三b)。

【智勝菩薩】 大通智勝如來のことか。過去において八千劫の間、『法華經』を説いたという。『妙法蓮華經』卷三・化城喻品「仏告諸比丘、乃往過去無量無辺不可思議阿僧祇劫、爾時有一仏、名大通智勝如來」(大正九・二二a)。

【起方便之縁】 『維摩詰所説經』卷一・菩薩品「護持正法、起方便力、以度衆生、起四攝法」(大正一四・五四三c)。

【淨居天人】 淨居とは五淨居天(無煩天・無熱天・善現天・善見天・色究竟天)、淨居天人はそこに住する諸天のこと。『大方広仏華嚴經』(六十華嚴)『卷一・世間淨眼品』「復与摩醯首羅天等無

量淨居天俱、其名曰善光天、大主天、大稱光天、功德淨眼天、

大智慧光天、不動光音天、善施眼天、樂大乘天、普音声天、樂

称光天。如是一切已修無相平等法界、悉在如來大衆海數。於一

切衆生悉行平等、無量妙色皆已成就、於十力中能善安住、処一

切衆而不傾動。隨所至方無能壞者」(大正九・三九七a)。

【発成就之力】『大智度論』卷九四「菩薩摩訶薩大方便成就力、

住何等聖無漏法能受此身、而不為畜身所染」(大正二五・七一六

II 釈尊の布教と仏法東伝

【訓読】

恒星の夜に掩われ、仙虹の星に^{かがや}燃きて自り、青鉢は其の眸容を伝え、宝棺は其の金臂を現す。法山摧倒するも、魔箭を

危屏に払い、直水横流するも、慈航を彼岸に^{つな}係ぐ。烏虜、妙藏は以て常に秘す可からず、戒輪は以て終に^{もと}鑿る可からず。

双林下と雖も、^{かく}書として泥洹を示し、一千年に^{およ}逮びて、適に声教を被る。龍は貝葉を持して、亟やかに^{すみ}摩竭の城に伝え、

象は蓮華を負いて、遂に真丹の境に満つ。三十七品は、火宅に慈悲し、一十二経は、沙界より引喻す。

【語釈】

【恒星夜掩】釈尊誕生の時、中国において夜空が明るくなり、星

が見えなくなったことを言う。『魏書』卷一一四・釈老志「釈迦

生時、当周莊王九年、春秋魯莊公七年夏四月、恒星不見、夜明、

是也」、また『歷代三寶紀』卷一・帝年上・周秦「至第十九主莊

王他十年、即魯春秋莊公七年、夏四月辛卯、夜恒星不見、夜中

b)。

【称謂所絶】奥義は言葉によつては伝え得ないということ。『出

三藏記集』卷九・僧肇・長阿含經序「夫宗極絶於称謂、賢聖以

之冲默、玄旨非言不伝、釈迦所以致教」(大正五五・六三b)。

【第一義】究竟の真理。僧肇『注維摩詰經』卷一「於第一義而不

動。肇曰、第一義謂諸法一相義也、雖分別諸法殊相、而不乖一

相、此美法王莫易之道也」(大正三八・三三二c)。

星隕如雨。案此即是如來誕生王宮時也」(大正四九・二三a)。

【仙虹昼燦】釈尊入滅の際に、中国で空に白虹が現れたことを言

う。『法苑珠林』卷一〇〇・伝記篇・曆算部「穆王五十二年、壬

申之歲、二月十五日、仙年七十九、方始滅度。故涅槃經云、二

月十五日、臨涅槃時、出種種光、地大震動、声至有頂、光遍三

千。即周書異記云、穆王即位五十二年、壬申之歲、二月十五日旦、暴風忽起、發損人舍、傷折樹木、山川大地、皆悉震動、午後天陰雲黑、西方有白虹十二道、南北通過、連夜不滅、穆王問太史扈多曰、是何徵也、扈多對曰、西方有大聖人滅度、衰相現耳。仏入涅槃、即此年也」(大正五三・一〇二八b)。

【青鉢】 釈尊が在世中に用いた托鉢用の鉢。釈尊入滅ののち伝えられて中国に至ったとされる。『法苑珠林』卷三〇・住持篇・天王部「又依鉢記云、釈迦如來、在世之時、所用青石之鉢、其形可容、三升有餘、仏泥洹後、此鉢隨緣、往福衆生、最後遺化、興於漢境」(大正五三・五一三b)。

【粹容】 溫潤な容貌。『文選』卷六・左思・魏都賦「魏国先生有粹其容」(李善注。孟子曰、君子所性、仁義礼智根於心、其生色粹然見於面、不言而喻。趙岐曰、粹、潤沢貌也)。

【宝棺現其金臂】 釈尊入滅の際のことを言う。『菩薩從兜術天降神母胎說広普經』卷一・天宮品「二月八日夜半、躬自變僧伽梨・樽多羅僧・安陀羅跋薩、各三、牒敷金棺裏、觀身上脚脚相累、以鉢錫杖手付阿難……、爾時世尊欲入金剛三昧、碎身舍利、善哉不思議法、於娑婆世界、転此真実法、爾時世尊作是念已、十方世界皆六返震動、爾時世尊、從金棺裏、出金色臂、即問阿難、迦葉比丘、今來至不、對曰未至……、仏告四衆、吾今永取滅度、即復撿託入金棺裏。……」(大正一二・一〇一五a)。『菩薩從兜術天降神母胎說広普經』は仏の入滅の場面を描いた經典、姚秦・涼州の竺仏念訳。なお、この条は『法苑珠林』卷一二・千仏篇・

韜光部にも「菩薩処胎藏經云……」として引用される(大正五三・三七一c)。

【法山摧倒、仏魔箭於危屏、直水横流、係慈航於彼岸】 仏法東伝ののち南北朝の争乱があり、またしばしば仏教徒の排斥があったにもかかわらず、仏法が連綿と受け継がれてきたことを言う。

【法山】 仏法の偉大さを山に譬えたもの。『大般涅槃經』卷一九・梵行品「法山欲頽、法船欲没、法橋欲壞、法殿欲崩」(曇無讖訳、大正一二・四八〇a)。

【摧倒】 適例未見。

【仏魔箭於危屏】 魔箭とは、煩惱を惡魔の放つ矢に譬えたもの。『摩訶般若波羅蜜經』卷二〇・無尽品「仏告須菩提、三千大千

世界中諸惡魔、皆愁毒如箭入心、各於其坐不能自安」(大正八・三六四c・三六五a)。

【直水横流】 横流は河から水があふれ出ること。転じて天下が乱れることを言う。『孟子』滕文公上「当堯之時、天下猶未平、洪水横流、汎濫於天下、草木暢茂、禽獸繁殖、五穀不登、禽獸偪人、獸蹄鳥跡之道、交於中国」、北魏・温子昇・大覺寺碑「主上乃拋地圖、攬天鏡、乘六龍、朝万国、牢籠宇宙、襟帶江山、道濟横流、德昌頽曆」(『芸文類聚』卷七七・内典下・寺碑)。

【係慈航於彼岸】 慈航とは仏法を彼岸に渡るための舟に譬えたもの。『大般涅槃經』卷二三・光明遍照高貴德王菩薩品「修戒定慧解脱解脫知見六波羅蜜三十七品、以為船筏、依乘此筏、渡煩惱河、到於彼岸常樂涅槃」(大正一二・五〇一c)、梁・昭明太

子・開善寺法会詩「法輪明智日、慧海度慈航」(『芸文類聚』卷七六・内典上・内典)。

【妙藏不可以常秘】『大方広仏華嚴經(六十華嚴)』卷一・世間淨眼品「如來妙藏、無不遍至」(大正九・三九五a)・梁・簡文帝・与広信侯書「微妙密藏、於斯既隆、莊嚴道場、自茲弥闡」(『芸文類聚』卷七七・内典下)。

【戒輪不可以終盤】盤は悖る、乖離する。戒輪の適例は未見。

【双林】沙羅双樹の林のこと。釈尊入滅の場所。梁・元帝・荊州長沙寺阿育王像碑「然俱冥四德、脱屣双林、示表金棺、現焚檀栾」(『芸文類聚』卷七六・内典上・内典)。

【書示】書は擬音語。独孤及・仙掌銘「書如剖竹、曄若裂帛」(『文苑英華』卷七八七)。

【泥洹】泥洹は涅槃に同じ。『大般泥洹經』卷一・序品「如是我聞、一時仏在拘夷城力士生地、熙連河側堅固林双樹間、与八百億比丘前後圍繞、二月十五日、臨般泥洹」(法顯訳、大正一二・八五三a)。

【逮一千年、遙被於声教】釈尊誕生のち千年にして仏法が中国に広まったことを言う。法琳『破邪論』卷上「周書異記云、周昭王即位二十四年、甲寅歲四月八日、江河泉池、忽然泛漲、井水並皆溢出。宮殿人舍、山川大地、咸悉震動。其夜五色光氣、入貫太微、遍於西方、尽作青紅色。周昭王問太史蘇由曰、是何祥也。蘇由対曰、有大聖人、生在西方、故現此瑞。昭王曰、於天下何如。蘇由曰、即時無他、一千年外、声教被及此土」(大正

五二・四七八b)。

【声教】教えは声によって聞くものゆえ声教という。『書』禹貢「声教訖于四海(孔穎達疏。皆与聞天子威声文教、時來朝見)」、李百薬・大乗莊嚴經論序「百億須弥、俱霑声教、三千世界。尽入隄封」(大正三一・五八九c)。

【龍持貝葉】龍樹が龍宮において大乘經典を授けられたことを言うか。『龍樹菩薩傳』「大龍菩薩見其如此、惜而愍之、即接入海、於宮殿中、開七宝藏、発七宝函、以諸方等深奥經典無上妙法、授之龍樹。龍樹受読九十日、中通練甚多、其心深入、体得実利。……龍樹即得諸經一箱、深入無生三忍具足、龍還送出」(大正五〇・一八六a)。

【亟伝】『統高僧伝』卷一〇・隋西京禪定道場釈智凝伝「後赴京輦、居于弁才、引衆常講、亟伝微緒」(大正五〇・五〇五a)。

【摩竭之城】摩竭は摩竭陀(Magadha)の略。中天竺にあった十六大国の一、都は王舎城。婆沙羅(Bimbisara)王の治世に国内において釈尊が成道し、王舎城等において説法した。

【象負蓮華】蓮華は經典を象徴する。仏典が象に積まれて中国にもたらされたとする伝説。法琳『弁正論』卷六「案二教論等云、……崇崖峻壁之典、龍居象負之文。蓋盈溢於茲矣」(大正五二・五二七c)・道世『諸経要集』序「至如十二分教之大綱、八万法門之広派、龍宮西蓄、未尽懸林之知、象駕東馳、豈窮手葉之誨」(大正五四・一a)。

【遂満真丹之境】真丹は中国のこと。支那・振丹に同じ。仏法が

中国に伝来し、普く信仰されるようになったことを言う。『歴代三宝紀』巻一「而彼五天目此東国、總言脂那。或云真丹、或作震旦」(大正四九・五三b)、玄応『一切経音義』巻四「振旦或言真丹、並非正音、応言支那」。

【三十七品】 三十七道品のこと。悟りに到る修行方法を三十七種に整理したもの。四念処・四正勤・四神足・五根・五力・七覚支・八正道。『維摩詰所説経』巻上・仏国品「三十七道品、是菩薩淨土、菩薩成仏時、念処・正勤・神足・根・力・覚・道、衆生来生其国」(大正一四・五三八b)。

【慈悲於火宅】 『妙法蓮華経』巻二・譬喩品にみえる火宅の教えを言う。「大宝積経序」訳注に既出。本稿40ページの語釈参照。

III 大宝積経訳出に至る過程

〔訓読〕

大宝積経なる者は、後漢の迦葉摩騰・竺法蘭、及び今朝の玄奘法師・菩提流志等、咸な西天竺自り致す所なり。如来は昔鷲峯に在りて、平等を利建し、金口海に注ぎ、之を酌めども竭きず、宝言綸の如く、之を振うも緒あり。茲の瑞憲を炯かにせんとするも、久しく鴻都に翳さる。原壑は屢々非り、市朝は変多し。歴代佺斉の主、競いて参訳を興すも、跋陀授記の言、能く不就すること罕れなり。我が唐の天下を有つに洎るや、功は鉄圜に横ねく、化は忉利に驟なる。千界を苑禦とし、万利を提封とす。四摂の扉を張り、広く諸有を納れ、六道の驥を騁せ、群惑を冥済す。太上皇、沢は智海より深きを以て、掌に禪珠を輝かし、神皇帝、勛は梵空に格るを以て、胸に法印を懸く。肅んで玄誥を敷き、昭らかにかに鴻波を灑ぎ、縉徒を歴選し、列寮を明敷し、博く同異を考み、聿に刊緝を興し、頽綱を勇振し、絶紐を蔽持せんと

【一十二経】 十二部経。經典をその内容・形式から十二種に分けるもの。『摩訶般若波羅蜜経』巻一・序品「菩薩摩訶薩欲聞十方諸仏所説、十二部経、修多羅・祇夜・受記経・伽陀・憂陀那・因縁経・阿波陀那・如是語経・本生経・方広経・未曾有経・論議経、諸声聞等、聞与不聞、尽欲誦受持者、当学般若波羅蜜」(大正八・二二〇b)。

【引喩於沙界】 『弘明集』巻一・牟子・理惑論「自諸子識緯聖人秘要、莫不引譬取喩、子独惡仏説経牽譬喩耶」(大正五二・四b)、則天武后・大周新訳大方広仏華嚴経序「聞揚沙界、宣暢塵区」(大正一〇・一b)。

す。

【語釈】

【迦葉摩騰・竺法蘭】ともに中天竺の人。後漢明帝・永平十年、洛陽に至り四十二章経等を訳す。『高僧伝』巻一に伝あり。

【玄奘法師】玄奘三蔵。伝は『大唐故三蔵玄奘法師行状』一卷、『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』一〇巻、『続高僧伝』巻四・京大慈恩寺釈玄奘伝など（いずれも大正五〇）。

【菩提流志】『大宝積経序』訳注に既出。本稿44ページの語釈参照。

【鷲峯】鷲靈山。「大宝積経序」訳注に既出。本稿38ページの語釈参照。

【利建】うちたてること。『易』屯「元亨、利貞、勿用有攸往、利建侯」、晋・張華・祖道趙王応詔詩「崇選穆穆、利建明德、於顯穆親、時惟我王」（『芸文類聚』巻二九・人事部一三・別上）。

【金口注海】『大方広仏華嚴経（六十華嚴）』巻五・四諦品「猶如大海水、注以百川流、其味無別異、諸仏法如是」（大正九・四二八a）。宋元嘉起居注「諸仏世尊、常樂安隱、処雪山陰、雪水流注、百川洋溢、以味清淨、周迴屈曲、從趣大海、一切衆生、咸得受用」（『芸文類聚』巻七六・内典上・内典）。

【酌之而不竭】『淮南子』本経訓「取焉而不損、酌焉而不竭、莫知其所由出、是謂瑤光」、『文選』巻五九・王巾・頭陀寺碑文「於是女閑幽鍵、感而遂通、遙源濬波、酌而不竭（張銑注。玄・幽、

謂道之深邃也、閑・鍵、皆所以閉拒於門者、言如來說喻、微妙道門、遂通如長源深水、酌取不竭也）」。

【宝言如綸】『礼記』緇衣「子曰、王言如綸、其出如綸、王言如綸、其出如綸（孔穎達疏。王言初出、微細如絲、及其出行於外、言更漸大、如似綸也）」。絲は糸、綸は太糸、綽は大綱。

【振之而有緒】緒は筋道・系統。『出三蔵記集』巻一四・仏大跋陀伝「聞鳩摩羅什在長安、即往從之、什大欣悅、共論法相、振發玄緒、多有妙旨」（大正五五・一〇三c）、『続高僧伝』巻四・京大慈恩寺釈玄奘伝「若非天挺英靈、生知聖授、何能振斯鴻緒、導達遺蹤」（大正五〇・四五八c）。

【瑞憲】瑞は兆し、しるし。憲は法。

【久翳鴻都】後漢初期に仏典が中国に伝えられたのちも、後漢末までその漢語への訳出が為されなかったことを言う。

【鴻都】後漢時代の蔵書閣の名。『後漢書』列伝六九上・儒林伝序「及董卓移都之際、吏民擾乱、自辟雍・東觀・蘭台・石室・宣明・鴻都諸蔵典策文章、競共剖散、其縑帛圖書、大則連為帷蓋、小乃制為膝褱」。

【原壑屢非】原は山稜、壑は溪谷。山川の地形が一変するほど世の移ろいが甚だしいことを言う。参考、『広弘明集』巻二三・謝靈運・廬山慧遠法師誄「嗚呼法師、何時復還。風嘯竹柏、雲飄

巖峰。川壑如丘、山林改容。自昔聞風。志願歸依」(大正五二・二六七b)。

【市朝多変】 市場の商人と朝廷の大臣とが、互いに入れ替わるほど、人の世の移り変わりが激しいことを言う。『文選』卷三〇・謝朓・和伏武昌登孫權故城「參差世紀忽、寂漠市朝変」(李善注。古出夏北門行曰、市朝易人、千載墓平)。

【佝僂之主】 佝僂は聰明・機敏なことを言う。『史記』卷一・五帝本紀「黃帝者……生而神靈、弱而能言、幼而佝僂(集解。駟案、佝、疾。齊、速也。言聖德幼而疾速也)」、弘明集『卷一〇・大梁皇帝勅答臣下神滅論』(公論郎王靖答。……自非克明佝僂之君、就日望雲之主、豈有剖判冥寂、明章雅論、闡大聖於須臾、定俗疑於俄頃」(大正五二・六六a)。

【競興】 『法顯傳』卷一「齋日常有光明、諸國王競興供養」(大正五一・八五八a)。

【參訳】 参は集まる、入り交じる。参訳は多人数で翻訳すること。『大唐内典録』卷一〇「後秦沙門釈僧叡、二秦録一卷。右依檢。後秦姚興弘始年、長安沙門也、即前道安之弟子、神用通朗思力標舉。参訳什門多有撰續」(大正五五・三三六c)。

【跋陀授記之言】 未詳。

【罕能丕就】 これ以前には『大宝積經』の訳出が完全には為されなかったことを言う。参考、『隋書』卷七五・儒林伝・蕭該「開皇初、賜爵山陰縣公、拜国子博士。奉詔書与妥正定經史、然各執所見、遞相是非、久而不能就、上譴而罷之」。

【罕能】 『後漢書』列伝四〇下・班固伝「今論者但知誦虞夏之書、詠殷周之詩、講義文之易、論孔氏之春秋、罕能精古今之清濁、究漢德之所由」。

【丕就】 丕は大いに。就は成就の意。参考、魏故使持節衛大將軍儀同三司冀州刺史博野縣開国公荀君之墓誌銘「及日角有暉、龍顏在曆、丕業既就、大賞斯行」(『漢魏南北朝墓誌彙編』天津古籍出版社、一九九二年、二五七頁)。

【功横】 『梁書』卷二一・張充伝「丈人歲路未強、學優而仕、道佐蒼生、功横海皇」。

【鉄田】 鉄田は鉄田山。須弥山を中心とした世界を取り巻く山。

【化縣】 教化が連綿と及ぶこと。『宋書』卷八・明帝紀「泰始元年冬十二月丙寅、上即皇帝位。詔曰、高祖武皇帝德洞四瀛、化綿九服。太祖文皇帝以大明定基、世祖孝武皇帝以下武寧乱。綿と縣は音通。

【忉利】 忉利は忉利天。須弥山の頂上にあり帝釈天をはじめとする三十三天が住する。慧苑『新訳大方広華嚴經音義』卷上「忉利梵音、正云、怛唎耶怛唎奢。言怛唎耶者、此云三也、怛唎奢者、卅也。謂須弥山頂、四方各有八大城、当中有一大城、帝釈所居、總數有三十三处、故從处立名也」(大正五四・四四〇c)。

【苑饗】 饗は饗に通じるか? 「苑饗」の用例は『金史』卷三・太宗本紀「在位十三年、宮室苑饗、無所増益。饗は禁苑。

【千界】 我々が住む須弥山を中心とする世界が、一小世界であ

り、これが千集まったものが小千世界。小千世界が千集まり中千世界、中千世界が千集まり大千世界となる。ここでは漠然と全世界を指して言う。

【提封】『漢書』卷二八・地理志下「凡郡国一百三、県邑千三百一十四、道三十二、侯国二百四十一。地東西九千三百二里、南北万三千三百六十八里。提封田一万万四千五百一十三万六千四百五頃（顔師古注。提封者、大挙其封疆也）」とあり、『広雅』釈訓「提封、都凡也」とある。転じて版図・疆域を意味する。

『隋書』卷五九・越王楊侗伝（煬帝）下書曰、我大隋之有天下、於茲三十八載。……日月之所臨、風雨之所至、円首方足、稟氣食芼、莫不尽入提封、皆為臣妾」。

【万利】利は国土のこと。万利は全世界をいう。

【張四摂之扉】四摂は四摂事・四摂法の略。衆生を仏道に入れるための四つの方途。布施摂・愛語摂・利行摂・同事摂。『摩訶般若波羅蜜経』卷一三・聞持品「是諸菩薩行菩薩道時、以四事摂無量百千衆生、所謂布施・愛語・利益・同事」（大正八・三一五c）。

【広納】広く受け入れること。『後漢書』列伝一五・魯丕伝「丕因上疏曰……、陛下既広納讐謬、以開四聰、無令芻蕘、以言得罪」。

【諸有】あらゆるものみな。

【騁六道之驥】六道は、地獄道・畜生道・餓鬼道・人道・天道・阿修羅道のこと。しかし、僧肇『肇論』涅槃無名論には「騁六

通之神驥、乘五衍之安車」（大正四五・一五八a）と言い、また語義の上からも六通の方が適切である。六通は六神通の略。仏の定慧力によって發揮される六種の不可思議な働き。神足通・天眼通・天耳通・他心通・宿命通・漏尽通。

【群惑】多くの惑える衆生のこと。『弘明集』卷九・大梁皇帝立神明成仏義記「故経言、若与煩惱諸結俱者、名為無明、若与一切善法俱者、名之為明、豈非心識性一隨緣異乎（注。臣續曰、若善惡互起豈謂俱乎、而恒对其言而常迷其旨、故举此要文以曉群惑也）」（大正五二・五四c）。

【太上皇】睿宗のこと。

【沢深】沢は恩沢のこと。梁・任昉・為王金紫謝齊武帝示皇太子律序啓「伏惟陛下、施博天地、沢深禹湯、温舒之策、優游虚授、衛展之議、寧失弗経」（『芸文類聚』卷五四・刑法部・刑法）。

【智海】仏の智慧の広さ深さを海に譬えたもの。『大方広仏華嚴経（六十華嚴）』卷三・盧舍那仏品「仏子智海無辺底、普観諸法寂滅相」（大正九・四〇七c）、『鳩摩羅什法師大義』卷中「故経称如来有諸通慧、通慧則是一切智海」（大正四五・二一九c）。

【神皇帝】則天武后のこと。『新唐書』卷四・則天皇后本紀「（天授元年九月）壬午、改国号周。……乙酉、加尊号曰聖神皇帝」、同「（長寿二年九月）乙未、加号金輪聖神皇帝」、同「（延載元年）五月甲午、加号越古金輪聖神皇帝」、同「天冊万歳元年正月辛巳、加号慈氏越古金輪聖神皇帝、改元証聖」。

【勛格】勛は勳に同じ、勲功。格は至る。『晋書』卷六五・王導

伝「導上疏遜位、詔曰、公体道明哲、弘猷清遠、勳格四海、翼亮三世」。

【梵空】梵天の居る虚空中のことか。『大方広仏華嚴經（六十華嚴）』卷四七・入法界品「作是念時、十方梵天在虚空中、作如是言。善男子、莫作是念、莫作是念。此是大聖、具足金剛智慧光明」（大正九・七〇〇c）、『長阿含經』卷四・遊行經「仏滅度已、時梵天王於虚空中以偈頌曰……」（大正一・二六c）。

【胸懸法印】法印は妙法の印し、仏の教えのしるし。『大智度論』卷二二「通達無礙者、得仏法印故通達無礙、如得王印則無所留離」（大正二五・二二二a）、『法苑珠林』卷一〇「又以黄金印用授十方諸仏。諸仏受已。即印我胸三処。由獲法印、故証得三空智、解了諸仏法」（大正五三・三五五a）。

【肅敷】おごそかに宣べ広める。『旧唐書』卷三一・音楽志四「則天皇后享清廟樂章十首。……、第三登歌。肅敷大礼、上謁尊靈。敬陳筐幣、載表丹誠」。

【玄誥】誥は天子の詔勅。玄は奥深い、玄遠なの意か。用例未見。

【昭灑】灑は洒と音通。洗う、すすぐの意。『文選』卷三〇・謝朓・始出尚書省五言「中区咸已泰、輕生諒昭洒」（李善注。説文曰、洒、滌也）。

【歴選】普く選ぶ。『文選』卷四八・司馬相如・封禪文「伊上古之初肇、自吳穹兮生民、歴選列辟、以迄於秦」、顏真卿・天下放

生池碑銘序「歴選内禪、生人以来、振古及隋、未有我皇帝者也」（『顏魯公集』卷四）。

【緇徒】緇衣を着たもの、僧侶。『統高僧伝』卷二二・唐京師弘福寺釈慧璉伝「及年七歳、心慕緇徒。道見沙門尋而忘返。親欣其信仰也。遂放依染法師而出家焉」（大正五〇・六一五a）。

【明敷】敷は揚に同じ。『説文解字』「揚、敷。古文揚从支」。『書』堯典「明明揚側陋」（孔安国伝。明、明人在側陋者、広求賢也）、『文選』卷五〇・沈約・恩倖伝論「明敷幽仄、唯才是与」。

【列寮】寮は官に同じ。『爾雅』「寮、寮、官也」。参考、『晋書』卷四三・王戎伝「尋拜司徒、雖位總鼎司、而委事僚寮」。

【博考】孔安国・尚書序「承詔為五十九篇作伝、於是遂研精覃思、博考經籍、採摭群言、以立訓伝、約文申義、敷暢厥旨、庶幾有補於将来」。

【聿興】聿は遂に。『文選』卷五三・陸機・弁亡論「大皇既歿、幼主泣朝、姦回肆虐、景皇聿興、虔修遺憲、政無大闕」（李善注。毛萇詩伝曰、聿、遂也）。

【刊緝】緝は集める、輯に同じ。『晋書』卷五一・摯虞・束皙伝賛「摯虞博聞、広微絶群、財成礼度、刊緝遺文」。

【勇振頽綱、嚴持絶紐】『文選』卷五九・王巾・頭陀寺碑文「於是馬鳴幽讚、龍樹虚求、並振頽綱、俱維絶紐」。

IV 大宝積經訳出に参加した僧侶たち

〔訓読〕

爰に沙門大德思忠・東天竺国婆羅門大首領臣伊舍羅等の梵文を訳せる者あり、善住縁を求め、無生忍を悟り、博聞強識にして、精らかに之を訳す。復た天竺沙門波若屈多・沙門達摩、梵義を証す者あり、忍辱場を開き、煩惱衆を破り、神侶を弼諧し、明らかに之を弁ず。復た沙門大德履方・宗一・普敬・慧覺等の筆授せる者あり、令問孔^{はな}だ^{かた}膠^ねく、威儀^{ゐぎ}忒^たわず、手ずから仙扎を握り、受けて之を字^しす。復た沙門大德深亮・勝莊・塵外・無着・慧迪の義を証す者あり、国の大師にして、仏の右臂、諸の了義を探りて、演^あべて之を証す。復た大德沙門承礼・雲觀・神暎・道本の文を次^つず者あり、多林に庇影し、香窟に息肩し、勤修精進し、纂^あめて之を次^つず。

〔語釈〕

【沙門大德思忠】菩提流志の『大宝積經』訳出に参加した僧の名は、『開元釈教錄』卷九・菩提流志伝には「沙門思忠、及東印度大首領伊舍羅直中書度頗具等、訳梵文。北印度沙門達摩・南印度沙門波若丘多等、証梵義。沙門慧覺・宗一・普敬・履方等、筆受。沙門勝莊・法蔵・塵外・無着・深亮・懷迪等、証義。沙門承礼・神暎・雲觀等、次文」(大正五五・五七〇c)と、『宋高僧伝』卷三・菩提流志伝には「此訳場中、沙門思忠・天竺大首領伊舍羅等訳梵文。天竺沙門波若屈多・沙門達摩、証梵義。沙門履方・宗一・慧覺、筆受。沙門深亮・勝莊・塵外・無着・懷迪、証義。沙門承礼・雲觀・神暎・道本、次文」(大正五〇・

七二〇b)とある。以下の語釈では、これ以外の史料に現れた者についてのみ指摘するに止める。なお、『宋高僧伝』の菩提流志伝は、「大宝積經序」訳注において述べたように、この「大宝積經述」と「大宝積經序」に基づく。

【東天竺国婆羅門大首領臣伊舍羅】『宋高僧伝』卷一・金剛智伝「(開元)十一年、奉勅於資聖寺、翻出瑜伽念誦法二卷・七俱胝陀羅尼二卷、東印度婆羅門大首領直中書伊舍羅訳語、……」(大正五〇・七一〇a)、同卷一・義浄伝「睿宗唐隆元年庚戌、於大薦福寺、出槽像功德經・毗奈耶雜事二衆戒經・唯識宝生・所縁釈等二十部、……居士東印度首領伊舍羅、証梵本」(大正五〇・

七一〇c)。

【訳梵文】 經典の文章を梵語から漢語へと翻訳・口述する。

【求善住縁】 善住は、よく安定したの意。『大智度論』卷四九「出家者、愛仏情重常以法施。若仏在世若不在世、善住持戒不求名利」(大正二五・四一二b)。

【悟無生忍】 無生忍は無生無滅の理に安住して動じないこと。

『大智度論』卷五〇「無生法忍者、於無生滅諸法実相中、信受通達、無礙不退、是名無生忍」(大正二五・四一七c)。

【博聞強識】 『礼記』曲礼上「博聞強識而讓、敦善行而不怠、謂之君子」

【精而訳之】 精は詳細かつ正確なこと。『出三藏記集』卷一三・竺叔蘭伝「以晋元康元年、訳出放光經及異維摩詰十余万言。既学兼胡漢、故訳義精允」(大正五五・九八c)、『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷八「敕曰、大慈恩寺僧玄奘、所翻經論、既新翻訳、文義須精」(大正五〇・二六六b)。参考、『法言』寡見「呱呱之子、各識其親。誦誦之学、各習其師。精而精之、是在其中矣」。

【天竺沙門波若屈多】 既出。

【沙門達摩】 既出。

【証梵義者】 梵文の語義を考証する。

【開忍辱場】 『維摩詰所説經』卷上・菩薩品「我問道場者何所是。答曰……、忍辱是道場、於諸衆生心無礙故」(大正一四・五四二c)。

【破煩惱衆】 『大方広仏華嚴經』(六十華嚴) 卷一六・金剛幢菩薩

十迴向品「令一切衆生如阿伽陀藥、悉除一切煩惱衆毒」(大正九・五〇〇c)、『注維摩詰經』卷一「譬曰、比丘秦言或名淨乞食、或名破煩惱、或名淨持戒、或名能怖魔」(大正三八・三二八b)。

【弼諧】 助けて程良くする。『書』皋陶謨「允迪厥德、謨明弼諧(孔安国伝。人君当信踏行古人之徳、謀広聡明、以輔諧其政)、『文選』卷二五・盧諶・贈劉琨「弼諧靡成、良謀莫陳(張銑注。弼、輔。諧、和也)」。

【神侶】 神明な僧侶のことか。ここでは菩提流志を指すと思われる。降魔変押座文「於是魔王既観下界……、為(唯) 見我南閻浮提淨飯大王悉達太子成登正覺之時。魔王口中思維道『若是交他化度衆生、我等門徒、於投仏裏。不如先集徒衆、点檢魔宮、惱乱瞿曇、不交出世』。魔王当時道何言語『魔王忿怒在遼巡、広点妖邪之鬼神。睹見如来今出世、雄心耐耐使生嗔。不了自家邪神呂(侶)、擎山覆海滅今(金)人……』」(潘重規『敦煌変文集新書』卷三、五九二頁。中国文化大学中文研究所、一九八三年)。

【履方】 既出。

【宗一】 既出。

【普敬】 『宋高僧伝』卷三・菩提流志伝には見えず。

【慧覺】 既出。

【筆授】 漢語に翻訳・口述された經文を筆写する。

【令問】 『漢書』卷八一・匡衡伝「令問休養、不専在將軍者何也

（顔師古注。令、善也。問、名）。なお、「校異」で触れたように令聞に作るテキストもある。令聞の用例は、『書』微子之命「爾惟踐修其猷、旧有令聞（孔安国伝。汝微子、言能踐湯徳、久有善誉、昭聞遠近）」。

【孔膠】 孔は甚だ。膠は堅固。『詩』小雅・隰桑「既見君子、德音孔膠（毛伝。膠、固也。鄭箋。君子在位、民附仰之、其教令之行、甚堅固也）」。

【威儀不忒】 忒は違ふ、疑う。『詩』曹風・鵲鳩「淑人君子、其儀不忒（毛伝、忒、疑也）」、『三国志』卷一五・司馬朗伝・裴松之注「司馬彪序伝曰、……父防、字建公、性質直公方、雖閒居宴処、威儀不忒」。

【手握】 法琳『弁正論』卷四・十代奉仏篇下「魏司徒祖瑩字元珍、……口含碧雞之弁、手握彫龍之文」（大正五二・五一五b）。

【仙札】 札は札に通じる。札は木簡のことで、筆写に用いる紙の雅称。『旧唐書』卷七四・劉泊伝「（太宗）時皇太子初立、泊以為宜尊賢重道、上書曰……綜宝思於天文、則長河輶映。摘玉字於仙札、則流霞成彩」。

【受而字之】 字は文字に書き記す。

【深亮】 既出。

【勝莊】 『宋高僧伝』卷四・慧沼伝「及菩提流志於崇福寺訳大宝積經、沼預其選、充証義、新羅勝莊法師執筆、沙門大願・塵外皆一時英秀、当代象龍」（大正五〇・七二八c）。なお、慧沼は

この「大宝積經述」および『開元釈教録』卷九・菩提流志伝、『宋高僧伝』卷三・菩提流志伝には見えない。後掲【慧迪】条を参照。

【塵外】 既出。

【無着】 既出。

【慧迪】 『開元釈教録』卷九・菩提流志伝、『宋高僧伝』卷三・菩提流域伝いずれも「懷迪」に作る。『開元釈教録』卷九・懷迪伝「循州人也。住本州羅浮山南樓寺。……往者三藏菩提流志訳宝積經、遠召迪來以充証義。所為事畢還帰故郷。……迪筆受經旨兼緝綴文理、其梵僧伝經事畢莫知所之」（大正五五・五七一c）、『宋高僧伝』卷三・懷迪伝「釈懷迪、循州人也、先入法于南樓寺、……教有梵僧寓止于此、迪学其書語、自茲通利、菩提流志初訳宝積、召迪至京証義、事畢南帰」（大正五〇・七二〇c）。一方で、『宋高僧伝』卷四・慧沼伝（勝莊）条前掲）に見える慧沼が、この「大宝積經述」には見えないことから、もと「慧沼・懷迪」とあったのが、「沼・懷」が誤脱し「慧迪」となり、のち「開元釈教録」菩提流志伝、『宋高僧伝』菩提流志伝の段階で「慧迪」を「懷迪」に訂正したとも考えられる。

【証義】 漢訳された經典の語義が正確であるか考証する。

【国之大師】 『高僧伝』卷九・仏図澄伝「（石）虎傾心事澄、有重於勒。迺下書曰、和上国之大宝。榮爵不加、高祿不受、榮祿匪及、何以旌徳」（大正五〇・三八四c）、『不空三藏行狀』「昔者婆伽梵毘盧遮那、以金剛頂瑜伽秘密教王真言法印、付属金剛手

菩薩。垂近千載、伝龍猛菩薩。……金剛智伝今之大師」(大正五〇・二九二b)。

【仏之右臂】 右臂は片腕の如く重要なもの。『後漢書』列伝四八・虞詡伝「賊不知開倉招衆、劫庫兵、守城皋、断天下右臂、此不足憂也(李賢注。右臂、喻要便也)」。

【探諸了義】 了義は明瞭なる義理、完全な教説。『大般涅槃經』(曇無讖訳) 卷六・如来性品「了義者、名為菩薩。真実智慧、隨於自心、無礙大智、猶如大人、無所不知。是名了義」(大正一二・四〇二a)、『広弘明集』 卷一九・蕭子顯・御講金字摩訶般若波羅蜜經序「而僧家之学、師習相守、唯信口説、專仗耳功、鮮能尋究經文、依求了義」(大正五二・二三七b)。

【演而証之】 演は述べる、おしひろめる。『後漢書』列伝六〇・孔融伝「融聞人之善、若出諸己、言有可採、必演而成之」、抱朴子「内篇・弁問「故孟子謂伯夷、清之聖者也。柳下惠、和之聖者也。伊尹、任之聖者也。吾試演而論之、則聖非一事」

【承礼】 既出。

【雲觀】 既出。

【神唌】 既出。

【道本】 『開元釈教録』 卷九・菩提流志伝には見えず。

【次文】 漢訳された經文の文章を整える。

【庇影】 庇う、助け護る、日陰で憩う。庇蔭に同じ。隋・江總・修心賦「持戒振錫、庇影甘蔬」(『文苑英華』 卷九七)、『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』 卷九「栖身片石之上、庇影一樹之陰、守察

心猿、觀法実相」(大正五〇・二七四a)。

【多林】 逝多林・誓多林の略。舍衛国の逝多太子が所有した林。須達長者がこれを買取り、精舎を建てて釈尊に寄進したのが祇園精舎である。『大唐西域記』 卷六・室羅伐悉底国「城南五六里有逝多林(唐言勝林、旧曰祇陀、訛也)。是給孤独園。勝軍王大臣善施為仏建精舎。昔為伽藍、今已荒廢」(大正五一・八九九b)。

【息肩】 荷物を降ろして肩を休める、憩う。『春秋左伝』襄公二年「鄭子駟、請息肩于齊」、『宋高僧伝』 卷六・唐京師大安国寺端甫伝「日持諸部十余万遍、指浄土為息肩之地、敝金経為報法之恩、前後供施數十百万」(大正五〇・七四一c)。

【香窟】 仏寺を指すか。適例未見。参考、『釈迦譜』 卷三・釈迦祇洹精舎縁記「時須達悲心憐傷、経地已竟、起立精舎、為仏作窟、以妙栴檀、用為香泥」(大正五〇・六六a)、『法苑珠林』 卷三〇・住持篇・菩薩部「亦是菩薩、昔所住处。中有一猪修声聞慈、復有一窟、名香功德」(大正五三・五一一b)。

【勤修精進】 『妙法蓮華經』 卷二・譬喻品「汝等但当勤修精進、如来以是方便誘進衆生」(大正九・一三b)、『大方広仏華厳經』(六十華厳) 卷三六・宝王(如来性起品「仏子。菩薩摩訶薩、有十種勤修精進。何等為十。所謂教化一切衆生勤修精進。入一切法勤修精進。令一切世界清浄勤修精進。究竟一切菩薩所學勤修精進。令一切衆生滅一切惡勤修精進。除滅一切地獄餓鬼畜生閻羅王苦勤修精進。降一切魔勤修精進。為一切衆生作清浄眼勤修精進。

恭敬供養一切諸仏勤修精進。令一切如来皆悉歡喜勤修精進。仏

子。是為菩薩摩訶薩十種勤修精進」(大正九・六三三a)。

V 訳出に参加した官僚たち

〔訓読〕

復た潤文官あり、銀青光祿大夫・邵王傳・上柱国・固安県開国伯・盧粲、銀青光祿大夫・太子詹事・崇文館學士・兼修国史・上柱国・東海県開国公・徐堅、朝議大夫・守中書舍人・崇文館學士・上柱国・野王県開国男・蘇晋、朝議郎・給事中・内供奉・崔璩らは、位は鳳墀に列し、声は鶏園に流れ、二諦を分別し、潤して之を色る。復た銀青光祿大夫・守侍中・兼太子左庶子・兼修国史・上柱国・鉅鹿県開国公・魏知古、兵部尚書・上柱国・郭元振、銀青光祿大夫・檢校中書令・上柱国・范陽県開国男・張説、銀青光祿大夫・行中書侍郎・同中書門下三品・監修国史・上柱国・興平県開国侯・陸象先等あり、朝に瑣闥を踐み、夕に珠域に遊び、四法を護持し、摠べて之を閱す。爾れ乃ち杖錫の士、端珪の俊、定筵に麻列し、樂土に林攢す。祥雲に蔭われ演説し、倏ち炎涼を換え、甘露を吸いて勤求し、載法は衡畧たり。大乘の章句、義は唐捐せず、小品の精微、拯いて遺溺無し。能事畢る、仏何をか言わん哉。

〔語釈〕

【復有潤文官者……】『大宝積經』 訳出に参加した官僚の名は、五・五七〇c)、『宋高僧傳』卷三・菩提流志伝「次有潤文官、
『開元釈教錄』卷九・菩提流志伝「太子詹事東海郡公徐堅・邵
王傳固安伯盧粲・尚書右丞東海男盧藏用・中書舍人野王男蘇瑒・
禮部郎中彭景直・左補闕祁果男王璿・太府丞顏溫之・太常博士
賀知章等、潤色。中書侍郎平輿侯陸象先・侍中鉅鹿公魏知古等、
監訳。前太常卿薛崇胤・通事舍人弘農男楊仲嗣、監護」(大正五
る。【潤文】 翻訳された經文を漢語としてより美しい文体に潤色す

【銀青光祿大夫】 従三品の文散官。

【弼王傳】 弼王府の傳。従三品の職事官。王傳は王の訓導にあたる。『大唐六典』卷二九「傳一人、従三品。……王傳掌傳相訓導、而匡其過失」。弼王は李守礼（章懷太子の子）、『旧唐書』卷八六・高宗中宗諸子伝「神龍中、遺詔進封弼王、賜実封五百戸、……（開元）二十九年薨、年七十余」。

【上柱国】 正二品の勳官。勳官は本来は軍功を賞するための官であるが、この頃には乱発により価値が低下しており、一介の兵士にさえ上柱国が授けられる場合があった。

【固安县開国伯】 開国伯は正四品上の爵号。固安县は幽州にあり、現在の河北省固安县。

【盧祭】 『旧唐書』卷一八九下・儒学伝下、『新唐書』卷一九九・儒学伝中に伝あり。

【太子詹事】 正三品の職事官。東宮府を統括する。『大唐六典』卷二六「太子詹事之職、統東宮三寺・十率府之政令、举其綱紀、而修其職務」。

【崇文館学士】 崇文館は東宮府に置かれた蔵書閣。『大唐六典』卷二六「崇文館。学士、……貞観中、崇文館有学士・直学士員、不常置、掌教授学生等業」。

【兼修国史】 監修国史とともに国史編纂を掌る職。

【東海県開国公】 開国県公は従二品の爵号。東海県は海州にあり、現在の江蘇省連雲港市。

【徐堅】 『旧唐書』卷一〇二、『新唐書』卷一九九・儒学伝中に伝

あり。

【朝議大夫】 正五品下の文散官。

【守中書舍人】 正五品上の職事官。詔勅の起草を掌る。『大唐六典』卷九「中書舍人、六人、正五品上。……中書舍人掌侍奉進奏、參議表章。凡詔旨・制勅及璽書・冊命、皆按典故起草進画、既下、則署而行之」。職事官の官品が文散官のそれより上なため「守」が冠される。『通典』卷一九・職官一「凡正官、皆称行・守、其階（＝散官）高而官（＝職事官）卑者称行、階卑而官高者称守、階官同者、並無行・守字」。

【野王県開国男】 開国男は従五品上の爵号。また、野王県は懷州河内県の旧名。『元和郡県図志』卷一六「河内県……、本春秋時、野王邑……、漢以為県、属河内郡、隋開皇十三年、改為河内県、皇朝因之」。舒王県に作るテキストもあるが、舒王という地名は存在しない。

【蘇晋】 『旧唐書』卷一〇〇、『新唐書』卷一二八に伝あり。

【朝議郎】 正六品上の文散官。

【給事中】 門下給事中のこと。正五品上の職事官。詔勅の発布に先立つてその審査に当たつた。『大唐六典』卷八「給事中四人、正五品上。……給事中掌侍奉左右、分判省事」。

【内供奉】 宮中への出入りを許された際に与えられる肩書き。

【崔璩】 『旧唐書』卷九一、『新唐書』卷一二〇に伝あり。

【位列】 『後漢書』列伝五六・陳蕃伝「臣位列台司、憂責深重」、『旧唐書』卷一六一・劉悟伝「伏以名居国舅、位列朝班、而真

偽不分、中外所恥」。

【鳳墀】 墀は宮殿の前にある階段もしくは階段を上ったところにある平地のこと。転じて朝廷を意味する。『宋書』卷八〇・始平孝敬王子鸞伝「思玉歩於鳳墀、想金声於鸞闕」

【声流】 名声が流布する。『列士伝』「名声流布、天下婦焉」(『芸文類聚』卷九一・鳥部中・鶴)、『弘明集』卷一一・僧巖法師辭青州刺史劉善明拳其秀才書「答僧巖道人。……白首方充鄉舉、終能致位元台。朝天變地、道暢當年、声流万載、君意何如」(大正五・七五c)。

【鶏園】 鶏園・鶏頭末寺に同じ。摩竭陀国にある阿育王が建立した寺院。鶏園の用例は未見。『大唐西域記』卷八・摩竭陀国「故城東南、有屈託阿濫摩(唐言鶏園)僧伽藍、無憂王之所建焉」(大正五一・九一・二b)、『阿育王伝』卷七「沙弥即時共王到鶏頭末寺、王見沙弥朝所食之食」(大正五〇・一二九c)。

【分別二諦】 二諦は真諦と俗諦。真諦は聖人の見る真理、俗諦は俗人・凡夫のしるところの真理。『大智度論』卷「仏法中有二諦。一者世諦、二者第一義諦。為世諦故、説有衆生。為第一義諦故、説衆生無所有」(大正二五・三三六c)、『中論』卷四・觀四諦品「諸仏依二諦、為衆生説法、一以世俗諦、二第一義諦、若人不能知、分別於二諦、則於深仏法、不知真實義」(大正三〇・三二c)。

【守侍中】 侍中は門下侍中、すなわち門下省の長官。正三品の職事官。中書令(中書省の長官)とともに宰相の任に当たった。

『新唐書』卷四六・百官志一「宰相之職、佐天子總百官、治万事、其任重矣、……初、唐因隋制、以三省之長中書令・侍中・尚書令共議国政、此宰相職也。『大唐六典』卷八「侍中二人、正三品。……侍中之職、掌出納帝命、緝熙皇極、總典吏職、贊相礼儀、以和万邦、以弼庶務、所謂佐天子而統大政者也」。

【兼太子左庶子】 東宮三寺のうち太子左春坊に所屬する職事官、正四品上。太子左春坊は朝廷の門下省に、左庶子は門下侍中に相當する。

【鉅鹿県開国公】 鉅鹿県は現在の河北省鉅鹿県。

【魏知古】 『旧唐書』卷九八、『新唐書』卷一二六に伝あり。

【兵部尚書】 尚書六部のうち兵部の長官。正三品の職事官。『大唐六典』卷五「兵部尚書・侍郎之職、掌天下軍衛武官選授之政令。凡軍師卒戍之籍、山川要害之図、廐牧甲杖之數、悉以咨之」。

【郭元振】 『旧唐書』卷九七、『新唐書』卷一二二に伝あり。

【檢校中書令】 中書令は中書省の長官、また門下侍中とともに宰相の任に当たる。正三品の職事官。檢校とは、兼官の形態の一種。『通典』卷一九・職官一「檢校・試・撰・判・知之官。……檢校者、云檢校某官。……皆是詔除、而非正命」。

【范陽県開国男】 范陽県は現在の河北省涿県。

【張説】 『旧唐書』卷九七、『新唐書』卷一二二に伝あり。

【行中書侍郎】 中書侍郎は中書省の次官。正四品上の職事官。『大唐六典』卷九「中書侍郎、二人、正四品上。……中書侍郎掌貳

令之職、凡邦国之庶務、朝廷之大政、皆參議焉。「行」は職事官の官品が散官の官品より下であることを示す。【守中書舍人】条参照。

【同中書門下三品】本来の宰相である中書令・門下侍中以外の官にあるものが、宰相としての職務を命じられた際の肩書き。中書省と門下省の三品官（中書令・門下侍中）と同等であるという意味。このほか、同中書門下平章事、同平章事ともいう。

『新唐書』卷四六・百官志一・宰相の条を参照。

【興平県開国侯】開国県侯は従三品の爵。興平県は現在の陝西省興平県。

【陸象先】『旧唐書』卷八八、『新唐書』卷一一六。

【瑣闥】宮門、また宮中のこと。闥は宮殿の門。瑣は鎖、宮殿の門には鎖の模様を刻んだ。王維・酬郭給事「禁裏疏鐘官舍晚、省中啼鳥吏人稀。晨搖玉珮趨金殿、夕奉天書拜瑣闥」（『王右丞集』卷一〇）。

【珠域】ここでは寺院のことかと思われるが、適例未見。

【護持】『大般涅槃經（曇無讖訳）』卷三〇・師子吼菩薩品「為四法故、令諸弟子護持佛法。何等名四、常樂我淨」（大正一二・五四四c）。

【四法】①教法・理法・行法・果法。②菩薩修行の四方途、不捨菩提心・不捨善知識・不捨堪忍愛樂・不捨阿練若。③四法印の略、諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜・一切皆苦。④常・樂・我・淨、など様々な語義があるが、前掲【護持】条の『涅槃經』を

典拠とするなら④であろう。

【摠而闡之】『大宝積經』訳出の監修に当たったことを言う。

【杖錫之士】杖錫は僧侶が錫杖をつえつくこと。これらの人物は俗人ではあるが仏道に帰依していることを言うか。『出三藏記集』卷一三・安世高伝「世高遊化中国宣經事畢、值靈帝之末閔洛擾亂、乃杖錫江南云」（大正五五・九五b）、白居易・遊坊口懸泉偶題石上「談笑逐身來、管絃隨事有、時逢杖錫客、或值垂綸叟」（『白氏長慶集』卷二二）。

【端珪之後】端珪の用例みえず。諸本いずれも端珪に作るが、端珪の訛ではないか。瑞珪は天子から諸侯に賜る玉製の割り符。

『後漢書』列伝五〇下・蔡邕伝「或画一策而箱万金、或談崇朝而錫瑞珪」、「白虎通」崩薨「諸侯薨、使臣賜瑞珪于天子、何。諸侯以瑞珪為信、今死矣、嗣子諒闇三年之後、当乃更爵命、故歸之」。

【麻列】麻の如く並ぶ、列する者の多いことの譬え。韓愈・進撰平淮西碑文表「今詞學之英、所在麻列、儒宗文師、磊落相望」（『韓昌黎文集』卷八）。

【定筵】筵は座席、宮中の席。適例未見。参考、『文選』卷五七・潘岳・哀永逝文「徹房帷兮席庭筵、拳酌觴兮告永遷」、唐・張籍・寒食內宴「宮筵戲樂年年別、已得三迴對御看」（『張司業集』卷五）。

【林攢】攢は集まる、群がる。晋・張協・安石榴賦「繁莖篠密、豐幹林攢」（『芸文類聚』卷八六・菓部上・石榴）。

【染土】極染淨土。道宣・『妙法蓮華經』序「庶得早淨六根、仰慈尊之嘉会、速成四德、趣染土之玄猷」(大正九・一c)。

【蔭祥雲】『鳩摩羅什法師大義』卷中「故經稱、如來有諸通慧、通慧則是一切智海、此乃万流之宗会、法身祥雲之所出、運化之功、功由於茲」(大正四五・一三〇a)、『集古今仏道論衡』卷丙・文帝幸弘福寺立願重施敘仏道先後事「遊玩法楽、逍遙淨土、永蔭法雲、常喰甘露」(大正五二・三八六a)。

【演訳】仏法を述べ広め、經典を翻訳すること。『弘明集』卷八・東莞劉記室勰・滅惑論「三破論云……、妙化無外、豈以華戎阻情、是以一音演法殊訳、共解一乘、敷教異経、同帰經典」(大正五二・五一b)。

【倏換炎涼】季節がたちまち移り変わる事。謝靈運・帰途賦「踐寒暑以推換、眷桑梓以緬邈」(『芸文類聚』卷二七・人部一・行旅)、『旧唐書』卷五二・后妃伝下・代宗貞懿皇后獨孤氏「十三年十月方葬、命宰臣常袞為哀冊曰……、人代宛兮如旧、炎涼倏兮已改」。

【吸甘露】仏法の功德を甘露に譬える。『諸経要集』卷二〇・蟲寓縁「欲求解脱、度世苦者、当学此法、如飲甘露」(大正五四・一八六c)、李儼『法苑珠林』序「庶使緝玄詞者、探卷而得意珠、軌正道者、披文而飲甘露、繹之以知微、觀之而睹奥」(大正五三・二六九b)。

【祥雲・甘露】謝靈運・武帝誄「孰是人事。自天所祐。甘露芝草。祥雲瑞宿」(『芸文類聚』卷一三・帝王部三・宋武帝)。

【勤求】勤めて善法を求める。『妙法蓮華經』卷四・見宝塔品「普為諸衆生、勤求於大法、亦不為己身、及以五欲楽」(大正九・三四c)、『大方広仏華嚴經』(六十華嚴)『卷六・淨行品』(遶塔三匝、当願衆生、得一向意、勤求仏道」(大正九・四三二c)。

【載法】載は記す。文字に記された法すなわち經典のこと。『大唐貞元統開元釈教録』卷中「法師諱良賁……、時永泰二年繕写云畢、修表進上請以流行。詞曰……、成道者法也、載法者経也、釈経者疏也」(大正五五・七五八b)。

【衡晷】衡は、天秤、釣り合いがとれていること。晷は日時計。經典が翻訳された『大宝積經』が秤や日時計の如く、世の基準となることを言うか。用例未見。

【章句】経文の章と句。『大般涅槃經』(曇無讖訳)『卷三・名字功德品』「爾時如來復告迦葉、善男子、汝今应当善持是経、文字章句、所有功德」(大正一二・三八四c)、『広弘明集』卷二八・陳文帝・方等陀羅尼齋懺文「至如婆薮之拔地獄、波旬之発菩提、花聚之獲神通、雷音之脱掩蔽、莫不因斯章句承茲業力」(大正五二・三三四a)。

【義不唐捐】唐捐は、いたずらに捨て去るの意。『妙法蓮華經』卷七・妙音菩薩品「若有衆生、恭敬礼拝觀世音菩薩、福不唐捐是故衆生、皆応受持觀世音菩薩名号」(大正九・五七a)、『玄扈』一切経音義』卷六「唐捐。案、唐、徒也。蒼頡篇云、捐、棄也」、『法苑珠林』卷八六・懺悔篇・違順部「雖許此懺、須立大心、順教奉行、如死還活、大士大行、義不唐捐」(大正五三・九

一五a)。

【小品】この『大宝積經』を構成する全四九会のうち、第四三会・普明菩薩会の異訳として、『大迦葉問大宝積正法經』（大正一二、No. 352）があり、これを中心として様々な經典が付加されて現在の『大宝積經』が成立したとされている。全四九会の『大宝積經』を小品として、これに対して『大迦葉問大宝積正法經』を小品と呼んだものであろうか。もしくは、『大宝積經』を構成する全ての經典を、まとめて小品と言ったのかもしれない。

【精微】教説の微妙な精髄。『広弘明集』卷一八・遠法師書「然仏教精微、難以事詰、至於理玄數表、義隱於經者、不可勝言」

VI 訳業の完成と皇帝への上進

【訓読】

今新たに翻せし所の經は、凡そ四十九会七十七品あり、合して一十二帙。類を以て相い従い、撰写み威みな畢り、先天二年（七一三）六月三十日を以て太上皇に進め、八月二十一日皇帝に進む。禁闥ひら曉ひらに闢ひらき、真教上聞され、仙宇（宇）克く怡やわらぎ、宸襟まじこ允やわに穆やわらぐ。竦すく鈞しんは白日に陳つるなり、親しく靈台に御し、落雲は彤霄あめふらに雨し、苕しきりに殊尉しきりを加う。賢愚稽首して、仁王を見るに利ありと以為おもい、真俗帰心して、潜かに覺道に登ると以為おもう。

【語釈】

【合一十二帙】『開元釈教錄』卷一九・入藏錄上「大宝積經一百二十卷。四十九会説、合成一部十二帙、一千九百九十一紙」（大

正五五・六八〇c）。

【以類相從】分類した上で、同種のものをまとめて順序づけるこ

（大正五二・二二四a）、『大唐大慈恩寺三藏法師傳』卷七「天皇帝居春宮奉陪聖文、又製述聖記、其詞曰……、極空有之精微、体生滅之機要」（大正五〇・二五七a）。

【拯無遺溺】溺れる者をもれなく救い上げること。遺溺の用例未見。

【能事畢矣】『易』繫辭伝「引而伸之、触類而長之、天下之能事畢矣」。

【仏何言哉】仏が言葉を発表せずとも、その教えが行われたことを言う。『論語』陽貨「子曰、予欲無言。子貢曰、子如不言、則小子何述焉。子曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉」。

と。『荀子』正論「凡爵列・官職・賞慶・刑罰、皆報也、以類相從者也」、『歷代三寶紀』卷一一「敕沙門僧受宝唱等、經律要事、以類相從、名經律異相、凡五十卷」(大正四九・九四b)。

【撰写】 翻訳と筆写。適例未見。

【先天二年六月三十日進太上皇、八月二十一日進皇帝】 太上皇は睿宗、皇帝とは玄宗。「大宝積經序」訳注において述べたように、当時、太上皇睿宗と皇帝玄宗は二重統治体制を取っていたが、この年七月の太平公主(睿宗の妹、玄宗の叔母)の謀反事件を契機として、睿宗は政事の実権を完全に玄宗に移譲することになる。『大宝積經』の序文が睿宗の御製であることから、翻訳終了の後まず睿宗に進上されたが、まもなく玄宗が完全に実権を握ったため、改めて八月にも玄宗に対して進上されたのであろう。

【禁闈】 宮殿の門、転じて宮中を指す。『後漢書』列伝五一・周举伝「出入京輦、有欽哉之績、在禁闈、有密静之風」。

【曉闕】 『隋書』卷五九・楊三子伝・元德太子昭「未幾而薨、詔内史侍郎虞世基為哀冊文曰、……展綍宮載、鶴閑曉闕、肅文物以具陳、儼賓從其如昔」、法琳『弁正論』卷三・十代奉仏「梁昭明太子・梁晉安殿下。……並學第百氏、文統九流。綢氣逸於風雲、好詞光於日月。尊重妙法、欽敬福門。至如承華旦啓、肅城曉闕、名僧結侶、通儒總萃、吐納辭理、品藻内外」(大正五二・五〇四c)。

【真教】 仏教のこと。法琳『弁正論』卷八・邵陵王啓救捨老子受

菩薩戒文「捨老子之邪風、入法流之真教」(大正五二・五五〇a)。

【仙宇】 仙人の住居。ここでは宮城を指す。隋・江總・玄圃石室銘「仙山石墀、仙宇石牆、地云正域、道示修羊」(『藝文類聚』六五・産業部上・圃)。

【克怡】 克は能に同じ。用例未見。

【宸襟】 天子の御心、胸中。宸は皇帝の居所、転じて皇帝に関わる事柄に冠する。梁・何遜・為西豊侯九日侍宴樂遊苑「宸襟動時豫、歲序属涼氛」(『芸文類聚』卷四・歲時中・九月九日)。

【允穆】 『文選』卷五八・謝朓・齊敬皇后哀策文「爰定厥祥、德音允穆」、『隋書』卷一四・音樂志中・迎神奏高明登歌樂辭「祀事孔明、百神允穆、神心乃顧、保茲介福」。

【竦鈞】 竦は聳に通じ、そびえるの意。鈞は前出の陶鈞のことか。用例未見。以下の二句は唐の皇帝が天子として天下に君臨することを使う。

【陳於白日】 適例未見。

【親御靈台】 靈台は、もと周の文王が建築した雲氣を望む台。唐では長安の皇城内に置かれた。宋敏求『長安志』卷七「承天門街之西、第六横街之北。……次西、司天監。……監内有靈台、以候雲物」。参考、『詩』大雅・靈台「經始靈台、經之營之(鄭玄箋。天子有靈台者、所以觀祲象察氣之妖祥也)」。

【落雲】 たれ込めた雲。鮑溶・隴頭水「細響風凋草、清哀雁落雲」(『樂府詩集』卷二一)、李白・幽州胡馬客歌「彎弓若轉月、白

雁落雲端」（『李太白集』卷四）。

【雨於彤霄】彤は丹に同じ。霄は空の意。長安には丹霄楼という楼閣があった。『旧唐書』卷六九・薛万徹伝「太宗嘗召司徒長孫無忌等十余人、宴於丹霄殿、各賜以貔皮、万徹預焉」、『唐会要』卷二六・郷飲酒「（永徽）五年九月三日、御丹霄楼、觀三品已上行大射礼」。以下の二句は、皇帝の恩沢が天下を潤すことを言う。

【荐加】荐は頻りに、しばしば。『新唐書』卷一九五・孝友伝「柳宗元為作孝門銘曰……、帝命荐加、亦表其門」。

【殊尉】尉は慰に通じる。適例未見。

【利見】『易』乾「飛龍在天、利見大人」。

VII 徐・李両氏による大宝積經の写経事業と願文

〔訓読〕

次いで清信仏弟子・前少府監丞・李式顔等あり、皇朝の金紫光禄大夫・兵部尚書・贈侍中・隴西公・迥秀の子なり。復た清信仏弟子・前右拾遺徐鑄等あり、皇朝の銀青光禄大夫・太子賓客・昭文館學士・高平公の子なり。咸な彼穹の禍を降し、私門の墜構せるに属りて、遙帖に陟りて崩心し、冥途を瞻て献福す。是に於て篋を肘き笥を探り、檀波羅蜜し、簡牋を広げ疊ね、書写を首崇し、槐火を變ぜずして、遽かに苔秩を盈す。然る後、之を装うに鏤軸もてし、轅るに瓊籤を以てし、綵を簾に羅ねて寛舒たらしめ、珠を函に播きて錦綉たらしむ。方使し猛風嶽を吹くも、長く妬（如）路の文を存し、劫火天（大）を焼くも、多羅の典を壞らざらしめんことを。

【仁王】民を憐れみ、徳を備えた帝王。『広弘明集』卷二八・陳宣帝・勝天王般若懺文「故知、如来付囑、必俟仁王、般若興隆、期於聖運」（大正五二・三三三a）。

【真俗】出家と在家。『広弘明集』卷八・道安・二教論「徒訛惑生民、敗傷王教、真俗擾動、帰正無從」（大五二・一四一b）。

【潜登】『統高僧伝』卷六・梁余杭西寺釈法開伝「終日遊談、未嘗暫息。心性躁鋭、無敵不攻。有時窃発潜登、以掩不備。当其鋒者、罕不結舌。由是顯名」（大正五〇・四七四a）。

【覺道】大覺の道、正覺の大道。『維摩詰諸説經』卷一・仏国品「始在仏樹力降魔、得甘露滅覺道成」（大正一四・五三七c）。

【語釈】

【清信仏弟子】 清信士は在俗信者、優婆塞。法琳『弁正論』卷八・梁武帝・捨道敕文「乃是清信言清信者、清是表裏俱淨、垢穢惑累皆尽、信是信正不邪、故言清信仏弟子、其余諸善、皆是邪見、不得称清信也」(大正五二・五四九c)。

【前少府監丞】 少府監は宮中御物の製作をつかさどる官署。丞はその判官で従六品下の職事官。前はこの直前に少府監丞の官に就いていたことをいう。

【李式顔】 伝無し。未詳。

【金紫光祿大夫】 正三品の文散官。

【贈侍中】 没後に門下侍中の官位を追贈された。

【隴西公】 未詳。隴西郡開国公か。

【迥秀】 李迥秀。『旧唐書』六二、『新唐書』九九。

【前右拾遺】 右拾遺は中書省に所属する従八品上の職事官。同じく中書省に所属する右補闕、門下省に所属する左補闕・左拾遺とともに、政治に不備・欠点がある際には皇帝を諫めることを職務とする。『大唐六典』卷九・中書省「右補闕二人、従七品上。……右拾遺二人、従八品上。……右補闕・拾遺掌如左補闕・拾遺之職」、『大唐六典』卷八・門下省「左補闕・拾遺掌供奉諷諫、扈從乘輿。凡発令举事、有不便於時、不合於道、大則廷議、小則上封。若賢良之遺滞於下、忠孝之不聞於上、則条其事、状而薦言之」。

【徐鑄】 この「大宝積經述」の撰者徐鏐の兄。正史等に伝無し。

『元和姓纂』卷二(徐) 仁会、高郵令。生(徐)彦伯。給事中、工部侍郎、右常侍、太子賓客。生鑄・鏐。鏐、洛陽令、司封郎中」。

【太子賓客】 皇太子の訓導に当たる。正三品の職事官。『大唐六典』卷二六「太子賓客四人、正三品。……太子賓客掌侍從規諫、贊相礼儀」。

【昭文館學士】 昭文館は弘文館の別名。弘文館は門下省に所属する宮中の蔵書閣であると同時に、皇族や三品以上の官僚の子弟のための学校でもあった。學士・直學士が置かれたが、この官職には固有の官品は無く、他の職事官に就いている儒學の士が兼任した。

【高平公】 徐彦伯。撰者徐鏐の父ゆえ諱を言わ程、爵位によってかく呼ぶ。『旧唐書』九四「神龍元年、遷太常少卿、兼修国史、以預修則天實録、成、封高平県子。……景雲初、加銀青光祿大夫、遷右散騎常侍、太子賓客、仍兼昭文館學士。先天元年、以疾乞骸骨、許之。開元二年卒」。

【彼穹降禍、私門墜構】 李氏・徐氏ともに父の李迥秀・徐彦伯の代にはある程度の官位に登ったのに対して、子の李式顔・徐鑄・徐鏐の時には、家運が振るわなくなったことを言う。『旧唐書』『新唐書』の李迥秀・徐彦伯伝いずれも、その子孫についてはほとんど記すところが無い。なお、李迥秀の子斉損は『新唐書』李迥秀伝によれば、「開元十年、与権梁山等構逆伏誅、籍没其家」

也」とある。

【彼窶】窶は蒼窶、天のこと。梁・任昉・王貴嬪哀策文「仁者必寿、彼蒼者窶、如何不淑、万化齊終」（『芸文類聚』卷一五・后妃部・后妃）。参考、晋・潘岳・京陵女公子王氏哀辞「彼蒼者天、胡寧斯忍、曾未弱笄、無疾而隕」（『芸文類聚』卷三四・人部一八・哀傷）。

【降禍】『春秋左氏伝』昭公三十二年「秋八月、王使富辛与石張如晋、請城成周、天子曰、天降禍于周、俾我兄弟、並有乱心。私門墜構」家門が没落すること。構は結構、門構え。『宋書』

卷八五・謝莊伝「莊遺腹心門生具慶、奉啓事、密詣世祖曰……使弛墜之構、更獲締造、垢辱之恥、復得明目」、『旧唐書』卷五・高宗本紀下「賛曰、藉文鴻業、僅保余位。封岱礼天、其德不類。伏戎于寝、構堂終墜。自蘊禍胎、邦家殄瘁」。

【陟遙帖】父母を追憶すること。『詩』魏風・陟帖・序「陟帖、孝子行役、思念父母也、国迫而数侵削、役乎大国、父母兄弟離散、而作是詩也」、『詩』魏風・陟帖「陟彼帖兮、瞻望父兮」（毛伝。山无草木曰帖）。

【崩心】悲しみに心も砕ける様子を言う。陳・沈炯・武帝哀策文「望三靈而標目、踰九地而崩心」（『芸文類聚』卷一四・帝王部四・陳武帝）、『集古今仏道論衡』卷丙「貞観十五年五月十四日、太宗文帝躬幸弘福寺……乃手製願文曰……追惟撫育之恩、每念慈顔之遠。泣血崩心永無逮及、号天暨地何所厝身」（大五二・三八五c）。

【祛篋探筭】参考、『莊子』祛篋「將為祛篋探囊発置之盜、而為守備、則必攝緘縻、固局鑄」、王先謙集解「司馬云、從旁開為祛」。

【檀波羅蜜】六波羅蜜の一。また布施波羅蜜、布施度無極という。財または法を人に施与すること。

【首崇】杜甫・有事于南郊賦「職在宗伯、首崇禋祀」（『文苑英華』卷五四）。

【不變槐火】『周礼』夏官・司燿「司燿掌行火之政令、四時變国火、以救疾（鄭玄注。鄭司農説以鄒子曰、春取榆柳之火、……冬取槐檀之火）」すなわち、「槐火を変ぜず」とは「冬を越す前に」または「年内に」を意味し、李・徐氏による『大宝積經』の写経事業が年内にすみやかに完了したことを言う。

【遽盈苔秩】秩は帙に同じ。また唐代に苔箋という名称の紙があったことが、唐・李肇『唐国史補』下に「紙則有越之剡藤苔箋、蜀之魚子十色箋、揚之六合箋、韶之竹箋」とみえる。ここでは書写された大宝積經の巻帙を指す。

【装之鏤軸、輟以瓊籤】『大宝積經』を美しく装丁したことをいう。

【鏤軸】彫刻を施した卷子本の軸。『唐会要』卷七五・選部下・雜処置「八年八月、吏部奏、請差定文武官告紙軸之色物……、金銀花牋、紅牙、発鏤軸鈿等、除恩賜外、請並禁斷。敕旨依奏」
【瓊籤】玉製の札。温庭筠・湘東宴曲「重城漏斷孤帆去、唯恐瓊籤報天曙」（『温庭筠詩集』卷二）。

【羅綵簾而寛舒、播珠函而錦綳】 装丁した『大宝積經』を鄭重に收納したことを言う。

【羅綵簾】 綵はあやぎぬ、簾は竹で編んだ筵。

【寛舒】 舒は緩やかにする。寛は虹の一種だが、ここでは単なる美称。

【播珠函】 珠函は宝珠で飾った箱。法琳『弁正論』卷一・三教治道篇「八万修多拏龍床而器写、珠函宝印既溢王宮」(大五二・四九二中)。

【錦綳】 綳は飾る。沈約・謝齊竟陵王宋永明樂歌「鳳綵鸞章、霞鮮錦綳、靚寶河宗、未必比麗」(『芸文類聚』卷四三・樂部三。

歌)、『広弘明集』卷二〇・法義篇・西中郎将晋安王・玄圃園講頌「擗管摘章、既嫵娟錦綳、清談論弁、亦参差玉照」(大正五二・二四二b)。

【猛風吹嶽】 嶽は須弥山のことか。『大般涅槃經』(曇無讖訳)「卷一一・現病品」譬如須弥山旋藍猛風、不能令動墮落退散。菩薩摩訶薩住是地中、亦復如是」(大正一一・四三三c)。

【長存】『歷代三宝紀』卷一二「凡諸訳經婆羅門道俗并見緝綴、此方縉儒十有九人、所翻新文及維旧本論伝法戒、合七十五部四

百六十二卷、結為皇隋大興録目。流之遐代永作楷模、同軌光揚長存不朽」(大正四九・一〇二a)。

【妬路之文】 妬路は修妬路(sūtra)の略。修妬路は修多羅に同じで、經典のこと。智顗『妙法蓮華經玄義』卷八「脩多羅、或云脩單蘭、或云脩妬路」(大正三三・七七五a)。

【劫火】 劫火は宇宙の破壊の時期(壞劫)の終末に起こる火災。

『高僧伝』卷一・竺法蘭伝「又昔漢武穿昆明池、底得黑灰、以問東方朔。朔云不委、可問西域人。後法蘭既至。衆人追以問之。蘭云、世界終尽劫火洞燒、此灰是也」(大正五〇・三二三a)。

『法苑珠林』卷三八・敬塔篇・故塔部「又小法滅尽經云、後劫火起時、曾作伽藍所不為火焚、乃至金剛界為上台也」(大正五三・五八四a)。

【燒天】「天」はもと「大」に作るが文意によって改める。『正法華經』卷七・如來現壽品「見是世界、水火災變、劫燒天地、当斯之時、吾此仏土、具足微妙、柔軟安雅、歌舞戲笑、無量安隱」(大正九・一一五a)。

【多羅之典】 多羅は修多羅の略。

(米田健志)

七 大周新翻三藏聖教序

〔釋文〕

大周新翻¹三藏聖教序

御製²

蓋聞。大乘奧典。光祕蹟於瓊編。三藏玄樞。著靈文於寶偈。斯乃牢籠繫象。演暢幽深。雖第一義空。名言之路雙絕。諸法無相。聽說之理兼忘。³然則。發啓善根。寔資開導。⁴弘宣妙旨。終寄顯揚。至若鹿野初開。儼尊容於常住。龍宮載闢。緘舍利於將來。所以地涌全身。爲證說經之兆。空懸寶殿。爰標闡法之徵。八萬四千。分布閭浮之境。三十六億。莊嚴平等之居。敷演一音。則隨類而解。廣陳三句。則劫壽難窮。自夜掩周星。宵通漢夢。玉毫流彩。式彰東漸之風。金口傳芳。遂覩後秦之譯。修多祇夜之祕蹟。因緣譬喻之要宗。授記之與本生。方廣之與論議。雖立名差別。而究理不殊。同歸實相之源。竝湊涅槃之會。

朕幼崇釋教。夙暮歸依。⁹思欲運六道於慈舟。迴超苦海。驅四生於彼岸。永離蓋纏。窮貝牒之遺文。集蜂臺之祕錄。¹²

今於大福先寺翻譯院。所更譯三藏。¹³所言入定不定印經者。此明退不退之心。前二後三。雖有遲速。如來設教。同趣菩提。既顯神呪之功。莊嚴最上。爰述下生之記。說法度人。三藏法師義淨等。竝緇俗之綱維。紺坊之龍象。德包初地。道輔彌天。光我紹隆之基。更峻住持之業。以久視元年歲次庚子五月五日。繕寫畢功。重開甘露之門。方布大雲之蔭。所冀芥城數極。鳥筆猶傳。拂石年窮。樹經無泯。¹⁸弘濟覃於百億。遷拔被於恒沙。部帙條流。列之於左

次の諸本を確認した。

- ・『高麗大藏經』第一〇卷三二一頁a～b
- ・『大正大藏經』第一五卷七〇六頁a～b
- ・『修訂中華大藏經』第一輯第四六冊(『磧砂大藏經』)
- ・『中華大藏經』漢文部分第一六卷八七六頁b～c(金藏広勝寺本)
- ・『大日本校訂大藏經』(縮刷大藏經) 目録三丁右～左
- ・『全唐文』卷九十七

〔校勘〕

- 1 「大周新翻」大正藏校注・明本無し。金藏校注「經序、房山雲居寺石經・清藏無。明永樂南藏作「唐武周新翻」、明徑山藏無」。全唐文無し。
- 2 「御製」大正藏校注・明本「唐武則天製」に作る。金藏校注「明徑山藏作「武則天製」」。『唐』全唐文無し。
- 3 「忘」金藏「亡」に作る。金藏校注「宋磧砂藏・明永樂南藏作「忘」」。
- 4 「寔」大正藏校注・三本・宮本「實」に作る。磧砂藏「實」に作る。
- 5 「弘」全唐文「宏」に作る。
- 6 磧砂藏平出。
- 7 「證」金藏「慧」に作る。金藏校注「宋磧砂藏・明永樂南藏・明徑山藏作「證」」。
- 8 「授」金藏「稀」に作る。金藏校注「宋磧砂藏・明永樂南藏・明徑山藏作「授」」。
- 9 磧砂藏平出。
- 10 「暮」大正藏校注・三本・宮本「慕」に作る。磧砂藏・縮藏「慕」に作る。金藏校注「宋磧砂藏・明永樂南藏・明徑山藏作「慕」」。
- 11 「蜂」大正藏「峰」に作る。
- 12 「祕」金藏「秘」に作る。
- 13 「更」縮藏校注「更又作便」。
- 14 「三藏」全唐文「斯經」に作る。大正藏校注・三本・宮本「斯經」に作る。金藏校注「宋磧砂藏・明永樂南藏・明徑山藏作「三藏」」。

「斯經」。

15 「竝」縮藏「可謂」に作る。

16 「包」縮藏金藏「苞」に作る。

I

〔訓読〕

大周新翻三藏聖教序

御製

蓋し聞くならく、大乘の奥典は秘頤を瓊編に光かし、三藏の元枢は靈文を宝偈に著わす、と。斯れ乃ち牢籠繫象より、幽深を演暢す。第一義は空にして名言の路双つながら絶し、諸法は無相にして聴説の理兼ねて忘ると雖も、則ち善根を発啓して寔に開導を資け宏く妙旨を宣べ、終に顕揚に寄す。鹿野に初めて聞くが若きに至りては、尊容を常住に儼り、龍宮の載闢き、舍利を将来に緘づ。所以に地より全身を涌して説經の兆を証かすと為し、空に宝殿を懸け爰に闡法の徴を標す。八万四千閻浮の境に分布し、三十六億平等の居を莊嚴す。一音を敷演すれば則ち類に随いて解す。広く三句を陳ぶれば則ち劫寿もても窮め難し。夜に周星に掩われ宵に漢夢に通じて自り、玉毫彩を流ほし、式に東漸の風を彰し、金口芳を伝え、遂に後秦の訳を覩る。修多・祇夜の秘躅、因縁・譬喩の要宗、授記と本生と、方広と論議と、名を立つるに差別ありと雖も、理を究むれば殊ならず、同じく実相の源に歸し、並びに涅槃の会に湊る。

〔語釈〕

【秘頤】 奥深くにかくされたもの。『一切經音義』卷第三〇…秘頤「陂媚反字書云祕密也鄭箋毛詩云祕神也説文從示必聲經文從

禾作秘誤也下仕責反劉瓛注周易云頤者幽深之極稱也説文從駐責声臣音移」(大正五四・五〇七c一五〇八a)

17 「𦵏」慧琳『一切經音義』「𦵏」に作る。

18 「弘」全唐文「宏」に作る。

【瓊編】 本稿41ページの語釈参照。『一切経音義』卷第三〇…瓊編「葵宮反毛詩伝云瓊玉之美者説文赤玉也從玉𠂔聲𠂔音休迴反下必綿反着韻篇編織也声類以繩次物也説文從糸𠂔声𠂔音編」

【玄極】 おくぶかい道のかなめ。本稿25ページの語釈参照。『肇論』「涅槃無名論」…道無不治。徳無不施。窮化母之始物。極玄極之妙用。廓虚宇於無疆。耀薩雲於幽燭。(大正四五・一五八a)『老子』「一章」…玄之又玄。『莊子』「斉物論篇」…彼是莫得其偶。謂之道極。

【牢籠】 かこむ。『淮南子』「本経訓」…牢籠天地。『一切経音義』卷第三〇…牢籠「老刀反方言牢圜也説文閑也養畜生之圜也正從牛從舟省舟之為義取四面匝也或從舟古終字下鹿紅反考声籠竹器也莊子曰鳩之在籠是也古今正字從竹龍声」(大正五四・五〇八a)

【繫象】 現象をかける。本稿14ページの語釈参照。

【名言之路双絶】 適例未検。智顗『維摩経玄疏』卷第一…雖理絶名言非名言無。以設教故於無名之道仮名相説。(大正三八・五一九a)

【諸法無相】 『涅槃経』卷第二十二「高貴徳王菩薩品」…一切諸法本無相故。(大正一二・七五四a)

【鹿野初開】 鹿野苑での初転法輪。

【儼尊容於常住】 出典未詳。『涅槃経』の教説を指すか。

【龍宮載闢】 龍樹菩薩が龍宮において大乘經典を授けられたことを指すか。『龍樹菩薩伝』…大龍菩薩見其如是惜而愍之。即接

之入海。於宮殿中開七宝藏。発七宝華函。以諸方等深奥經典無量妙法授之。龍樹受説九十日中通解甚多。其心深入体得宝利。(大正五〇・一八四c)

【臧舍利於将来】 未詳。釈尊の遺骨を分骨しそれぞれに塔を建てたことを指すか。或いは、義浄が仏舎利を中国に持ち帰ったことを指すか。

【地涌全身為証説経之兆】 『法華経』「見宝塔品」…爾時菩薩摩訶薩。名大衆説。知一切世間天人阿修羅等心之所疑。而白仏言。世尊。以何因縁有此宝塔從地涌出。又於其中発是音声。爾時仏告大衆説菩薩。此宝塔中有如来全身。(大正九・三二c)

【空懸宝殿爰標闢法之徴】 『法華経』「見宝塔品」…爾時仏前有七宝塔。高五百由旬。縦広二百五十由旬。從地踊出住在空中。種種宝物而莊校之。五千欄楯龕室千万。無數幢幡以為嚴飾。垂宝璎珞。宝鈴万億而懸其上。四面皆出多摩羅跋栴檀之香。充滿世界。其諸幡蓋。以金銀瑠璃砗磲真珠磔磈七宝合成。高至四天王宮。三十三天。雨天曼陀羅華供養宝塔。餘諸天龍夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等千万億衆。以一切華香璎珞幡蓋伎楽。供養宝塔恭敬尊重讚歎。爾時宝塔中出大音声歎言。善哉善哉。釈迦牟尼世尊。能以平等大慧。教菩薩法。仏所護念。妙法華経為大衆説。如是如是。釈迦牟尼世尊。如所説者。皆是真实。(大正九・三二b-c)

【敷演一音則随類而解】 『維摩経』「仏国品」…仏以一音演説法。衆生随類各得解。皆謂世尊同其語。斯則神力不共法。仏以一音

演說法。衆生各各隨所解。普得受行獲其利。斯則神力不共法。

仏以一音演說法。或有恐畏或歡喜。或生厭離或斷疑。斯則神力不共法。(大正一四・五三八a)

【八万四千】 八万四千の法門。『智度論』卷第一・四悉檀中。総撰一切十二部經。八万四千法藏。皆是実無相違背。(大正二五・五九b)

【三十六億】 三十六億那由他の声聞僧。『維摩經』「法供養品」・仏告天帝。過去無量阿僧祇劫時。世有仏号曰棄王如来応供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師仏世尊。世界名大莊嚴。劫曰莊嚴。仏寿二十小劫。其声聞僧三十六億那由他。菩薩僧有十二億。(大正一四・五五六b)

【広陳三句則劫寿難窮】 「三句」は、仏の三句義のこと。三藐三仏陀 (samyak-sambodhi) ・多陀阿伽度 (tathagata) ・仏陀 (buddha) 、『維摩經』「菩薩行品」・是故名爲三藐三仏陀。名爲多陀阿伽度。名爲仏陀。阿難。若我広説此三句義。汝以劫寿不能尽受。(大正一四・五五四a)

【夜掩周星】 本稿38ページ、58ページの語釈参照。

【宵通漢夢】 後漢明帝が金人を夢みて使を西域に遣わして仏教を求めさせた伝説を指すものと思われる。『後漢紀』明帝紀下・永平一三(七〇)年「初。明帝夢見金人。長大項有日月光。以問群臣。或曰。西方有神。其名曰仏。其形長大。陛下所夢。得

無是乎。於是遣使天竺。而問其道術。遂於中国而図其形象焉。

【玉毫】 仏の白毫相。智顗『五方便念仏門』・凡任心一境名曰凝心。且如行者念仏之時諦觀如来玉毫金相。凝然寂靜了亮洞徹。名凝心禪。(大正四七・八一c)

【流彩】 適例未検。明、顧起綸『国雅品』「士品三」・王吏部敬夫才雋思逸。鋭於綺麗。譬之湖外碧草。海東紅雲。流彩奪目。『初學記』「武部・劍」・魏有文帝飛景流彩華鋒三劍。『原注』・見典論。『王融発願莊嚴篇頌』・清露搏甘永以挹喜国流彩常為玩。

【式彰】 あらわす。『劉知幾章弑賦』・式彰茂德分意表情。

【後秦之訳】 鳩摩羅什の訳業によって仏教が盛んになったことを指すか。

【修多祇夜之祕躑】 因縁譬喩之要宗。授記之与本生。方広之与論議。仏典の様々な形式を列挙したもの。一般的に十二部経を列挙すると次の通り。・経(sūtra)・修多羅・重頌(geya)・祇夜・授記(vyākaraṇa)・和伽羅那・孤起頌(gāthā)・伽陀・無問自説(udāna)・優陀那・因縁(nidāna)・尼陀那・譬喩(avadāna)・阿波陀那・本事(iti-vuttaka)・伊帝曰多伽・本生(jātaka)・闍陀迦・方広(vaipulya)・毘仏略・未曾有(adbudhārma)・阿浮陀達磨・論議(upadeśa)・優波提舍『一切経音義』卷第三〇・祕躑「下重録反漢書音義躑跡也説文從足蜀声也」(大正五四・五〇八a)

II

〔訓読〕

朕幼くして釈教を崇び夙暮に帰依せり。六道を慈舟に運び、廻かに苦海を超え、四生を彼岸に駆け、永く蓋纏を離れんと思ひ、貝牒の遺文を窮め、蜂臺の秘録を集む。

〔語釈〕

【思欲】 思ひ欲する。魏武帝「苦寒行」…我心何怫鬱。思欲一東帰。

【六道】 地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天。

【四生】 生物の生まれる四種の形式。卵生・胎生・湿生・化生。

『成実論』「四諦品」…又有四生。卵生胎生湿生化生。諸天地獄一切化生。餓鬼二種胎生化生。余残四生。(大正三二・二五〇c)

（二五一a）

【蜂台】 仏塔のこと。唐、樊忱「奉和九月九日登慈恩寺浮図亭制」…浄境重陽節。仙遊万乗来。挿萸登鸞嶺。把菊坐蜂臺。十地祥雲合。三天瑞景開。秋風詞更遠。竊抃樂康哉。

【秘録】 道教の秘文。ここでは仏教の典籍を指す。唐、陳子昂「洛城觀酺應制詩」…蒼極神功被。青雲秘録開。

III

〔訓読〕

今、大福先寺翻訳院に於て更めて三藏を訳する所なり。言う所の『入定不定印經』とは、此れ退・不退の心、前二・後三を明かすなり。遅速有りと雖も、如来の設教、同じく菩提に趣く。既に神呪の功顯らかにして、莊嚴最上たり。爰に下生の記を述べ、説法して人を度す。三藏法師義浄等、並びに縉俗の綱維、紺坊の龍象、徳は初地に包み、道は弥天に幅たり。我が紹隆の基を光かし、更に住持の業を峻くせり。久視元年歲次庚子（西暦七〇〇年）五月五日を以て繕写し

功を畢え、重ねて甘露の門を開き、方て大雲の蔭を布く。冀う所は、芥城の数極るも鳥筆猶ほ伝え、払石の年窮まるも経を樹つるに泯ぶ無く、弘く百億を済覃し、遷拔すること恒沙に被ばんことを。部帙條流は之を左に列ぬ。

【語釈】

【大福先寺】 本稿46ページの語釈参照。

【入定不定印経】 一卷。義浄訳。智昇『開元釈経録』巻第九「義浄伝」(大正五五・五六八b-c)

【前二後三】 『入定不定印経』において説かれる菩薩の五種の行。羊車行・象車行・日月神力行・声聞神力行・如来神力行の五種類。羊車行・象車行の二種は不決定で退転することがあり、日月神力行・声聞神力行・如来神力行の三種は決定で不退転であるとする。

【紺坊】 仏寺。

【大雲之蔭】 武后の影響力を指すのであろうか。

【道輞】 『一切経音義』巻第三〇…道麟「栗鎮反漢書云麟轢也案麟者轢也跡也或作麟亦作躡亦作躡古今正字從車聲声経文作輞誤

也」(大正五四・五〇八a)

【芥城数極】 劫。長い時間。『大智度論』巻第五…劫義仏譬喩説。四千里石山有長寿人。百歳過持細軟衣一來払拭。令是大石山尽。劫故未尽。四千里大城。満中芥子。不概令平。有長寿人百歳過一來取一芥子去。芥子尽。劫故不尽。(大正二五・一〇〇c)

【鳥筆】 未詳。

【払石年窮】 「芥城数極」に同じ。

【済覃】 救い、安んずること。用例未検。

【遷拔】 傑出する。前蜀、杜光庭『胡賢常侍安宅礁詞』…慮其神識。尚有淹延。憑此礁符。俱令遷拔。『黄斉為二亡男助黄録斎詞』…伏思遷拔。唯仗焚修。

(采翠 晃)

八 大唐中興三藏聖教序

〔釋文〕

大唐中興三藏聖教序¹御製²

蓋聞。蒼蒼者天。列星辰而著象。茫茫者地。奠川岳以成形。³仰觀天文。既如彼也。俯循地理。又若斯焉。⁴夫以妙旨幽微。名言之路攸絕。眞如湛寂。性相之義都捐。然則。發啓心聲。資法雷之激響。獎導迷衆。俟覺首以司方。故知。假名不壞。於常名。樂說乃詮於无說。⁸至若象外之象。獨稱三界之尊。天中之天。爰著六通之聖。法王利見。⁹孕育於七十二君。梵帝乘時。牢籠於萬八千歲。周星彩。¹⁰言符降誕之徵。¹¹漢日流祥。載叶通神之夢。故能威揚沙劫。化被塵區。玉毫舒耀而除昏。金口弘宣而遣滯。破煩惱之賊。詎藉干戈。壞生死之軍。惟憑慧力。闢圓明之界。廣納於無邊。¹⁵開常樂之門。普該於有識。縱使浮天欲浪。境風息而俄澄。漲日情塵。法雨霑而使廓。¹⁶歸依者鎖殃而致福。¹⁷迴向者去危而獲安。可謂巍巍乎其有成功。蕩蕩乎而無能名者矣。但四生蠢蠢。未悟无常。¹⁹六趣悠悠。俱纏有結。²⁰詎知空花不實。水月非堅。馳逐於五陰之中。播遷於三界之域。納諸品彙。終俟法門。自白馬西來。²¹玄言東被。

世尊則隨類敷演。衆生乃逐性開迷。馬鳴擅美於瓊編。龍樹騰芳於寶偈。於是遙通震旦。遠布閭浮。半滿之教區分。大小之乘竝驚。澄安俊德。接武於勝場。琳遠高人。駢蹤於法宇。遂使微言著範。²⁵歷千古而暢英聲。至蹟流規。²⁶周十方而騰茂實。頃屬後周膺運。大扇魔風。²⁷遂使天下招提。咸從毀廢。寰中法侶。竝混編氓。²⁸嗟乎。閨寂禪居。空留宴坐之處。荒涼慧苑。无復經行之蹤。²⁹爰泊開皇。重將修建。旋逢大業。又遇分崩。鬼哭神吟。山鳴海沸。既遭塗炭。寧有伽藍。正法消

論。邪見增長。於是人迷覺路。遭迴於苦集之區。俗蔽眞宗。羈絆於蓋纏之內。

我大唐之有天下也。上凌巢燧。俯視羲軒。三聖重光。萬邦一統。威如有截。澤被无垠。掩坤絡以還淳。亘乾維而獻款。

再懸佛日。重補梵天。龍宮將八柱齊安。鷲嶺共五峯爭峻。大弘釋教。諒屬皇朝者焉。大福先寺翻經三藏法師義淨者。范

陽人也。俗姓張氏。五代相韓之後。三台仕晉之前。朱紫分輝。貂蟬合彩。高祖爲東齊郡守。仁風遂扇。甘雨隨車。化闡

六條。政行十部。爰祖及父。俱猷俗榮。放曠一丘。逍遙三徑。含和體素。養性恬神。摘芝秀於東山。挹清流於南澗。可

謂幽尋丹嶠。棲偃白雲。臯鵲於是吞聲。場駒以之繫影。法師幼挺明晤。夙彰聰敏。纔踰辯李之歲。心樂出家。甫過遊洛

之年。志尋西國。業該經史。學洞古今。惣三藏之玄樞。明一乘之奧義。既而閑居習靜。息慮安禪。託彼山林。遠茲塵累。

三十有七。方遂雅懷。以咸亨二年行至廣府。發蹤結契。數乃十人。鼓棹昇航。惟存一己。巡南溟以遐逝。指西域以長駟。

歷巖岫之千重。凌波濤之萬里。漸屆天竺。次至王城。

佛說法華。靈峯尚在。如來成道。聖躅仍留。吠舍城中。獻蓋之蹤不泯。給孤園內。布金之地猶存。三道寶階。居然目覩。

八大靈塔。邈矣親觀。所經三十餘國。凡歷二十餘載。菩提樹下。屢攀折以淹留。阿耨池邊。幾濯纓而澡鑒。法師慈悲作

室。忍辱爲衣。長齋則一食自資。長坐則六時無倦。又古來翻譯之者。莫不先出梵文。後資漢譯。臚詞方憑於學者。銓義

別稟於僧徒。今茲法師。不如是矣。既閑五天竺語。又詳二諦幽宗。譯義綴文。咸由於己出。措詞定理。匪假於傍求。超

漢代之摩騰。跨秦年之羅什。所將梵本經僅四百部。合五十萬頌。金剛座眞容一鋪。舍利三百粒。以證聖元年夏五月方屆

都焉。

則天大聖皇帝出震膺期。乘乾握紀。紹隆爲務。弘濟爲心。爰命百寮。兼整四衆。虹幡翬日。鳳吹遏雲。香散六銖。花飄

五色。商商濟濟。煌煌。迎于上東之門。置于授記之寺。共于闡三藏及大福先寺主沙門復禮西崇福寺主法藏等翻華嚴經。

後至大福先寺。與天竺三藏寶思末多及授記寺主惠表沙門勝莊慈訓等譯根本部律。其大德等莫不四禪凝慮。六度冥懷。懸

法鏡於心臺。朗戒珠於性海。詞林挺秀。將覺樹而連芳。慧炬揚輝。澄桂輪而合影。渾金璞玉。諒屬其人。誠梵宇之棟梁。

寔法門之龍象。⁸¹已翻諸雜經律二百餘卷。繕寫云畢。尋竝進內。其餘戒律諸論。方俟後詮。⁸²五篇之教俱明。八法之因備曉。⁸³鵝珠尚護。⁸⁴蟲命無傷。⁸⁵浮囊必取於不虧。油鉢終期於靡覆。崇聖教之綱紀。啓含生之耳目。伏願上資先聖。⁸⁶長隆七廟之基。⁸⁷下逮微躬。恒佐九天之命。遷懷生於壽域。致薄俗於淳源。歲稔時和。遠安邇肅。顧以萬機務惣。⁸⁸四海事殷。爰憑乙夜之餘。式贊彌天之德。⁸⁹課虛扣寂。聊題序云

次の諸本を確認した。

- ・『高麗大藏經』第九卷一二九一～一二九二頁
- ・『修訂中華大藏經』（磧砂大藏經）
- ・『中華大藏經』（金藏広勝寺本）金藏には欠。麗藏により補う。
- ・『大日本校訂大藏經』目録
- ・『全唐文』
- ・『敦煌大藏經』

〔校勘〕

- | | |
|---|--|
| <p>1 「大唐中興」磧砂藏「大唐龍興」に作る。全唐文無し。縮藏校注「此序明不載」。「中興」縮藏校注「宋元俱作龍興」。</p> <p>2 「御製」全唐文無し。縮藏校注「元作中宗皇帝製」。</p> <p>3 「岳」全唐文「嶽」に作る。</p> <p>4 「形」敦煌藏「刑」に作る。</p> <p>5 「循」敦煌藏「脣」に作る。</p> <p>6 「性」敦煌藏「往」に作る。</p> | <p>7 「獎」敦煌藏「將」に作る。</p> <p>8 「无」磧砂藏・縮藏・全唐文・敦煌藏「無」に作る。</p> <p>9 「利見」磧砂藏「見利」に作る。縮藏校注「宋元俱作見利」。</p> <p>10 「闕」全唐文「闕」に作る。</p> <p>11 「徵」縮藏校注「宋作徵」。</p> <p>12 「被」全唐文「彼」に作る。</p> <p>13 「弘」全唐文「宏」に作る。</p> |
|---|--|

- 14 「惟」全唐文「誰」に作る。
 15 「無」敦煌藏「无」に作る。
 16 「廓」縮藏校注「同作廓」。
 17 「迴」縮藏「廻」に作る。
 18 「無」敦煌藏「无」に作る。
 19 「无」磧砂藏・縮藏・全唐文「無」に作る。
 20 「花」磧砂藏・全唐文「華」に作る。
 21 「玄」全唐文「元」に作る。
 22 縮藏・全唐文・敦煌藏平出せず。
 23 「竝」敦煌藏無し。
 24 「遠」敦煌藏無し。
 25 「著」敦煌藏「着」に作る。
 26 「蹟」磧砂藏・全唐文「蹟」に作る。
 27 「風」敦煌藏「軍」に作る。
 28 「无」磧砂藏・全唐文「無」に作る。
 29 「泊」敦煌藏「泊」に作る。
 30 「見」全唐文「魔」に作る。
 31 「迴」縮藏「廻」に作る。
 32 縮藏・全唐文・敦煌藏平出せず。
 33 敦煌藏平出す。
 34 「无」磧砂藏「無」に作る。
 35 「弘」全唐文「宏」に作る。
 36 敦煌藏一格空ける。
- 37 敦煌藏平出す。
 38 「逐」全唐文「遠」に作る。
 39 「獸」縮藏・全唐文「厭」に作る。敦煌藏「厭」に作る。
 40 「丘」全唐文「邱」に作る。
 41 「徑」敦煌藏「徑」に作る。
 42 「性」全唐文「志」に作る。
 43 「摘」敦煌藏「擿」に作る。
 44 「挹」敦煌藏「抱」に作る。
 45 「偃」敦煌藏「憊」に作る。
 46 「繫」敦煌藏「熱」に作る。
 47 「惣」磧砂藏「摠」に作る。全唐文「總」に作る。
 48 「閑」全唐文「閒」に作る。
 49 「託」磧砂藏「托」に作る。
 50 「遂」敦煌藏「逐」に作る。
 51 「棹」全唐文「權」に作る。
 52 「惟」磧砂藏「唯」に作る。
 53 縮藏・全唐文平出せず。
 54 敦煌藏平出す。
 55 「舍」全唐文「奢」に作る。
 56 「蓋」敦煌藏無し。
 57 「蹤」全唐文「跡」に作る。縮藏校注「宋元俱作跡」。
 58 「屢」縮藏無し。
 59 「者」全唐文「著」に作る。

- 60 「懸」 磧砂藏・全唐文「懸」に作る。縮藏校注「元作懸」
 61 「稟」 全唐文「稟」に作る。
 62 「措」 磧砂藏・縮藏「指」に作る。
 63 「傍」 全唐文「旁」に作る。
 64 「僅」 敦煌藏「近」に作る。
 65 敦煌藏平出す。
 66 縮藏・全唐文平出せず。
 67 「弘」 全唐文「宏」に作る。
 68 「慧」 磧砂藏・全唐文・敦煌藏「掛」に作る。縮藏校注「同作掛」。
 69 「煌煌」 敦煌藏「惶惶」に作る。
 70 「于」 全唐文「於」に作る。
 71 「于」 全唐文「於」に作る。
 72 「寺」 縮藏・敦煌藏「寺」に作る。
 73 「翻」 敦煌藏「翻」に作る。
 74 「華」 敦煌藏「花」に作る。
- I
- 75 「末」 全唐文「末」に作る。
 76 「惠」 敦煌藏「慧」に作る。縮藏校注「同作慧」。
 77 「凝」 敦煌藏「疑」に作る。
 78 「連」 磧砂藏・全唐文「聯」に作る。敦煌藏「蓮」に作る。
 縮藏校注「宋作蓮元作聯」
 79 「影」 敦煌藏「彩」に作る。
 80 「璞」 敦煌藏「漢」に作る。
 81 「寔」 全唐文「實」に作る。
 82 「俱」 縮藏・敦煌藏「具」に作る。
 83 「珠」 敦煌藏「沫」に作る。
 84 「無」 敦煌藏「无」に作る。
 85 敦煌藏一格空ける。
 86 敦煌藏平出す。
 87 「機」 全唐文「幾」に作る。
 88 「惣」 磧砂藏「摠」に作る。縮藏・全唐文「總」に作る。
 89 「課」 敦煌藏「果」に作る。

〔訓読〕

大唐中興三藏聖教序

御製

蓋し聞くならず、蒼蒼たるは天、星辰を列ねて象を著し、茫茫たるは地、川岳を奠き以て形を成す、仰ぎて天文を觀る

に、既に彼の如く、俯して地の理を循るに、又斯くの若し、と。夫れいえらく、妙旨は幽微にして、名言の路絶する攸、真如は湛寂にして性相の義都て捐つ、と。然れば則ち心髣を発啓し、法雷の響を激うするを資く。迷衆を奨導するは、覚首以て司方するを俟つ。故に知んぬ。仮名常名を壊さず、楽説乃ち无説に詮わる。若しは象外の象に至りては、独り三界の尊と称す。天中の天爰に六通の聖を著わす。法王利見七十二君を孕育し、梵帝時に乗じ、万八千歳を牢籠す。周星彩を閔すは、言に降誕の徴に符し、漢日祥を流すは、載に通神の夢に叶う。故に能く威沙劫に揚げ、化塵区を被う。玉毫耀を舒べ昏を除き、金口弘宣して滯を遣る。煩惱の賊を破するに、詎ぞ干戈に藉らんや。生死の軍を壊するは、惟だ慧力に憑るのみ。円明の界を開き、広く無辺を納め、常楽の門を開き、普ねく有識を該す。縦使い浮天の欲浪も、境風息みて俄かに澄む。漲日の情塵も、法雨霑おして便ち廓し。帰依する者殃を鎖ぼして福を致し、迴向する者危うきを去りて安きを獲。巍巍乎として其れ成功有るや、蕩蕩乎として能く名づくる無しと謂ふ可し。但だ四生蠢蠢として、未だ无常を悟らず、六趣悠悠として、俱に有結に纏ぜらるのみ。詎ぞ空花実ならずして水月の堅に非ざること知らんや。五陰の中に馳逐し、三界の域に播遷し、諸の品彙を納めて、終に法門を俟つ。白馬西より来して自り玄言東被す。世尊則ち類に随いて敷演し、衆生乃ち性を逐ひ迷を開く。馬鳴美を瓊編に擅にし、龍樹芳を宝偈に騰ぐ。是に於て遙か震旦に通じ、遠く閭浮に布く。半満の教区分し、大小の乘並び驚す。澄・安の俊徳、武を勝場に接し、琳・遠の高人、蹤を法宇に駢ぶ。遂に微言をして範を著わし、千古を歴て英声を暢べ、至蹟規を流し、十方を周りて茂実を騰せ使む。

〔語釈〕

【蒼蒼者天】『莊子』「逍遙遊」…天之蒼蒼。其正色邪。其遠而無所至極邪。其視下也。亦若是則已矣。

【列星辰】『莊子』「天道」…日月固有明。星辰固有列矣。

【茫茫者地】適例未検。『閔尹子』「一字」…道茫茫而無知乎。心儻

儻而無羈乎。

【仰觀天文……俯循地理】『易經』「繫辭上」…仰以觀天文。俯以察地理。

【法雷】月婆首那訳『勝天王般若波羅蜜經』卷第六「現化品」…

能震法雷大龍為喻。普雨衆法譬之大雲。(大正八・七一九b) 玄奘訳『大般若經』卷第五七二第六会も同文(大正七・九五五c)【覺首】 ブッダのこと。

【象外之象】 晋、孫綽「遊天台山賦」…散以象外之說。暢以無生之篇。

【利見】 本稿77ページの語釈参照。

【孕育】 『蜀志』「後主劉禪伝」…孕育羣生者。君人之道也。

【七十二君】 本稿14ページの語釈参照。

【万八千歳】 本稿14ページの語釈参照。

【周星閏彩言符降誕之徵】 本稿38ページ、58ページの語釈参照。

【漢日流祥載叶通神之夢】 本稿37ページの語釈参照。

【玉毫】 本稿85ページの語釈参照。

【浮天】 未詳。『晋書』「天文志」…天在地外。水在天外。水浮天而載地者也。『宋書』「樂志」…淳波澄宿華漢浮天。『海賦』…激湍激澗浮天無岸。魏収詩「…喧林尚黃鳥浮天已白雲。楊師道詩」…落日驚濤上浮天駭浪長。『王勃梓州靈瑞寺浮圖碑』…神州拓地寰中分五嶽之図巨壑浮天海上權三山之秀。『李邕謝入朝表』…止水一盃忽聞朝海枯槎八月更得浮天。『許渾詩』…江村夜漲浮天水汎国秋生動地風。『蘇軾詩』…峯多巧障日江遠欲浮天。

【情塵】 情愛・情欲を塵垢にたとえたもの。北齊、王巾「頭陀寺碑文」…愛流成海。情塵成岳。

【巍巍乎……蕩蕩乎】 『論語』「泰伯」…大哉堯之爲君也。巍巍乎。唯天爲大。唯堯則之。蕩蕩乎。民無能名焉。

【蠢蠢】 騒ぎ乱れるさま。『左伝』「昭公二十四年」…今王室蠢蠢焉。吾小国懼矣。『杜預注』…蠢蠢。動擾貌。『雲笈七籤』卷第五六…蠢蠢陶陶。滔滔樂樂。不知天地大小。不知日月迴轉。可以八百一十年爲一大運耳。

【空花不実水月非堅】 『大般若經』卷第一「初分序品」…於諸法門勝解觀察。如幻如陽焰。如夢如水月。如響如空花。如像如光影。如變化事。(大正五・一c)

【白馬西來】 本稿85ページの語釈参照。

【世尊則隨類敷演衆生乃逐性開迷】 本稿84ページの五釈参照。

【澄安俊德接武於勝場】 「澄」は竺仏図澄(二三二―三四八)。「安」は釈道安(三一二―三八五)。『出三藏記集』卷第十五に伝あり。琳遠高人駢蹤於法宇。「琳」は法琳(五七二―六四〇)。「遠」は悟真寺慧遠(五九七―六四七)か。法琳は、『破邪論』二卷・『辯正論』八卷などを著わし護法の功績が著しかった。別伝あり。悟真寺慧遠は吉蔵の弟子。『弘贊法華伝』卷第三に伝あり。

II

〔訓読〕

頃ごろ属たま後周運を膺け、大いに魔風を扇い、遂に天下の招提をして咸く毀廢に従わしめ、寰中の法侶、並びに混じて編叱せ使む。嗟乎。閑寂を禪居にして、空しく冥坐の処を留め、荒涼を慧苑にして、復た経行の蹤無し。爰に開皇に泊びて、重ねて將に修建せんとするも、旋た大業に逢ひ、又分崩に遇ふ。鬼哭し神吟じ山鳴り海沸く。既に塗炭に遭ふ。寧ぞ伽藍有らんや。正法消湮し、邪見増長す。是に於いて人覺路に迷い、苦集の区に遭廻し、俗真宗を蔽い、蓋纏の内に羈絆せらる。

〔語釈〕

【招提】 cāturdeśa の音訳。寺院。

【閑寂】 しんとして物さびしく静かなこと。『齊書』「豫章文獻王

伝」…日用閑寂。雖無取於錙銖。歲功宏達。諒有寄於衡石。

【開皇】 隋文帝の年号。五八一―六〇〇年。

【大業】 隋煬帝の年号。六〇五―六一七年。

【鬼哭神吟】 「鬼哭神号」に同じか。元、楊暹『西遊記』第三本

第九出…則聽得鬼哭神号。休猜做三唱陽関出霜橋。

【山鳴海沸】 蘇軾「後赤壁賦」…劃然長嘯。草木震動。山鳴谷応。

風起水涌。

【塗炭】 『書經』「仲虺之民」…民墜塗炭。

III

〔訓読〕

我が大唐の天下を有つや、上は巢・燧を凌ぎ、俯きては羲・軒を視る。三聖光を重ね、万邦一統す。威は有截の如く、沢は無垠に被ぶ、坤絡を掩うに以て還淳せしめ、乾維を亘べて而も猷款せしむ。再び仏日を懸け、重ねて梵天を補ひ、龍宮八柱を将て安きを斉うし、鷲嶺五峯と共に峻きを争う。大いに釈教を弘むるは、諒に皇朝に属する者なり。

〔語釈〕

【巢燧】 有巢氏と燧人氏。有巢氏は、人居処の法を教え禽獸の

害を避けしめたとされる。燧人氏は、人に火をおこして食物を

煮炊きすることを教えたといわれる。『韓非子』「五蠹」…上古之

世。人民少而禽獸衆。人民不勝禽獸蟲蛇。有聖人作。構木為巢。以避羣害。而民悅之。使王天下。号曰有巢氏。

【義軒】伏義（庖犧・炮犧）氏と軒轅氏（黃帝）。伏義氏は、人に犠牲を飼つて食用にすることを教えたといわれる。軒轅氏は、曆算・音楽・文字など多くの文物制度を定めたといわれる。

【三聖】三人の聖人。孔子・釈迦・老子。適例未検。

【截】よく治められているさま。『詩經』「大雅・常武」…鋪敦淮濱。仍執醜虜。截彼淮浦。『毛伝』…截治也。

【无垠】辺際の無いこと。『楚辞』「遠遊」…道可受兮而不可伝。

其小無内兮其大無垠。晋、王該『日燭』…周太虚以遊眺。究滄蕩

而無垠。

【還淳】本来の状態に戻ること。『南齊書』「明帝紀」…永覽玄風。兢言集愧。思所以還淳改俗。反故移民。

【献款】帰順すること。唐、孫逖『送李補闕撰御史充河西節度判官詩』…西戎雖献款。上策恥和親。

【龍宮將八柱齊安】未詳。「八柱」は、仏滅後、諸国の王が仏舍利を八分してそれぞれ塔を建てたことを指すか。

【五峯】王舎城近辺にある五つの山。靈鷲山(Gijjhakūṭa)・広普山(Vepulla)・白善山(Paṇḍava)・負重山(Vehāra)・仙人掘山(Isigiri)。

IV

【訓読】

大福先寺翻經三藏法師義浄なる者は、范陽の人なり。俗姓は張氏。五代韓の後に相たりて、三台晋の前に仕う。朱紫輝を分かち、貂蟬彩を合す。高祖東齊の郡守為り。仁風扇を逐い、甘雨車に随う。化六條を闡き、政十部を行す。爰に祖及び父、俱に俗榮に駄き、一丘に放曠し、三径に逍遙す。和を含み素を体とし、性を養い神を恬んず。芝秀を東山に摘み、清流を南澗に挹む。謂ふ可し、丹嶠を幽尋し、白雲に棲偃す、と。皐鶴是に於て声を呑み、場駒之を以て影を繫ぐ。

【語釈】

【韓之後】秦・漢

【晋之前】漢・魏

【朱紫】 高位高官。

【貂蟬】 高位の人の冠の飾り。転じて高位高官。

【仁風逐扇】 「仁風」は、仁徳を下々に及ぼすこと。また、扇の異名に「仁風」がある。晋、庾貞『晋武帝華林園集詩』…仁風潜扇。

【甘雨隨車】 循吏の徳沢が人民に及ぶ喩。『後漢書』「鄭弘伝、政有仁惠民称蘇息、注」…謝承書曰、弘消息繇賦、政不煩苛、行春天旱、隨車致雨。

【六條】 ① 漢武帝の元封五年、刺史を置いて富豪及び二千石を察せしめた六ヶ条の事項。一、豪強怙勢、二、侵漁百姓、三、刑賞猥濫、四、阿私蔽賢、五、子弟請託、六、詬法納賕。

② 晋代、諸部の中正をして賢才を挙げしめた六ヶ条。一、忠恪匪躬、二、孝敬礼を尽くす、三、兄弟に友、四、絜勞謙、五、信義復むべし、六、学以て己を修める。

③ 北周の蘇綽の六条詔書。心を清める、教化を教くする、地利を尽くす、賢良を擢んで、獄訟を恤む、賦役を均しくする。

【十部】 未詳。

【放曠】 豪放にして曠達であり、礼俗にこだわらないさま。『晋書』「桓石秀伝」…性放曠。常弋釣林沢。晋、潘岳『秋興賦』…逍遙乎山水之阿。放曠乎人間之世。

【一丘】 「一丘一壑」に同じ。一つの丘・一つの谷でも、満足すれば楽しめるということで、身を俗外に置いて風流を楽しむこ

と。『漢書』「鉞伝上」…漁釣於一壑。則万物不奸其志。栖遲於一丘。則天下不易其樂。『世説新語』「品藻」…明帝問謝鯤君自謂何如庾亮。答曰。端委廟堂。使百寮準則。臣不如亮。一丘一壑。自謂過之。

【三径】 隠者の住まいの庭園。漢の蔣詡が庭に三つの小道を造り、松・菊・竹を植えた故事に基づく。晋、陶潜『歸去來辭』…三径就荒、松菊猶存。

【東山】 晋の謝安が隠居した山。会稽の東山。

【南澗】 南にある谷川。唐、盧照鄰『田家詩』…南澗泉初冽、東籬菊正芳。

【幽尋】 奥深いところにたづねる。唐、陸龜蒙『掇野蔬詩』…野園烟裏自幽尋。

【丹嶠】 あかい山。唐、王勃『靈瑞寺浮図碑』…揆利玄嶺、図基丹嶠。

【棲偃】 隠居する。唐、張文琮『賦橋』…別有臨濠上、棲偃獨觀魚。

【皐鶴】 鶴は深い沢で鳴いても、その声は遠く天にまで達する。転じて、君子は世俗に深く隠れていてもその偉大さが知れ渡るたとえ。『詩経』「小雅、鶴鳴」…鶴鳴九皐聲聞天。

【繫影】 「繫」は、つなぐ、馬足を縛る。『詩経』「周頌、有客」…言授之繫、以繫其馬。「箋」…繫、絆也。

V

〔訓読〕

法師幼くして明晤に挺んで、夙に聰敏なることを彰す。纔かに弁李の歳を踰ゆるに、心出家を樂い、甫めて遊洛の年を過ぐるに、志西国を尋ねんとす。業経史に該り、学古今を洞かにす。三歳の玄枢を惣べ、一乗の奥義を明らかにせり。既にして閑居習静し、息慮安禅す。彼の山林に託して、茲の塵累を遠ざく。

三十有七にして、方めて雅懷を遂げんとす。咸亨二年（六七一年）を以て行きて広府に至る。発蹤の結契、数は乃ち十人なるも、鼓棹昇航するに、惟だ一己のみ存す。南溟を巡るに以て遐逝し、西域を指すに以て長駟す。巖岫の千重を歴て、波濤の万里を凌ぐ。漸にして天竺に届き、次いで王城に至る。仏『法華』を説きたまいし靈峯尚お在り、如来成道したまいし聖躅仍お留む。吠舍城中には猷蓋の蹤泯びず、給孤園内には布金の地猶お存す。三道宝階居然として目のあたりを覩、八大靈塔邈として親しく観る。経る所三十余国、凡そ二十余載を歴たり。菩提樹下に、屢しば攀折し以て淹留し、阿耨池辺に、幾濯纓して澡鑒せり。

法師慈悲を室と作し、忍辱を衣と為す。長齋すれば則ち一食自資し、長坐すれば則ち六時無倦たり。

〔語釈〕

【弁李之歳】 用例未検。『宋高僧伝』に依るに、七、八歳のことか。『義浄伝』『宋高僧伝』卷第一…髻鬘之時辭親落髮。（大正五

〇・七一〇b）『髻鬘』は垂れ髪をして齒が抜け変わる頃。七、八歳。

【遊洛之年】 用例未検。『宋高僧伝』に依るに、十五歳のことか。

「義浄伝』『宋高僧伝』卷第一…年十有五便萌其志。欲遊西域。（大正五〇・七一〇b）

【雅懷】 正しいところもち。風雅な心情。南朝宋、劉義慶『世説新語』『容止』…形貌既偉、雅懷有概。

【王城】 王舍城（Rājagṛha）。竹林精舎や靈鷲山があり、多くの

大乘仏典の説法の間となった。

【仏説法華靈峯】耆闍崛山(Gṛdhakūṭa)。靈鷲山。『法華経』「序品」：如是我聞。一時仏住王舍城耆闍崛山中。与大比丘衆万二千人俱。(大正九・一c)

【吠舍城】Vaiśālīの音写。毘舍離。

【給孤園内布金之地】舍衛国の祇樹給孤独園(Jetavana Anāthapiṇḍikārama)。吳・支謙訳「仏説字経抄」：聞如是。一時仏在舍衛国。太子名祇(Jeta)。有園田八十頃。去城不遠。其地平正。多衆果樹。処処皆有流泉浴池。其池清淨。無有蚊蜂蚊虻蠅蚤。居士須達(Sudatta)。身奉事仏。受持五戒。不殺不盜不淫不欺不飲酒。見諦溝港。常好布施。賑救貧窮。人呼為給孤独(Anāthapiṇḍika)氏。須達欲為仏起精舍。周遍行池。唯祇園好。因從請買。太子祇言。能以黃金布池。令間無空者。便持相与。須達曰諾。聽隨買數。祇曰我戲言耳。訟之紛紛。国老諫曰。已許價決。不宜復悔。遂聽与之。須達默念何藏金足。祇謂其悔嫌貴自止。曰不貴也。自念当出何藏金耳。即時使人象負金出。隨集布地。須臾滿四十頃。祇感念仏必有大道故使斯人輕宝乃爾。教齊是止。勿復出金。園地属卿。我自欲以樹木獻仏。因相可這便立精舍已。各上仏。仏与千二百五十沙門。俱止其中。是故名祇樹給孤独園也。(大正一七・七二九a)

【三道宝階】釈尊が母・摩耶のために忉利天に昇って説法し終って下天せられようとする時、帝釈天が命じて化作せしめた金剛瑠璃の三道の階梯。『維摩経』巻下「見阿閼仏品」：於是維摩

詰心念。吾當不起于座接妙喜国。鉄围山川溪谷江河。大海泉源須弥諸山。及日月星宿。天龍鬼神梵天等宮。并諸菩薩声聞之衆。城邑聚落男女大小。乃至無動如來及菩提樹諸妙蓮華。能於十方作仏事者。三道宝階從閼浮提至忉利天以此宝階諸天來下。悉為礼敬無動如來聽受経法。閼浮提人。亦登其階。上昇忉利見彼諸天。妙喜世界成就如是無量功德上至阿迦膩吒天。下至水際。以右手斷取如陶家輪。入此世界猶持華鬘示一切衆。(大正一四・五五五b)

【八大靈塔】八相成道の説に擬して八ヶ所に建立せられた大塔。『望月』(四二二〇b)は「西暦七八世紀頃には主として此の八大靈塔を巡礼するの風行はれたものと云ふべし」と述べる。

【阿耨池】阿耨達(Anavatapta)池。無熱惱と訳す。閼浮洲四大河の発源地とされるもの。大雪山の北にあり、菩薩が龍王と化して口より清冷水を出しているとされる。玄奘訳『俱舍論』巻第十一「大雪山北有香醉山。雪北香南有大池水。名無熱惱。出四大河。(大正二九・五八a)『西域記』巻第一「瞻部洲之中地者。阿那婆答多(Anavatapta)池也」[唐言無熱惱。旧曰阿耨達池。訛也]。在香山之南大雪山之北。周八百里矣。金銀瑠璃頗胝飾其岸焉。金沙弥漫。清波皎鏡。八地菩薩以願力故化為龍王。於中潜宅。出清冷水。給瞻部洲。(大正五一・八六九b)『濯纓』「濯纓濯足」水が清ければ冠の紐を洗い、水が濁っていれば足を洗う。時勢に応じて進退する譬え。また、世俗を超越すること。李陵『与蘇武詩』：臨河濯長纓、念子悵悠悠。『孟子』

「離婁上」…滄浪之水濁兮、可以濯我足。

【慈悲作室忍辱為衣】『法華經』「法師品」…藥王。若有善男子善

女人。如來滅後。欲為四衆說是法華經者。云何應說。是善男子

善女人。入如來室。著如來衣。坐如來座。爾乃應為四衆廣說斯

經。如來室者。一切衆生中大慈悲心是。如來衣者。柔和忍辱心

是。…若人說此經。應入如來室。著於如來衣。而坐如來座。

如衆無所畏。廣為分別說。大慈悲為室。柔和忍辱衣。(大正九・

三一c(三二a))

VI

【訓読】

又古來翻譯の者、先に梵文を出だして、後に漢訳に資し、詞を撫うに方めに學者に憑き、義を銓ずるに別して僧徒に稟けざる莫し。今茲の法師は是くの如くならず。既に五天竺語を閑にし、又二諦幽宗を詳らかにせり。訳義綴文、感く己に由て出だし、措詞定理、傍らに仮りて求むるには匪ず。漢代の摩騰を超え、秦年の羅什を跨ゆ。

【語釈】

【撫詞】底本「撫詞」に作る。磧砂・全唐文・元版によって、「撫詞」に改む。いずれも用例未検。「撫」は、ひろう、ひろいと。 「撫」は、おどる、ふみつける。

【摩騰】迦葉摩騰のこと。最初の漢訳經典『四十二章經』を訳したとされる。

【羅什】鳩摩羅什のこと。

VII

【訓読】

将らす所の梵本は、経僅んど四百部合して五十万頌、金剛座真容一鋪、舍利三百粒なり。証聖元年(六九五五年)夏五月

を以て方て都に届る。則天大聖皇帝震に出て期を膺け、乾に乗じて紀を握る。紹隆を務と為し、弘済を心と為す。爰に百寮に命じて、兼ねて四衆を整えしむ。虹幡日を誓い、鳳吹雲を遏め、香六銖を散じ、花五色を飄よわす。商商済済、焯焯煌煌たり。上東の門に迎え、授記の寺に置く。于闐三藏、及び大福先寺主沙門復礼・西崇福寺主法藏等と共に『華嚴經』を翻す。

【語釈】

【過雲】 空ゆく雲をもとめるほどの勝れたさま。『列子』「湯問」…薛譚学謳於秦青、未窮青之技、自謂尽之、遂辭帰。秦青弗止。餞於郊衢、撫節悲歌、声振林木、響遏行雲。

【六銖】 六銖衣のこと。『妙法蓮華經』「藥王菩薩本事品」…又雨海此岸栴檀之香此香六銖。価直娑婆世界。以供養仏。(大正九五三b)

【商商】 高いさま。また、鳳凰の形の形容。

【済済】 多く盛んなさま。威儀の立派なさま。

【焯焯煌煌】 「焯焯」は、ひかりかがやくさま。

【上東之門】 洛陽の城門の名。

【授記之寺】 洛陽の仏授記寺。『唐兩京城坊攷』卷第五「外郭城」…中曰建春門「隋曰建陽、唐初改。薛懷義於建春門内敬愛寺、別造殿宇、改名仏授記寺。見旧書外戚伝」『旧唐書』卷第一八三「外戚伝、薛懷義伝」…薛懷義者、京兆鄠県人、本姓馮、名小宝。……垂拱初、……、又於建春門内敬愛寺、別造殿宇、改名仏授記寺。

【于闐三藏】 ㄱㄱㄱは実叉難陀(Sikṣānanda 六五二～七一〇)

のこと。于闐国の出身。則天武后が『華嚴經』の梵本と訳人を求めた折りに、經を唐に将来した。『開元釈經錄』卷第九、『宋高僧伝』卷第二に伝あり。

【大福先寺】 福先寺。本稿30ページ、46ページの語釈参照。『唐会要』卷第四十八「寺」…福先寺。遊芸坊。武太后母楊氏宅。上元二(六七五)年、立為太原寺。垂拱三(六八七)年二月、改為魏国寺。天授二年(六九三)、改為福先寺。

【沙門復礼】 生没年未詳。『十門弁惑論』二卷を著わした。『開元釈經錄』卷第九に伝あり。有部律の翻譯では筆受証文を務める。詳しくは、一色順心「復礼法師の伝記とその周辺」『仏教学セミナー』三九。『開元釈經錄』卷第九「義浄伝」…沙門波崙復礼・慧表・智積等筆受証文。

【西崇福寺】 崇福寺。『兩京新記』卷第三「休祥坊」…東北隅、崇福寺「本開府儀同三司・觀公楊恭宅。咸亨元(六七〇)年、以武后外氏故宅立」『唐兩京城坊攷』卷第四「休祥坊」…東北隅、崇福寺「本侍中・觀國公楊恭仁宅。咸亨元(六七〇)年、以武

后外氏故宅、立為太原寺。垂拱三（六八七）年、改為魏國寺。

載初元（六九〇）年、又改為崇福寺。寺額、武后飛白書。……」

【法藏】賢首法藏。六四三—七一。華嚴宗の第三祖で、華嚴教學の大成者。『宋高僧伝』卷第五（大正五〇・七三二a—b）に伝あり。有部律の翻訳では証義を務める。『開元釈教録』卷第九「義浄伝」・沙門法宝・法藏・德感・勝莊・神英・仁亮・大儀・慈訓等証義。（大正五五・五六八c）『唐大薦福寺故主翻經大德法藏和尚伝』・暨女皇革命變唐為周。遣使往于闐国求索梵本。仍

VIII

【訓読】

後、大福先寺に至りて、天竺三藏宝思末多、及び授記寺主惠表・沙門勝莊・慈訓等と『根本部律』を訳す。其の大徳等四禪に凝慮し、六度に冥懷せざる莫し。法鏡を心台に懸け、戒珠を性海に朗らかにす。詞林秀に挺んで、覺樹を将て芳を連ね、慧炬輝を揚げ、桂輪を澄まして影を合す。渾金璞玉、諒に其の人に属す。誠に梵宇の棟梁にして、寔に法門の龍象たり。已に諸雜經律二百余卷を翻じ、繕写云に畢る。尋いで並びに進内せり。其の余の戒律諸論は方に後詮を俟つ。五篇の教俱に明らかにして、八法の因備さに曉らかなり。鵝珠護を尚び、蟲命傷くる無し。浮囊必ず虧けざるを取り、油鉢終に覆えること靡きを期す。聖教の綱紀を崇び、含生の耳目を啓かん。

【語釈】

【後至大福先寺】經錄によると、義浄が律を翻訳したのは、そのほとんどが大薦福寺においてであり、福先寺において翻訳した

迎実叉難陀「此言喜学」訳在神都。作起乎証聖二年。功成乎聖歷昇歲。計益九千偈。勒成八十卷。『通旧翻合四万五千偈』命藏筆受。復礼綴文。梵僧戰陀・提婆二人訳語。仍詔唐三藏義浄・海東法将円測・江陵禪師弘景・及諸大德神英法宝而下審覆証義。（大正五〇・二八二a）『宋高僧伝』卷第五「法藏伝」・至天后朝伝訳首登其数。実叉難陀齋華嚴梵夾至同義浄・復礼訳出新經。又於義浄訳場与勝莊大儀証義。（大正五〇・七三二a）

と明確に伝えられるものは見出せない。『根本説一切有部毘奈耶』等を訳したとされる西明寺と大薦福寺とは坊が離れている。

【華嚴經】 八十卷本。これ以前に、東晋の仏駄跋陀羅によって六十卷本が訳されていた。

【根本部律】 根本説一切有部の律。『開元釈経録』巻第九（大正五五・五六七c～五六八a）に依って義浄が翻訳した律部を訳出年次に従って列挙すれば次の通り。『根本薩婆多部律撰』十四卷「尊者勝友集。或十四卷。久視元（七〇〇）年十二月廿三日、於東都大薦福寺訳」『根本説一切有部毘奈耶』五十卷「長安三（七〇三）年十月四日、於西明寺訳。沙門波崙・慧表筆受」『根本説一切有部尼陀那目得迦』十卷「或八卷。長安三（七〇三）年十月四日、於西明寺訳」『根本説一切有部百一羯磨』十卷「長安三（七〇三）年十月四日、於西明寺訳」『根本説一切有部苾芻尼毘奈耶』二十卷「景龍四（七一〇）年於大薦福寺翻経院訳」『根本説一切有部毘奈耶雜事』四十卷「景龍四（七一〇）年於大薦福寺翻経院訳」『根本説一切有部戒経』一卷「景龍四（七一〇）年於大薦福寺翻経院訳」『根本説一切有部苾芻尼戒経』一卷「景龍四（七一〇）年於大薦福寺翻経院訳」『根本説一切有部毘奈耶頌』五卷（現行三卷）「尊者毘舍伽造。景龍四（七一〇）年於大薦福寺翻経院訳。先在西域那爛陀寺訳出。還都刪正。景龍奏行」『根本説一切有部略毘奈耶雜事撰頌』一卷「景龍四（七一〇）年於大薦福寺翻経院訳」『根本説一切有部毘奈耶尼陀那目得迦撰頌』一卷「景龍四（七一〇）年於大薦福寺翻経院訳」また、円照『貞元新定釈教目録』巻第十三には、次の七部を挙げる（大正五五・八六八c）。『根本説一切有部毘奈耶藥事』二

十卷（現行十八卷）『根本説一切有部毘奈耶破僧事』二十卷「内欠二卷」『根本説一切有部毘奈耶出家事』五卷（現行四卷）「内欠一卷」『根本説一切有部毘奈耶安居事』一卷『根本説一切有部毘奈耶隨意事』一卷『根本説一切有部毘奈耶皮革事』二卷『根本説一切有部毘奈耶羯恥那衣事』一卷

【天竺三藏宝思末多】 未詳。『開元釈経録』巻第九には、有部律の翻訳に北印度沙門阿彌真那（～七二一、宝思惟 Manjīta）が関与したと伝える。或いは同一人物とも考えられる。阿彌真那には、『開元釈経録』巻第九・『宋高僧伝』巻第三に伝がある。【授記寺】 洛陽の仏授記寺のことか。

【惠表】 生没年未詳。義浄訳『金光明最勝王経』では筆受を務め、有部律の翻訳では筆受証文を務める。『開元釈教録』巻第九「義浄伝」・沙門波崙・復礼・慧表・智積等筆受証文。（大正五五・五六八c）

【沙門勝莊】 生没年未詳。『梵網経述記』二巻が現存。他に、永超『東域伝燈目録』には『最勝王経疏（述記）』八巻（大正五五・一一五三c）・『雜集論疏（述記）』十二巻（大正五五・一一五七a）・『成唯識論決』三巻（大正五五・一一五八b）・『因明正理門論述記』二巻（大正五五・一一五九c）を挙げ、また『義天録』巻第二には『梵網経述記』三巻を挙げる（大正五五・一一七三b）が、いずれも伝わらない。有部律の翻訳では証義を務める。『開元釈教録』巻第九「義浄伝」・沙門法宝・法藏・徳感・勝莊・神英・仁亮・大儀・慈訓等証義。（大正五五・五六八c）

【慈訓】 生没年未詳。『大周刊定衆経目録』卷第十五に「大福光寺校経目僧」として名前が見える(大正五五・四七五b)。永超『東域伝燈目録』には『梵網経上巻抄記』一卷を挙げる(大正五五・一一五五a)が伝わらない。有部律の翻訳では証義を務める。『開元釈教録』卷第九「義浄伝」・沙門法宝・法藏・德感・勝莊・神英・仁亮・大儀・慈訓等証義。(大正五五・五六八c) 賞樹 菩提樹のことか。

【桂輪】 月のこと。唐中宗、『三藏聖教序』・澄桂輪而含影。

【渾金璞玉】 まだ煉っていない金とまだ磨いていない玉。質朴で飾らぬものの譬え。南朝梁、元帝『為東宮荐石門侯啓』・點漆凝脂、事逾衛玠。渾金璞玉、才足山壽。

【已翻諸経律二百余巻】 『開元釈教録』卷第九に依ると、義浄が翻訳した三藏は六一部二三九巻である。『開元釈教録』卷第九「義浄伝」・已上二十部一百一十五巻。……成均太学助教許観監護繕写進内。天后製新翻聖教序令標経首。(大正五五・五六八c)

【五篇】 具足戒に説く条目を、犯した場合の罪の重さに応じて五つに類別したもの。①波羅夷、僧尼の資格を失い教団を追放さ

れる。②僧残、一定期間僧尼としての権利が剝奪される。③波逸提、布薩の時に僧中で懺悔しなければならない。④波羅提提舍尼、一人に対して告白懺悔しなければならない。⑤突吉羅、故意であれば一人の前で告白懺悔しなければならない、故意でなければ自己の心中で懺悔しなければならない。

【八法】 戒律の八種。

【鵝珠尚護】 鳩摩羅什訳『大莊嚴論経』卷第一一第六章(大正四・三一九a~三二二a)の「禁戒を護持して寧ろ身命を捨つるも終に毀犯せざれ」ということの例として示される説話に依る。

【蟲命無傷】 未詳。

【浮囊】 浮き袋。菩薩の戒律を持つことに喩える。『涅槃経』卷第十一「聖行品」・菩薩護持禁戒、亦復如是。如彼渡人護惜浮囊。菩薩如是守護戒。(大正一一・六七四a)

【油鉢】 菩薩の正念を持することに喩える。『大智度論』卷第十五・菩薩欲脱生老病死。欲度脱衆生。常応精進一心不放逸。如人擎油鉢行大衆中。(大正二五・一七三c)

【含生】 衆生のこと。

IX

【訓読】

伏して願うらくは、上には先聖を資けて長く七廟の基を隆し、下には微躬に逮びて恒に九天の命を佐けんことを。懷生

を寿域に遷し、薄俗を淳源に致さん。歳稔り時和し、遠き安らかに迓き肅らかならんことを。顧以みるに、万機は務め惣べ、四海事殷んなり。爰に乙夜の余に憑き、式て弥天の徳を賛ず。課虚扣寂し、聊か題序して云う。

〔語釈〕

【懐生】 生気を懐くもの。生物。

【万機】 皇帝の政務。

【乙夜】 夜十時以降。皇帝の政務が終った後の読書時間。

【課虚扣寂】 文章をつくること。後には特に詩をつくることを指す。晋、陸机『文賦』…課虚無以責有、叩寂寞而求音。梁、陸顯

「詩」…弼政非責実求名已課虚

（采翠 晃）

九 大唐大薦福寺故大德康藏法師之碑

〔釋文〕

夫得無障礙眼者身為佛身。得無恐怖心者法為法。過此已往行不圓滿功為未足。遠生死則摘之以說空。開冥途則勞之以救苦。與大比丘衆應如是住不可思議。

法師俗姓康氏。諱法藏。累代相承為康居國丞相。祖自康居來朝。父謚皇朝贈左侍中。法師是如來得目有辟支一毛。終年以勵堅貞。竭日而修戒行。年甫十六煉一指於阿育王舍利塔前以伸供養。此後更遊太白雅挹重玄。聞雲華寺儼法師講華嚴經投為上足。瀉水置瓶之受納。以乳投水之因緣。名播招提譽流宸極。屬榮國夫人奄捐館舍未易齋衰。則天聖后廣樹福田

祕書少監閻朝隱撰

大開講座。法師策名宮禁落髮道場住太原寺。

證聖年中奉敕與于闐國三藏實叉難陀譯華嚴經。神龍年中又與于闐三藏於林光殿譯大寶積經。惟聖之所歸依。惟皇之所迴向。爰降綸旨爲菩薩戒師。太上皇脫屣萬機褰衣四海亦受菩薩戒。因行菩薩心。法師冀掃其衣禪悅其食。前後講華嚴經三十餘遍。楞伽・密嚴經・起信論・菩薩戒經・凡十部爲之義疏闡其源流。如千燈光明自不相隔闕。如一音演說各隨類信解。其初以力入道也。十大牛不如一青牛。其終以力濟時也。十香象不如一赤象。於無量劫作無量緣。伽藍許之爲法橋者¹俗推之於法炬²。豈謂法橋斷而法炬滅。同聲者椎胸叫喚。異類者舉身毛豎。先天元年歲次壬子十一月十四日終於西京大薦福寺。春秋七十。其年十一月二十四日葬於神和原華嚴寺南。

帝念若驚聖情如失。誥曰中使故僧法藏德業自資虛明契理。辨才韞識了覺融心。廣開喻筏之門備闡傳燈之教。隨緣示應乘化斯盡法眞歸寂。雖證無生之空朝序節終。宜有褒賢之命。可贈鴻臚贈絹一千二百疋。葬事准僧例。餘皆官供。妃主公主等禮懺展轉施捨勤祈所有墳塔飾終。威儀導引莫不備具。弟子等忍其死傳其教。合掌頂禮嗚咽而不自勝。其辭曰
西方淨域離俗塵 千葉蓮華如車輪 不知何時成佛身

〔校勘〕

1 者¹道 (元祿版本)
2 炬²炬 (")

3 贈³贈 (")
4 墳⁴墳 (")

I

〔訓読〕

夫れ、障礙無きの眼を得るは、身を仏身と爲し、恐怖無きの心を得るは、法を仏法と爲す。此を過ぎて已往は、行、円

満ならず、功、未だ足らずと為す。生死を遠ざくれば則ち之を摘みて以て空を説き、冥途を開けば則ち之を勞して以て苦を救う。大比丘衆と心にはくの如く不可思議に住すべし。

〔語釈〕

【大薦福寺】 長安開化坊（東一一）にあった。文明元年（六八四）高宗の崩をきっかけに大薦福寺が立てられた。後、天授三年（六九〇）に大薦福寺と改められた。神龍年間以降盛んに仏典の翻訳がなされた。法蔵は景龍二年（七〇八）実叉難陀と共に大薦福寺に入ったが、まもなく実叉難陀が没した（景雲元年、七一〇年）ため、義浄の翻訳を助けることになったものと思われる。なお、本研究会の流れから言えば、昨年の研究会で「唐大薦福寺故大德思恆律師誌文並序」（金石萃編七七）を読んだ。

【閻朝隱】 新唐書二〇二、旧唐書一九〇、「唐代研究のしおり」

II

〔訓読〕

法師は俗姓名康氏、諱は法蔵。累代相い承けて、康居国の丞相と為る。祖、康居より来朝す。父、諡は皇朝に左侍中を贈らる。法師は是れ如来の得目、辟支の一毛有り。終年以て堅貞を励み、竭日して戒行を修む。年、甫めて十六にして一指を阿育王の舍利塔の前に煉し、以て供養を伸ぶ。此の後更に太白に遊びて雅に重玄を挹す。雲華寺の儼法師の華嚴經を講ずるを聞きて投じて上足と為る。水を瀉ぎ瓶を置くの受納、乳を以て水に投ずるの因縁あり。名は招提に播き、

には「晴虹賦」（全唐文二〇七）、「亳州録事参军軍上騎都尉馮本紀孝碑」（全唐文二〇七）を挙げる。なお秘書少監は従四品上にあたる。

【不可思議】 仏智。般若波羅蜜の内容を言う。例えば『維摩經』卷下に、「是經名為維摩詰所説、亦名不可思議解脱法門。」（大正一四・五五七b）

【已往】 それよりあとの意。陶潜『歸去來辭』「悟已往之不諫知來者之可追」

誉は宸極に流る。属、荣国夫人の奄^にかに館舎に捐て、未だ齊^シ衰^{サイ}を易^イえず。則天聖后は広く福田を樹て、大いに講座を開く。法師は宮禁に策名せられ、道場に落髪し、太原寺に住す。

【語釈】

【康居】 中国の漢代から三国時代の魏の時代にみえる西アジアの一國、バルハシ湖からカスピ海に至る地域を領土（現在のカザフスタンからウズベキスタンにかけての地域）としていた。しかし法蔵の祖父の時代とは年代的に重ならず、康居と康国（隋唐代のサマルカンド）とを混同したものと考えられる。

【康謐】 不詳

【得目】 用例不詳

【一毛】 極めて軽いもの、僅かなものの喩え。『淮南子』「見驥毛不知善走」。

【終年】 一年中、又は一生涯。『莊子』則陽「其禾繁以滋。予終年厭飡」。

【竭日】 日を尽す。一日中、用例未見。

【太白】 陝西省郡県の南、汧県の界に接する山。太一山、太壹山とも言う。

【雲華寺嚴法師】 『長安志』卷九に「大歴初、僧嚴講經、天雨花、至地咫尺而滅。夜有光燭室、勅改為靈花寺。嚴即康蔵之師也」。とあるが「大歴」では年代的に相応しない。『長安志』の誤りか。まず、法蔵の師であった智儼は、法蔵撰の『華嚴經伝記』

の記述に随って総章元年（六八八）十月二十九日であったと考えられる（大正五一・一六三c）ので、大歴の初（七六六）とは百年あまりの隔りがある。また、雲華寺（長安常楽坊にあったと考えられている）と靈花寺（長安志）は同じなのか。また靈化寺（普寧坊）と混同されているのではないか。などの疑問が残る。智儼の伝記資料からは、智儼と雲華寺の関係は出て来ず、この碑文が根拠となつて智儼を「雲華尊者」と呼んできた為に、大きな問題である。

【荣国夫人】 楊氏、武士^シ驍^{リョウ}の妻、則天武后の生母。旧唐書一八三、

【指館】 館舎をすてること↓死すること『史記』范雎傳「君卒然捐館舎」。

【齊衰】 熟摩布で造り、旁及び下辺を緝せる喪服。

【策名】 仕官すること、『後漢書』蔡邕伝「吾策名漢室可事二姓哉」。

【太原寺】 後の西崇福寺のこと。本稿Ⅲページ語釈参照。ちなみに荣国夫人の卒年は旧唐書卷一八三に「咸亨二年荣国夫人卒」とあり、武后が太原寺を建てた年の翌年である。

III

〔訓読〕

証聖年中に勅を奉じて于闐国三藏実叉難陀と華嚴經を訳す。神龍年中、又于闐三藏と林光殿に於いて大宝積經を訳す。惟れ聖の帰依する所、惟れ皇の迴向する所なり。爰に綸旨を降して菩薩戒師と為す。太上皇は万機を脱屣し、四海に褰衣して亦菩薩戒を受く。因りて菩薩の心を行ず。法師は糞掃をば、其れ衣とし、禅悦をば其れ食とす。前後して華嚴經を講ずること三十余遍なり。楞伽・密嚴經・起信論・菩薩戒經の凡そ十部、之の義疏を為し、其の源流を聞す。千燈の光明自ら相い隔闕せざるが如く、一音演説して各の類に随いて信解するが如し。其の初め力を以て道に入れんとするや十の大牛は一青牛に如かず。其の終り、力を以て時を済わんとするや十の香象は一赤象に如かず。無量劫に於て無量の縁を作さにとす。伽藍、之を法橋と為すを許し、道俗、之を法炬に推すも、豈に法橋断じ法炬滅すと謂わんや。同声の者は胸を椎ちて叫喚し、異類の者も、身を挙げて毛豎つ。先天元年歲次壬子十一月十四日、西京の大薦福寺に於て終す。春秋七十なり。其の年の十一月二十四日、神和原の華嚴寺の南に葬す。

〔語釈〕

【証聖年中】 実叉難陀 (Śikṣānanda, 652-710) の「八十卷華嚴經」訳経は、開元録卷第八(大正五五・五六五c)の記述に随って、証聖元年三月十四日から、聖暦二年にかけて洛陽で行なわれたことが知られる。同訳場に菩提流志・義浄・復礼・法蔵らがいたことは本稿Bページの語釈「法蔵」参照。その他にも円測・勝莊・法宝・神英、等も関係していたようである。

【神龍年中】 この記述には大いに疑問がある。開元録等によれば、実叉難陀は、于闐の母親が老衰したために、長安四年(七〇四)から、景龍二年(七〇八)までの間于闐に帰省したことが知られる。神龍年中はこの間であるので法蔵が実叉難陀と訳経することはできない。また実叉難陀は、大宝積經の第十五会「文殊師利授記經」を翻訳しているが、久視元年(七〇〇)か

ら長安四年（七〇四）までの間であったと考えられる。また神龍年間には菩提流志が大々的に大宝積經を訳しはじめた年（神龍二年七〇六）であることから、ここでは菩提流志と実叉難陀を混同しているものと思われる。

【太上皇】 皇帝の父の尊号、ここでは睿宗を指す。

【万機】 皇帝の政務

【脱屣】 草履をぬぐこと↓惜し気もなく捨てること。『漢書』郊祁志「吾視妻子如脱屣耳。」

【褰衣】 衣の裾をかがげる↓身を低くして拜趨すること（摺衣、「釈教文選」P三二五）（詩邶風、匏有苦葉、淺則揭伝）掲、褰衣也。

【楞伽】 現在存在する法蔵の著書は、ほとんどが華嚴經に関するものであるが、以下のものがそれに属さない。入楞伽心玄義（大正三九）、大乘密教經疏（統蔵三四）、大乘起信論義記、大乘起信論義記別記（いずれも大正四四）、梵網經菩薩戒本疏（大正四〇）、般若波羅密多心經畧疏（大正四〇）、十二門論宗教義記（大正四二）、大乘法界無差別論疏（大正四四）

また、華嚴經に関するものは十六部確認できる。ここから考えて本文中の「凡そ十部」はどのようなことを指しているのか。

【千燈光明】

【一音演説】 『維摩經』 仏国品「仏以一音演説法衆生随類各得

解」（大正一四・五三八a）

【十大牛】 『涅槃經』 現病品「復次世尊。世有病者四大増損。互不調適羸瘦乏極。是故不能随意坐起臥著床褥。如来四大無不和適。身力具足亦無羸損。世尊。如十小牛力不如一大牛力。十

大牛力不如一青牛力。十青牛力不如一凡象力。十凡象力不如一野象力。十野象力不如一二牙象力。十二牙象力不如一四牙象力。

十四牙象力不如雪山一白象力。十雪山白象力不如一香象力。十香象力不如一青象力。十青象力不如一黄象力。十黄象力不如一赤象力。十赤象力不如一白象力。十白象力不如一山象力。十山

象力不如一優鉢羅象力。十優鉢羅象力不如一波頭摩象力。十波頭摩象力不如一拘物頭象力。十拘物頭象力不如一分陀利象力。

十分陀利象力不如人中一力士力。十人中力不如一鉢健提力。十鉢健提力不如一八臂那羅延力。十那羅延力不如一十住菩薩一節

之力。一切凡夫身中諸節節不相到。人中力士節頭相到。鉢健提身諸節相接。那羅延身節頭相拘。十住菩薩諸節骨解蟠龍相結。

是故菩薩其力最大。」（南本、大正一二・六七〇b c）

【法橋】 仏法が人を生死の大河より渡すこと。『華嚴經』 淨行品「興造法橋渡人不休」

【法炬】 仏法がよく物を照すことを火炬にたとえる。『大集經』 五六、「法炬富散滅。」

【伽藍】 saṅghārāma の音写、仏道修行のところ、精舎。

VI

〔訓読〕

帝念は驚くが若く、聖情は失うが如し。誥に曰く、中使、故僧法藏は徳業自ら資け、虚明にして理に契う。弁才は識を韞め、了覚は心に融ず。広く喩筏の門を開き、備さに伝燈の教を闡す。縁に随いて応を示し、化に乗じて斯に尽く。法真、寂に帰して無生の空を証すと雖も、朝序・飾終には宜しく褒賢の命有るべし。鴻臚卿を贈るべし、と。絹一千二百疋を賻り、葬事は僧例に准じ、余は皆官より供す。妃主公主等は礼饑し展転して施捨勤祈す。所有ゆる墳塔、飾終、威儀、導引は備具せざる無し。弟子等は其の死を忍び、其の教を伝う。合掌頂礼して嗚咽して自ら勝えず。其の辞に曰く、西方の浄域は俗塵を離れ、千葉の蓮華は車輪の如く、何れの時にか仏身を成ずるやを知らず、と。

〔語釈〕

【誥】 上より下に告げること。

【中使】 内密の敕使 沈約、『齊故安陸昭王碑文』の注「天子私使曰中使。」

【喩筏の門】 仏陀の教えが迷いの人生を渡っていくためのものであることを筏にたとえたもの。『中阿含経』五十四に「我為汝等長夜説筏喩法、欲令棄捨不欲令受故。」（大正一、七六七b）

【傳燈の教】 闇を照す燈を他に傳えること。『維摩経』菩薩品「無尽燈者、譬如一燈然百千燈、冥者皆明、明終不尽。」（大正一四・五三四b）

【朝序】 朝廷の序列『晋書』陆玩伝「竟不能數融玄風、清一朝

序、啓責之来、於臣已重。」

【褒賢】 賢を賞する。『後漢書』、安帝紀「褒賢顕善。」

【賻絹】 喪主を助けるために送る絹。『後漢書』、杜詩伝 賻絹千匹。

【妃主】 後の次

【公主】 天子の女

【導引】 道案内。（南史、深高祖紀）帝所乗艦、恆有両龍導引、左右莫不見。

【千葉蓮華】 報身盧舎那仏の所坐の蓮華。（梵網経下卷）我今盧舎耶方坐蓮華台周匝千華上復現千釈迦。

【如車輪】（阿弥陀經）池中蓮華大如車輪。

（織田頭祐）

十 大周西明寺故大德圓測法師佛舍利塔銘并序

〔釋文〕

貢士宋復撰并書

法師諱文雅。字圓測。新羅國王之孫也。三歲出家。十五請業。初於常・辯二法師聽論。天聰警越。雖數千萬言。一歷其耳。不忘於心。正觀中。太宗文皇帝。度爲僧。住京元法寺。乃覽毘雲成實俱舍婆娑等論。暨古今章疏。無不閑曉。名聲藹著。三藏法師奘公。自天竺將還。法師預夢婆羅門授菓滿懷。其所證應。勝因夙會。及奘公一見。契合莫逆。卽命付瑜伽成唯識等論。兼所翻大小乘經論。皎若生知。後被召爲西明寺大德。撰成唯識論疏十卷・解深密經疏十卷仁王經疏三卷金剛般若觀所緣論般若心經無量義經等疏。羽翼祕典。耳目時人。所以贊佐奘公。使佛法東流。大興無窮之教者也。法師性樂山水。往依終南山雲際寺。又去寺三十餘里。間居一所。靜志八年。西明寺僧徒。邀屈還寺。講成唯識論。時有中天竺三藏地婆訶羅至京。奉敕。簡召大德五人。令與譯密嚴等經。法師卽居其首。後又召入東都。講譯新華嚴經。卷軸未終。遷化於佛授記寺。實萬歲通天元年七月二十二日也。春秋八十有四。以其月二十五日燔於龍門香山寺北谷。便立白塔。在京學徒西明寺主慈善法師・大薦福寺大德勝莊法師等。當時已患禮奉無依。遂於香山葬所分骸一節。盛以寶函石槨。別葬於終南山豐德寺東嶺上。法師嘗昔往游之地。墓上起塔。塔基內安舍利四十九粒。今其路幾不通矣。峭壁嶄絕。茂林鬱閉。險僻藏疾。人跡罕到。埋光蔽德。徒有歲年。孰知歸仰。由是同州龍興寺仁王院廣越法師。勤成至

願。以 大宋政和五年四月八日。乃就豐德分供養。并諸佛舍利。又葬於興教寺 契公塔之左。創起新塔。規範基公之塔。一體無異。并基公之塔。卽舊而新之。金輪寶鐸。層構雙聳。矗如幻成。其下各環以廣廡神像。崇邃左右。以附 契公焉。俾至者景慕起信。不知何時而已也。及於塔之前。創修獻殿六極。落成慶贊之日。不暇求能成文者。丐余直序其事。繫之以銘。銘曰。

貝葉西來兮。其功大。教流中區兮。斯永賴。法匠有憑兮。誠際會。香山迢遙兮。闕幽宮。豐德峻阻兮。藏靈蹤。後人依歸兮。何適從。有越作緣兮。神助力。雙塔屹立兮。基是式。以附 契公兮。豈窮極。終南相高兮。峻倚天。盛德巍然兮。銘石鐫。來者瞻仰兮。千萬年。

I

〔訓読〕

法師、諱は文雅、字は円測、新羅国王の孫なり。三歳にして出家し、十五にして業を請う。初め常・弁二法師に論を聴く。天聰警越にして、数千万言と雖も、一たび其の耳を歴れば、心に忘れず。正観中、太宗文皇帝、度して僧と爲し、京の元法寺に住せしむ。乃ち毘雲・成実・俱舍・婆娑等の論を覽、古今の章疏に暨ぶまで、閑曉せざる無く、名声諄んに著わる。三藏法師契公、天竺自り將に還らんとす。法師預じめ婆羅門の授業満懷を夢み、其の証応する所、勝因夙に會す。契公一たび見るに及び、契合して逆らう莫し、即ち命じて瑜伽・成唯識等の論、兼ねて翻する所の大小乗經論を付し、皎らかなること生知せるが若し。後召されて西明寺大徳と爲り、成唯識論疏十卷・解深密經疏十卷・仁王經疏三卷・金剛般若觀所緣論・般若心經・無量義經等の疏を撰す。秘典を羽翼し、時人に耳目たり、契公を賛佐し、仏法をして東流せしめ、大いに無窮の教えを興す所以の者なり。法師性として山水を楽しみ、往に終南山雲際寺に依り、又寺を去ること三十余里、一所に間居し、静志すること八年なり。西明寺僧徒、邀屈して寺に還らしめ、成唯識論を講ぜしむ。

時に中天竺三藏地婆訶羅、京に至る有り。勅を奉じ、簡びて大德五人を召し、与に密嚴等の經を訳せしむるに、法師即ち其の首に居る。後又召されて東都に入り、新華嚴經を講訳す。卷軸未だ終わらざるに、仏授記寺に遷化す。実に万歳通天元年（六九〇）七月二十二日なり。春秋八十有四。其の月二十五日を以て、龍門香山寺北谷に燔き、便ち白塔を立て。在京学徒西明寺主慈善法師・大薦福寺大德勝莊法師等、当時已に礼奉の依る無きを患い、遂に香山の葬所より骸一節を分かち、盛るに宝函石槨を以てし、別に終南山豊徳寺東嶺上に葬す。法師嘗昔往游の地なり。墓上に塔を起て、塔基の内に舍利四十九粒を安ず。今其の路幾ど通ぜざるなり。峭壁嶄絶にして、茂林鬱閉し、險僻藏疾し、人跡到ること罕なり。光を埋め徳を蔽い、徒らに歳年有りて、孰か帰仰するを知らんや。是に由りて同州龍興寺仁王院広越法師、勤めて至願を成す。大宋政和五年（一一一五）四月八日を以て、乃ち豊徳に就き供養を分かち、諸仏舍利を并せて、又興教寺の契公塔の左に葬り、新塔を創起するに、基公の塔を規範とし、一体として異る無し。並びに基公の塔、旧に即きて之を新たにし、金輪の宝鐸、層構双聳し、矗として幻成の如し。其の下各おの環らすに広廡を以てし、神像左右に崇邃たりて、以て契公に耐す。至る者をして景慕起信せしめ、何れの時にして已むかを知らざるなり。及び塔の前に、猷殿六極を創修す。落成慶賛の日、能く文を成す者を求むるに暇あらず、余に直だ其事を序し、之に繋ぐに銘を以てせんことを丐う。銘に曰く、

貝葉西より来たりて、其の功大なり。教は中区に流れ、斯れ永く頼る。法匠憑る有りて、誠に際会す。香山は迢遙にして、幽宮に閼す。豊徳峻阻にして、靈蹤を蔵す。後人依帰し、何ぞ適き従わん。越えて縁を作す有るは、神の助力なり。双塔屹立するは、基是れ式る。以て契公に耐すは、豈に窮極ならん。終南相高く、峻にして天に倚る。盛徳巍然たりて、石鐫に銘す。来たる者瞻仰すること、千万年なり。

【貢士】郷試に合格し、礼部試を受ける資格を得た者。
【宋復】不詳。

【請業】『礼記』曲礼「請業則起、請益則起。」

【常・弁二法師】法常・僧弁。

【正観】元号。貞観（六二七～六四九）。北宋四代皇帝仁宗の諱（禎）を避け、貞を正と表記。

【太宗文皇帝】唐の太宗の諡は文武大聖大広孝皇帝。

【元法寺】玄法寺。長安城の安邑坊に在った寺。

【勝因】すぐれた因縁。

【成唯識論疏】十卷、現欠。

【解深密経疏】十卷、正統蔵。

【仁王経疏】三卷。正統蔵。大正蔵（三三）では六卷。

【観所縁疏】二卷。現欠。

【般若心経疏】一卷。正統蔵。大正蔵（三三）『般若波羅蜜多心経賛』。

【無量義経疏】三卷。現欠。

【終南山雲際寺】終南山は長安城南郊の山。雲際寺については不詳。

【地婆訶羅】中国名は日照。『宋高僧伝』卷二に伝有り。

【龍門香山寺】洛陽郊外龍門石窟の東側に位置する寺。

【大薦福寺】長安城の開化坊に在った寺。

【宝鐸】仏殿の塔やひさしにかける大鈴。

【貝葉】写経用の樹葉。仏教のこと。

【法匠】仏法に精通している人。

【靈蹤】仏の荘嚴な妙相。

（松浦典弘）

十一 大慈恩寺大法師基公塔銘并序

〔釋文〕

朝散大夫檢校太子左庶子使持節金州諸軍事守金州刺史兼御史中丞輕車都尉賜紫金魚袋李宏慶撰

按吏部李侍郎父碣文。法師以 皇唐永淳元年仲冬壬寅日。卒於慈恩寺翻譯院。有生五十一歲也。後十日陪葬於樊川玄奘

法師塔。亦起塔焉。塔有院。大和二年二月五日。異時門人安國寺三教大德賜紫法師義林。見先師舊塔摧圯。遂唱其首。率東西街僧之右者。奏發舊塔起新塔。功未半而疾作。會其徒千人。盡出常所服玩。洎向來箕斂金帛。命高足僧令撿。俾卒其事。明年七月十三日。令撿奉行師言。啓其故塔得全軀。依西國法。焚而瘞之。其上起塔焉。又明年十月。齋行狀請弘慶撰其銘。

予熟聞師之本末。不能牢讓。師姓尉遲。諱基。字弘道。其先朔州人。累世以功名致爵祿。先考宗。松州都督。伯父鄂國公。國初有大勲力。弘道。身長六尺五寸。性敏悟。能屬文。尤善於句讀。凡經史皆一覽無遺。三藏法師玄奘者。多聞第一。見弘道頗加竦敬。曰。若得斯人傳授釋教。則流行不竭矣。因請於鄂公。鄂公。感其言奏報。天子許之時。年一十七。既脫儒服。披緇衣。伏膺奘公。未幾而冰寒於水矣。以師先有儒學詞藻。詔講譯佛經論卅餘部。草疏義一百本。大行於時。謂之慈恩疏。其餘崇飾佛像。日持經戒。瑞光感應者。不可勝數。

嗟乎。弘道。其家世在朔漠。宜以茹毛飲血。鬪爭斂戢。背義妄信爲事。今慕浮屠教。苦節希聖。采入其奧。与夫鄂公。佐聖立國。公成身退。出于其類。爲一代賢人。實稟閒氣。習俗不能染也明矣。退爲銘曰

佳城之南兮面南山。玄奘法師兮葬其閒。基公既歿兮陪其後。甲子一百兮四十九。碣文移入兮本寺中。曇景取信兮田舍翁。義林高足兮曰令撿。親承師言兮精誠感。試具畚鍤兮發玄堂。全身不朽兮滿異香。銘誌分明兮是弘道。齒白骨鮮兮無鎖耗。瑞雲甘雨兮晝濛濛。神祇悉窅兮羅壽宮。依教茶毘兮得舍利。金瓶盛之兮埋厚地。建塔其上兮高巍巍。銘勒貞石兮無媿辭。深谷爲岸兮田爲瀛。此道寂然兮感則靈

左街僧錄勝業寺沙門體虛 前安國上座沙門智峯 右街僧錄法海寺賜紫雲瑞

安國寺上座內供奉內外臨壇大德方璘

寺主內供奉灌頂 都維那內供奉懷津 院主曇景

同勾當僧懷眞 德循 惠阜 惠章

興教寺上座惠溫 寺主超願 都維那全契

僧道榮 僧道恩 僧瓊播 義方 巡官宋元義

安國寺内供奉講論大德建初書

開成四年五月十六日講論沙門令檢修建

I

〔訓読〕

大慈恩寺大法師基公塔銘并序

朝散大夫・檢校太子左庶子・使持節金州諸軍事・守金州刺史・兼御史中丞・輕車都尉・賜紫金魚袋・李弘慶撰

吏部李侍郎父の碣文を按ずるに、法師は皇唐の永淳元年（六八二）仲冬（十一月）壬寅日（十三日）を以て慈恩寺翻訳院に卒す。有生、五十一歳なり。後十日して樊川（陝西省長安県）の玄奘法師の塔に陪葬し、亦た塔を起つ。塔に院有り。太和二年（八二八）二月五日、異時の門人安國寺三教大德賜紫法師義林、先師の旧塔の摧圯せるを見、遂に其の首に唱えて、東西街の僧の右なる者を率いて、旧塔を發き新塔を起さんことを奏す。功未だ半ばならずして疾作る。其の徒千人を会し、尽く常に服玩する所を出す、向來の箕斂金帛に洎ぶ。高足の僧令檢に命じて、其の事を卒えしむ。明年（大和三年 八二九）七月十三日、令檢、師言を奉行せんとして、其の故塔を啓き全軀を得。西国の法に依り、焚きて之を瘞め、其の上に塔を起つ。又た明年（大和四年 八三〇）十月、行狀を齎して弘慶に其の銘を撰することを請う。

予、師の本末を熟聞するに、牢讓するあたわず。師、姓は尉遲、諱は基、字は弘道。其の先は朔州人（山西省）なり。累世、功名を以て爵禄を致す。先考は宗、松州（四川省）都督なり。伯父は鄂国公、国初に大勲力有り。弘道、身長六尺五寸、性は敏悟にして、能く属文し、尤も句読を善くす。凡そ経史は皆な一覽せば遺るるなし。三藏法師玄奘は、多聞第

一なり。弘道を見て頗る竦敬を加へて曰わく、若し斯人を得て釈教を伝授せば、則ち流行は竭きざらんと。因りて鄂公に請う。鄂公、其の言に感じて奏報す。天子之を許す。時に年一十七なり。既に儒服を脱ぎ、緇衣を披、奘公に伏膺す。未だ幾くならずして、氷の水より寒きがごとし。以えらく、師は先に儒学詞藻有り。詔して、仏経論卅余部を講訳せしめ、疏義一百本を草す。大いに時に行わる。之を慈恩疏と謂う。其の余、仏像を崇飾し、日び経戒を持し、瑞光感応、勝げて数うるべからず。

嗟あ、弘道、其の家は世よ朔漠に在り、宜しく茹毛飲血、鬪争殺戮、背義妄信を以て事と為す。今、浮屠の教を慕い、苦節もて聖を希い深く其の奥に入る。夫の鄂公と、聖の国を立つるを佐け、公成りて身退く。其の類より出で、一代の賢人と為る。実に間稟け、俗に習ふも染むるあたわざるや、明かなり。退きて銘を為りて曰わく。

佳城の南、南山に面す、玄奘法師、其の間葬らる。基公既に歿し、其の後に陪す、甲子一百にして、四十九なり。碣文移入し、本寺中にあり、曇景信を取り、田舎の翁に。義林の高足、令檢と曰ふ、親ら師言を承けたまわり、精誠感ず。試みに舂鍤を具えて、玄堂を発す、全身朽ちずして、異香満つ。銘誌分明なり、是れ弘道。齒白骨鮮、鎖耗なし。瑞雲甘雨、昼濛濛、神祇悉く空にして、寿宮に羅なる。教に依り茶毘し、舍利を得、金瓶もて之を盛り、厚地に埋む。塔を其の上に建て、高きこと巍巍たり、銘は貞石に勒し、瑰辭なし。深谷、岸と為り、田、瀛と為るも、此の道は寂然として、感ずれば則ち霊あり。

左街僧録勝業寺沙門体虚 前安国上座沙門智峯 右街僧録法海寺賜紫雲瑞

安国寺上座内供奉内外臨壇大德方隣

寺主内供奉灌頂 都維那内供奉懷津 院主曇景

同勾当眞 德循 惠阜 惠章

興教寺上座惠温 寺主超願 都維那全契

僧道栄 僧道恩 僧瓊播 義方 巡官 宋元義

安国寺内供奉講論大德建初書

開成四年（八三九年）五月十六日講論沙門令檢修建

〔語釈〕

【李弘慶】『新唐書』卷七十二上「弘慶。金州刺史。」

【李义】『旧唐書』卷一〇一「李义。本名尚真。趙州房子人也。」

（略）义知制誥凡数載。景雲元年（七一〇）遷吏部。『新唐書』卷一九「韋氏之變。詔令嚴促。多义草定。進吏部侍郎。仍知制誥。」

【皇唐永淳元年仲冬壬寅日卒於慈恩寺翻訳院有生五十一歳也】
 『宋高僧伝』卷四窺基伝「以永淳元年壬午示滅。至十一月十三日。長往于慈恩寺翻経院。春秋五十一。法臘無聞。」（大正五〇・七二六b）『広清涼伝』卷下窺基伝「於永淳二年蟬蛻去爾。」（大正五一・一一一九b）

【安国寺三教大德賜紫法師義林】劉軻撰「大唐三藏大遍覚法師塔銘并序」「肅宗賜塔額。曰興教。因為興教寺。寺在少陵原之陽。年歳浸遠。塔無主。寺無僧。荒涼殘委游者。傷目長慶初有納衣僧曇景始葺之。大和二年。安国寺三教談論大德内供奉賜紫義林。修三藏忌斎于寺齋衆方食見塔上有光円如覆鏡道俗異之林乃上聞乃与両街三学人共修身塔兼募一石於塔至三年修畢林乃化遺言於門人令檢曰。爾必求文士銘之。檢泣奉遺教直以銘為請非法胤之冢嫡誰何至此乎軻三讓不可乃略而銘之。」（金石萃編『卷一一三）

【賜紫】『大宋僧史略』卷下「賜僧紫衣」の項目あり。（大正五四・二四八c）

【令檢】『宋高僧伝』卷四「窺基伝」には「大安国寺沙門令檢校塔亭。徙棺見其基齒。有四十根不断玉如。」（大正五〇・七二六c）

【太和三年】『仏祖統紀』卷四十二「（太和）四年。引駕大師義林奏修慈恩塔。開冢之日異香襲人。真身側臥甕臺。具四十齒。容相如生。甕上金色苔厚二寸。如瑞芝状。」（大正四九・三八五a）

【三藏法師玄奘者。多聞第一。見弘道頗加疎敬。曰。若得斯人。伝授釈教。則流行不竭矣。因請於鄂公。鄂公感其言奏報。天子許之。時年一十七】『宋高僧伝』窺基伝「奘師始因陌上見其眉秀目郎拳措疎略。曰將家之種不謬也哉。脱或因縁。相扣度為弟子。則吾法有寄矣。（中略）遂為北門將軍。微諷之出家。父曰。伊類龜悍那勝教詔。奘曰。此之器度非將軍不生。非某不識。父雖然諾。基亦強拒。激勉再三。拜以從命。（中略）至年十七。遂預悍悍繙林。及乎入法。奉勅為奘師弟子。」（大正五〇・七二五b c）

【氷寒於水】『荀子』勸学「青。取之于藍。而青于藍。冰。水為

之。而寒于水。」

【慈恩疏】『宋高僧傳』窺基傳「造疏計可百本。」(大正五〇・七二五c)

【其余。崇飾仏像。日持経戒。瑞光感應者。不可勝数】『宋高僧傳』窺基傳「基生常勇進。造弥勒像。对其像日誦菩薩戒一遍。願生兜率。求其志也。乃発身光瑞。爛然可觀。復於五台造玉石文殊菩薩像。写金字般若経畢。亦発神光焉。」(大正五〇・七二六b)

【茹毛飲血】『文選』序「式觀元始。眇覩玄風。冬空夏巢之時。茹

毛飲血之世。世質民淳。斯文未作。」

【伯父鄂国公】尉遲恭。字は敬徳。『旧唐書』卷六十八。『新唐書』卷八十九。

【公成身退】『老子』第九章「持而盈之。不如其已。揣而銳之。不可長保。金玉滿堂。莫之能守。富貴而驕。自遺其咎。功遂身退。天之道。」

【雲瑞】『仏祖統紀』卷四十二「開成元年。勅沙門雲瑞充左右街僧録。」(大正四九・三八五b)

(島津京淳)